

---

# RPGで一番大切なもの

□□

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

RPGで一番大切なもの

### 【Nコード】

N1669L

### 【作者名】

□□

### 【あらすじ】

「あなたにとってRPGで一番大切なものはなんですか？」

## レベル0 ゲームを始める前に

「あなたにとってRPGで一番大切なものはなんですか？」  
機械的な女性の声が俺に質問を投げかける。  
ちよつと間をおいてから4つの選択肢が目の前に現れた。

- 1 / 攻撃力
- 2 / 防御力
- 3 / 知力
- 4 / 素早さ

オリジナルオンライン。

半年ほど前にできた多人数同時参加型オンラインRPG、まあいわゆるMMORPGというやつである。

このオリジナルオンラインは、ここ半年で他のMMORPGを抜き去り、人気No.1で物凄い数のプレイヤーがプレイしているらしい。

この人気の理由には色々あるだろうが、まあ間違いなく1番の理由はゲームシステムだろう。

ゲームの名称の由来でもあるらしいが、自分だけのオリジナルキャラクターが作れるだ。

作れると言っても自分が好きなように作れるわけじゃない、ほぼ限りなくランダムなのだ。

最初で男か女かを選ぶことができるが、髪型、髪の色、目、目の色、口、鼻、耳、体系、肌の色、すべてがランダム。

それだけではない、覚えるスキルやステータス、装備できるものまでもランダムらしい。

つまり、戦士タイプで剣しか装備できないのに魔法スキルしかない、という雑魚キャラが生まれる可能性があるわけだ。

しかもこのゲーム1人1キャラしか作ることができない、キャラを消すのに1週間かかるらしい。

普通のMMORPGではまずこんなシステムにはしない、なぜなら強いやつと弱いやつとの差が大きすぎるからだ。

強いやつはとことん強いが、弱いやつはとことん弱い。

ただスキルの数が物凄いらしく、レアスキルやら1つしかないスキルやらがかなりの数あるらしい、だから運悪く弱いキャラになったやつでも続けているのかもしれない。

このゲームができた当初は絶対人気はでないだろうと踏んでいたのだが、まったくの間違いだったわけだ。

ここまで人気が出たらやらない訳にはいかない、昨日までやってきたゲームをやめてこのオリジナルオンラインを始めたというわけだ。

「うーん」

ゲームを開始して最初に質問がいくつかあり、その質問の答えによってキャラの能力が決まっていくと公式サイトに書いてあったが、まさかこんなストレートな質問とは。

おそらく攻撃力を選べば攻撃型の戦士タイプ、防御力を選べば防御型の戦士タイプ、知力なら魔法使い、素早さなら盗賊みたいな感じだろう。

限りなくランダムだと聞いていたから、どんなタイプになるのかもわからないんだろうと思うていたが、案外そうでもないのかもし

れない。

1キャラしか作れないのでここは適当には選べない、基本的にはPTを組んでやるうとは思っていないので下2つの知力と素早さは除外する。

魔法使いや盗賊といったキャラはソロではなくPTで活躍するタイプだというのが一般的だと思う。

ということとは……。

「攻撃力が防御力だな」

他のやつはどうか知らないが俺はRPGで攻撃力が防御力どっちがいいと言われたら……。

「やつぱここは攻撃力だな」

4つの選択肢の攻撃力を選ぶ。

「あっ！」

たまにやってしまうことがあるだろう、行きすぎて選択肢を間違っって押してしまうことが。

一番上の攻撃力からさらに上に行こうとすると、一番下の選択肢にいつてしまうのだ。

「しまった！」

機械的な女性の声が次の質問をしてくる。

「道が3つに分かれています、右、中央、左、あなたはどこへ行きますか？」

「ちよ！ もどるは！？ もどるはないの！？」

俺の叫びを無視して新たな選択肢が現れる、どうやら戻るいう選択肢はないらしい。

「はあー、戻れないのかよどうしようかな」

どうしようと言ったものの、新たなキャラを作るのに1週間かかるので、もうこのまま行くしかない。

やる気がそがれたので質問には適当に答えていくことにした。

「それにしても質問多すぎだろ」

これでいったい何度目の質問だろうか、途中からめんどくさくなって数えるのをやめたがたぶん30〜40だろう。

そういえば質問数もランダムだと書いていたような気がするがさすがにこれは多すぎる。

「最後の質問です、あなたにとってRPGで一番大切なものはなんですか？」

最後という言葉に喜んだものの、まさか同じ質問がくるとは予想外である。

まあでもここで最初の失敗を取りかえそう、今度こそ攻撃力を選んでやる。

目の前に選択肢が現れる。

1 / 素早さ

2 / スピード

「選択肢ちがうじゃねえか！　というかどっちも一緒じゃね!？」

思わず叫んでしまったがコンピューターは相変わらず無視である。

これどっち選んでも一緒じゃないんだろうか。

素早さとスピードの違いをしばらく考えてみたもの特に思いつかなかった、俺の語学力がたりないからだろうか？

まあたいして変わらないので適当に素早さを選ぶことにした。

「質問はこれで終了です、それではオリジナルオンラインをお楽しみください」

目の前がゆっくりと白く染まっていく、おそらくゲームのスタート地点に飛ばされるのだろう。

30分近く聞いていた声に別れを言う暇もなく目の前の世界が完全に白く染まった。



## レベル0 ゲームを始める前に（後書き）

初めて書いてみましたが、自分の文章力の無さに涙が出ます。  
たぶん続きます。

## レベル1 スライム決戦

見渡す限りの高原、というわけではなく後ろの方には不気味な森が広がっている。

ここはゲームのスタート地点なわけだが。

「普通最初って街からじゃないの」  
「どうかここいったいどこなんだよ。」

マップ見てみたのだが、どうやら自分が行ったことのある所しかわからないようになっていいるらしく、ここがどこなのかまったくわからない。

ゲームを開始して10分、取りあえず自分のステータスやら見た目やらを確認してみた。

体型は中肉中背よりはちょっと細めだろう、髪と目の色は黒で顔はそこそこイケメンだ。

能力もそうだが見た目もランダムなため、必ずしもかっこいいとかかわいいキャラになるとは限らない。

なのでこのキャラは見た目に限っては当たりなのかもしれない。ステータスは予想通り素早さが一番高い、他のステータスは他の人のステータスを見たことが無いので、高いのか低いのかよくわからなかった。

「このゲーム結構不親切だな」  
マップが自分の行ったとこしかわからないというのもそうだが、初期装備がないのだ。

スタート地点が街ならそれでもいいが明らかにちがうだろう、遠くのほうにMOB……モンスターがいるのが見える、素手で殴れということだろうか。

それだけじゃない、スキルを1つだけ覚えていたのだが説明文が

ない。

加速 と書いてあるスキルの説明文の欄になにも書いていないのだ。

スキルの名前に自分の素早さを上昇させるとかいう感じのやつだろうだとは思っただが。

半年たつんだから説明文ぐらい直しとけよ運営。

まあここでじっとしててもしょうがないので移動することにした、取りあえずは町を目指そうと思う。

後ろにある森はさすがに行く気がしないので反対側に向かって歩き出す。

しばらく歩いていくと遠くに見えていたモンスターの姿がはつきりと思えてくる。

茶色の毛をまとった小型の猪のようなモンスターだ、頭の上にモストと書いてある、いかにも初期のモンスターという感じだ。

やはりRPGで一番楽しいのは戦闘だろう、高レベルになると戦闘が流れ作業になったりしてしまうため初期あたりの戦闘が一番楽しいと思っっている。

「ブグアアアア!!!」

モンスターの範囲内に入ったのかモストという名の猪が何かを叫びながらがこつちに向かって突進をかけてくる。

「さてと、初戦闘と行きますか!」

なめてもらっては困る、それでもRPGはかなりの数こなしてきたのだ、初期の雑魚のごときに負けるわけがない。

突進してきた猪を余裕を持って右側に避ける、取りあえず武器がないので素手で殴るしかないが、なんとかなるだろう。

猪がこちらに向き直り避けられたことを苦にすることなくさらに突進をかけてくる。

実はさっきから1つしかないスキルを使いたくてもしょうがなかつ

た、モンスターのいない所で使ってみたのだが何も起きなかった、おそらく戦闘でしか使えないスキルなのだろう。

「いくぞ、加速！」

見渡す限りの高原、というわけではなく後ろのほうに不気味な森が広がっている。

ここはゲームのスタート地点なわけだが。

「……どんだけだよ」

ゲームを開始して20分近くたっているだろうか。

「どんだけ紙なんじゃぼけー！」

全力で叫んでみたものの、まあ誰も答えてくれる人はいない。

先ほどの戦闘だが、スキル名を言う必要もないのに調子に乗って加速！などと叫んだものの、スキルは発動せず、そのまま猪の突進をまともに食らってHPが0になり死亡してしまった。

そしてスタート地点に戻されたわけだ。

しかしまさかまともに食らったとはいえ初期の雑魚的一撃で死ぬとは、どんだけ防御力低いんだよ。

たしかに全能力と比較したら防御力低いけどこれはあんまりじゃないだろうか。

「くそ、リベンジだリベンジするしかねえ」

初期の雑魚的、言わばスライムだ。スライムごときに負けっぱなしというわけにはいかん。

大丈夫、さつきはスキルが発動しないことに動揺して攻撃を食らってしまったがスライム自体のスピードは速くないのだ、油断しなければ避けるのは難しくない。

敵の攻撃さえ当たらなければこっちに負けはない。

あのスキルはあとで考えると、とりあえずは己の拳のみで攻撃しよう。

「よし、いくぞスライム！」

俺の中で猪の名前は完全にスライムになってしまった。

スタート地点から全力でスライム目掛けて走り出す。

見渡す限りの高原、というわけではなく後ろのほうに不気味な森が広がっている。

ここはゲームのスタート地点なわけだが。

「……」

ゲーム開始から30分近くたっているだろうか。

「このゲーム俺のこと嫌いなのかな」

スライムとの第2戦。

スライムの突進を避けては殴る避けては殴るを繰り返し、あと一撃か二撃で倒せるとこまでやつを追い詰め勝利を確信していた、後ろから別のスライムが突進をかけてくるまでは。

1匹目のスライムの攻撃を避けるのに夢中で、2匹目の範囲内に入った事に気づかなかつたのだ。

そしてスタート地点に戻されたわけだ。

「もういいや、モンスター全部無視して街に行こう」

スライムへのリベンジは装備を整えてからすることにして街を目指そう。

とはいえ攻撃を食らったら一撃で死ぬのだ、街に着くまでひたすら逃げ切れるだろうか。

「俺の素早さ見せてやるぜ」

やけくそ気味につぶやきながら走り出す。

スライムの間を縫うように走り抜けていく、どこに街があるのかわからないが俺の感がこっちだと言っている。

しばらく走り結構な数のモンスターを抜きさつていったわけだが、走る俺の後ろからすごい数の足音やら泣き声やらが響いてきている。怖くて後ろを見れなかったが、勇気を持って後ろを振り向いて見ることにした。

「ぎゃーー!!」

予想以上のモンスターが追いかけていた、スライムじゃないモンスターも混ざっていたような気がする。

さらにスピードを上げようと前に向き直る。

いままさに突進をかけようとしているスライムが数m先にいた。

「危な! まじ危ねーよ! 死ぬとこだったよ!」

ぎりぎりの所で何とか避けることに成功した。

またスタート地点に戻されるのはごめんである。

攻撃を避けられたスライムが他のモンスターと合さってさらに大変なことになってしまった。

もう後ろは振り向かないと心に誓い、全力で走り出す。

「俺の素早さなめんなよー!」

このゲーム絶対俺のこと嫌いだろ。

## レベル1 スライム決戦（後書き）

なんとかか2話目を書けました。  
たぶんまだ続きます。

## レベル2 ひのきのぼうと布の服

「はあ、はあ、はあ」

肩で息をしながら周囲を見渡す。

「どうやら巻いたようだな、しつこいやつらだったぜ」

周囲にモンスターがいないことを確認してその場に座り込む。

しばらく続いたモンスターとの死闘（追いかっこ）を潜り抜け、なんとかここまで来たのだが、街らしき物は全く見えない。

これでも感だけで走ってきたわけではない、逃げながらモンスターの少ないほう少ないほうへ向かったのだ。

街に近づけばモンスターの量が少なくなっていくんじゃないかと思っただが、当てが外れたかもしれない。

しばらく休憩したあと、また街を目指して歩き出す。

「それにしても、いい天気だね」

歩きながら雲ひとつない空を見上げてつぶやく、ここ辺りはモンスターも少ないので余裕をかましても大丈夫だろう。

ゲームスタート地点では東の方に見えた太陽が真上に移動している、どうやらゲーム上では現在正午らしい。

スタートから約1時間がたっている、太陽の移動した距離からしてたぶん昼の間は5時間〜6時間ぐらいだろう、ということはあると、2、3時間ほどで夜になるということだ。

まあ夜になったからといって別に困ることはないだろうが、もしかしたら夜の間はモンスターが強くなるとか、モンスターの数が多くなるとかいう可能性がある。できるなら明るいうちに街にたどり着きたい。

そんなことを考えながら歩いていると、数十メートル先の方にいるスライムと目が合ってしまった。

だがスライムはまったくこっちに気づいていないかのように180度向き直り、尻をこちらに向けてしまう。

基本的に叫ぼうが目が合おうがモンスターの索敵範囲に入らなければモンスターに気づかれることはない。

幾度となく逃げ続けてきたのでスライムの索敵範囲はほぼ熟知している、範囲内に入らなければスライムなど怖くはない。

索敵範囲内に入らないよう大回りしながら進んでいく。

スライムの真横ぐらいまで移動した時だろうか、突然スライムがこちらを目掛けて走り出した。

「ちょ！ まじでか！」

「ブゲアアア！」

モンスターはプレイヤーを見つけるとランダムで移動するのだ、突然予期せぬ方向に走り出すことも……。

スライムに背を向けて全力で走り出す。

戦おうかと一瞬思ったが、またスタート地点に戻されるのはごめんである。

しばらく追いかけて続いていると、遠くの方に人影が見えてくる。

「人！？ ヘルプ！ ヘルプー！」

人影は俺の叫び声に気づいたのかこちら側を向く。

体格は大柄で身長はかなり高い、俺よりも頭一つ大きいだろうか。

「すいません！ 助けてください！」

「私の後ろへ！」

見ただけで状況が分かったのか持っている片手斧を構えながら指示を示してくる。

お言葉に甘えて大柄な体の後ろに回りこむ。

俺を追ってきたスライムが途中に入ってきた大柄な障害物に向かって突進をかける。

大柄な男は突進してきたスライム目掛けて振り上げた斧を振り下ろす。

ドン！！

すごい音とともに斧の直撃を食らったスライムが消滅する。

「すごい！」

あ、あのスライムを一撃で粉碎するとは！

男はスライムを倒した斧を収めてこちらに話しかけてくる。

「大丈夫でしたか？」

髪の色は赤く顔の横に縦の傷が付いている、まさしく歴戦の戦士のような顔である。

「ありがとうございます、まじで助かりました」

「いえいえ、たいしたことじゃありませんよ」

顔は怖いがかなりいい人みたいである。

「いや、ほんと助かりました。ところでさっきのスライム倒したやつってスキルかなんかなんですか？」

「スライム？」

そうだったあの猪たしかスライムって名前じゃなかった。

「えーと……モスト？ そうモストを倒したやつです」

「あー、あれはバーストクラッシュっていう斧スキルですよ」

「へー、すごい威力ですね！」

「ははは、そんなたいしたスキルでもないですよ」

いや素手の俺から見たらすごいんだが。

「でもどうしたんですか？ 武器も持たないで」

「実はついさっき始めたばかりなんですけど、街の場所が分からなくて」

「ん？ さっき始めたって街からスタートしたんじゃないんですか？」

「いや、それがなんかモンスターが普通にいるフィールドから始まったんですよ、しかも初期装備一切なしですよ」

スタートからここまでの経緯を説明する。

「そうなんです、私も最近始めたんですけど私は街がスタート地点でしたよ」

「え、じゃスタート地点もランダムってことですかね」

「んー。そんな話は聞いたことないですけど、そういうパターンも

あるのかもしれないですね」

「はー、なるほど」

やっぱりこのゲーム俺のこと嫌いだな。

「あの、街の場所を教えてもらえないですかね」

いい加減街に行つて装備を整えたい、スライムにいつまでもびくびくしていられん。

「私も今から街に行くところだったんですよ、一緒に行きましょう」

「本当ですか、助かります」

「ここから街まですぐですよ、行きましょう」

かなり街に近づいていたようだ、どうやら俺の感は結構当たっていたようだな。

「あ、そういえば自己紹介がまだでしたね。私はオルガ、よろしく」  
オルガ……なかなかに見た目に合った名前である。

「俺は……」

このゲーム色々とランダムに設定されるのだが、名前はランダムじゃなくてもいいと思う。

「……ロメダ」

「え？ ごめん聞こえなかった」

聞こえないように言ったんだが、はっきりいってこの名前あんまり教えたくない。

「えーと……ロメダ」

「え？ ロダ？」

「そ、そうロダ！ ロダって言うんだ。よろしくオルガ」

よし、とっさに思いついたにしてなかなかだ、これからはロダと名乗ろう。本名は心の奥に封印しておこう。

しかしゲーム内で偽名名乗るってどうなんだろうか、まあ気にしたら負けだな。

オルガとともに街に向かって歩き出す。

サマルガルド。

初めてゲームをしたプレイヤーの最初の（例以外もいるらしい）スタート地点の街である。

プレイヤーからは最初の街とも呼ばれてるらしい。

門を抜けたところにある街のマップを見てみたが街の出入り口は3つあり、街自体はかなりの広さがあるようだ。

街から街へはワープで移動できるらしい（行ったことのある街じゃないとワープできないらしい）、サマルガルドはゲームの中心近くにあるらしく色々な所にワープできるとかで、かなりのプレイヤーが拠点にしているらしい。

入り口から見ただけでも結構なプレイヤーが見える。

「ああー、やっと着いた」

なんか街に行くだけでかなり疲れた。

「ここまで来れば大丈夫だよ、私はちよつと行く所があるから」

「そか、色々ありがとう助かったよオルガ」

「最初は色々大変だけどがんばってね、またなんか分からないことがあったらメールして」

「ありがと」

歩き去っていくオルガに手を振って別れを告げる。

メールか、あとで送り方ヘルプで見とこう。

「よしいくか」

色々と街を見て回りたいが街にきたらまずは武器屋か防具屋だろう、当然だ。

マップで場所は確認済みなので迷うことなくまっすぐに向かう。

街にいるプレイヤーはかなりやり込んでそうなやつやら、俺同様に初心者まるだしのやつやらであふれている。

さすがは人気No.1ゲーム、かなりのプレイヤーがINしている。

目的の武器防具屋には何人かのプレイヤーが装備品を選んでいた。

オルガに聞いた話だがサマルガルドには武器屋と防具屋が2件あるらしい。

1つは今俺がいる武器屋と防具屋が一緒になった初心者向けの店、もう1つはここからちよつと離れたところにある中級者向けの店だ。

中級者向けの店は武器屋と防具屋が別々にあるらしい。

ノンプレイヤーキャラクター

とりあえず武器屋のはげたNPCのおっさんに話しかけてみよう。

「いらつしゃい。武器や防具はキャラクターによって装備できるのが決まってるんだ、ステータス画面で確認してみてください」

NPCおっさんが親切に説明してくれた。

「そうだった、俺何が装備できるか見てなかった」

とりあえず自分のステータス画面を開いてみる。

「……………」

あれ？ 自分の装備できるやつを確認すら画面で剣やら槍やらいるんなマークがあるけど、どれも光っていないんだが？

いや腕の形をしたマークが1つだけ光っていた。

これってもしかして素手？ 素手のみ？

「ねえおじさん、おれ素手のみなの？ ねえおじさん」

「いらつしゃい。武器や防具はキャラクターによって装備できるのが決まってるんだ、ステータス画面で確認してみてください」

「そんなこと聞いてねーだろうが！」

NPCのおっさんに八つ当たりをかます。

基本的にNPCに話しかけても決まったことしか言わない。

防具にいたっては何も光っていない、なにも装備できないということか。

そうかー、装備できるものがなかったから初期装備がなかったのかー。

なんか涙出そう。

装備できないとは知りつつも店の品物を確認する。

「こ、これは！」

店の奥の奥に2つの装備品を見つけた。

「ひ、ひのきぼうと布の服だと！」

オリジナルオンラインとかいうわりに思いっきりパクリじゃねえか。

ひのきのぼうと布の服の説明欄には、全プレイヤー装備可能、と書かれている。

「なにー！」

きつと俺みたいなのにも装備できないやつ用に用意された装備なのだろう。

運営ありがとう、本当にありがとう。

さっそく今現在の最強装備である2つの装備を買う。

「ゴールドが足りなくて買えないよ」

「……」

NPCのおっさんがやさしく教えてくれる。

おっさんを殴りたい衝動を無言で抑え込む。

最初何回か死んだせいでお金が減っているようだ、ひのきのぼうかぬののふくどちらかしか買えない。

「くっ、どっちを買うか」

まさかひのきのぼうと布の服どちらを買うか迷う日が来るとは思わなかった。

布の服を装備したからといってスライムの攻撃に耐えられるとは思えない、やはりここは。

「ひのきのぼうください」

「ありがとう、また来てくれよ」

八つ当たりをしたにもかかわらず、なんてやさしいおっさんだろうか。

さて、装備も整えたことだしやることは決まっている。

情報収集？ ク工探し？ そんなもんは後回しだ、まずはスライムのやつをぶっ倒す。

「ふふふ、このひのきのぼうさえあればスライムなど瞬殺だぜ」

ひのきのぼう片手に街の入り口目掛けて走り出す。

その後スライムを倒す事に成功するが、調子に乗って複数同時に戦いスライムに3度目の敗北をしてしまう。

そして敗北後街でセーブしていなかったことを激しく後悔することになる……。

## レベル2 ひのきのぼうと布の服（後書き）

遅くなりましたが何とか続きを書けました。

一応ここでプロローグ的なやつは終了です。

次はできるだけ早く更新したいな……。

### レベル3 初心者狩り

スズメの涙、サマルガルド中央広場からすこし西に行ったところにある小綺麗な宿屋である。

このスズメの涙では宿屋業だけでなく街路に張り出した喫茶店、まあ俗に言うカフェテラスも兼ねて営業している。

ゲームを始めて今日で1週間目になるだろうか、スズメの涙で休憩がてらアイスコーヒーを飲むのがすっかり日課になってしまった。ゲームだから飲み食いしても腹はふくれないのだが、まあ気分の問題だろう。

この1週間で俺もそこそこ成長したろうか、今現在の最強装備（ゲーム内ではおそらく最弱装備）であるひのきのぼうと布の服を装備し、スライムくらいなら2、3匹同時（スライムの攻撃3回食らったら死にますが）に相手にできるようになった。

レベルも多少は上がったが、すぐ死ぬのであんまり上がっていない。

スキルにいたっては新しく覚えた物はなし、最初にあるスキルの使い方もまだ判明していない。

こうやって振り返ってみるとあんまり成長していない気がする……。

うん、スライムを倒せるようになっただけでも十分成長してるな、そういうことしておこう。

しかし使えるスキルがないというのはかなりきつい、通常攻撃のみでどこまで行けるだろうか。

ヘルプなどで調べてみたが、スキルには3種類存在する。

まずはこのゲームの要と言ってもいいであろうオリジナルスキルだ。

最初に説明した用にオリジナルスキルはランダムに覚えるスキル

で、かなりの種類があるらしくレアスキルやらも多数存在するらしい。オリジナルスキルを覚えられないプレイヤーもいるとかいないとか。ちなみに俺には使い方が分からないが“加速”というスキルがある。次は補助スキルだ。

補助スキルと言っても回復とか蘇生とかいう補助ではない、このスキルは店で買ったたりクエストの報酬で貰えたりするスキルで、オリジナルスキルがないやつとか使えるのがないやつの為の補助スキルなのだ。武器屋や道具屋のようにスキル屋という店がありそこで購入可能だ。でもこの補助スキルは威力が乏しかったりモーションが遅かったりしてオリジナルスキルに比べて使い勝手はあまりよろしくない。まあ他にスキルがないプレイヤーにとってはありがたい代物だろう。

ちなみにこの補助スキルは非常に高い、ゲームを始めて1週間の俺には手が出せる代物じゃない。

最後は技術スキルだ。

技術スキルは料理とか錬金とか投てきとか言ったスキルだ、これは全プレイヤー最初から覚えている。成長速度だとか限界成長値はランダムらしい。

と、まあこれが調べた結果である。

補助スキルはお金が足りないし、技術スキルは使えるがレベルが低いし戦闘にあまり役立つスキルでもないのであまり上げる気はない。

要するに今はレベル上げと金貯めをしないとスキルはどうにもならんわけだ。

テーブルに置いてあるアイスコヒーをズズーっと啜る。

なんとなく通りの方に目をやると、見慣れたやつがこっちに向って来るのが見える。

「あいつまた来たのか」

めんどくさそうに呟く。

そいつは迷う事無くまっすぐにこちらへ向って歩いて来る。

「やほ、相変わらずここでダラダラしてるわね」

身長は俺より少し低めで、茶色の髪を肩まで伸ばしている。見た感じ15、6才といった所だろうか、パツチリとした目が特徴的な美人というよりはかわいいといった感じの女性キャラだ。

かなり周囲から目立っている、目立っているのはその容姿のせいではない。

「おまえも相変わらずすごい格好だな」

目立っているのは容姿ではなくその格好、セーラー服だ。

「このアバターはウチのギルドの正装よ」

そう言つと勝手にテーブルの向かいの椅子に座る。

「そんな事より、そろそろウチのギルドに入る気になった？」

この女性キャラ、茜と初めて会ったのはゲームを始めて3日目のことだった。

狩りに疲れてスズメの涙でアイスコーヒーを飲んでいた時、突然女が話かけてきた。

「こんにちわ」

「こ、こんにちわ」

突然の事でちょっと焦ったがなんとか返事を返す。

「私茜っていいいます、突然なんですけどウチのギルドに入りませんか？」

あー、ギルド勧誘か。ギルド勧誘を受けるのはこれで2回目だ、今のところギルドには入る気はないので断ろう。

「あー、すみません俺ギルドには入らない予定なんで」

これで大丈夫だろう、前の誘いもこれで断ったのだ。

「まあそう言わずに、ウチのギルド“生徒会”って言うギルドなんですけど、体験でもいいですから入りませんか？」

あれ？

「いやだから入らないって」

「まあまあ体験でいいから、ね」  
ね。じゃねえよ。

「だから入らないって」

「いいじゃん、楽しいって。それにウチのギルド結構有名なんだよ」  
「……」

めんどくさくなってきたので無言で立ち上がる。

「お断りしますー！」

そう叫びながら走って逃げ去る。

これで逃げ切ったかと思っただが、やつは予想以上にしつこかったのだ。

それからほぼ毎日スズメの涙にいてこいつが勧誘に来るようになった。

「だからずーと前から入らないって言ってるだろ」

あんまりにもしつこいので“生徒会”についてちょっと調べてみたのだが、ギルドメンバー数が4人なのにも関わらず、ゲーム内でもかなり強力なギルドらしい。特に会長ことギルドマスターはゲーム内でも最強クラスのプレイヤーの1人らしい。

「まあいいわ、気長に勧誘するから」

「大体“生徒会”は少数精鋭のギルドだろ？　なんで初心者の俺をそこまで誘うんだよ」

つまりこいつも変な格好をしてはいるが、かなりの高レベルプレイヤーなのだ。

「ん〜、感かな。今は弱っちいけどあとでかなりのやつになると私は睨んでるのよ」

「そうだといいけどな〜」

本当にそうだといいいんだけど……。

「まあそんな事より、これ見てよこれ」

そんな事って、お前はそんなことしに毎日来てんじゃねえか。

茜はそう言うど手に持っていた紙切れを俺に渡してくる。

紙切れには「被害者続出!? 初心者狩りまたも現れる!」とでかどかと書いてありその下に男性キャラのインタビュー写真が張つてある。

この紙切れは“ 新聞社” (まるまるしんぶんしゃ) とか言う物好きなギルドが発行している、  
新聞だ。

ちなみにこの オリジナルオンライン と言うのはOriginalOnlineのイニシャルであるOを オ(まる) と読んで 新聞と付けたいらしい。

新聞といつても文字でびっしりと埋まってあるわけではなく、写真をメインに最近の事件やら流行つてるものなどのニュースが書いてある、新聞といつても学級新聞のような物だ。まあゲームのシステム上それが限界だからしょうがない。

しかしこの 新聞はかなりプレイヤーが読んでいるらしい、ゲーム内で新聞を作るなど俺には考えられないが色々と情報が手に入るのでありがたいのだろう。

「初心者狩り? なにそれ」

まだ1週間しかプレイしてない俺の耳には届いていない話だ。

「知らないの? ちよつと前からレベルの高いプレイヤーが初心者だけを狙つてPKして回つてるらしいのよ」

「へへ、犯人は分かつてないのかよ?」

「それが闇の衣を装備してるらしくて、犯人がわからないのよ」  
「闇の衣?」

「闇の衣つてのは装備すると姿が真っ黒くなって誰だか分からなくなるの、夜にしか装備できないらしいけど。結構レア装備でね私も欲しいのよねー」

「ふふん、じゃ犯人分らないじゃん」

「相手のHPを0に、つまり相手を倒せば闇の衣の効果はなくなるのよ」

「じゃお前が倒して来いよ」

「何人か討伐しようとしたらしいけど高レベルプレイヤーの前には

現れないらしいわ、たぶんサーチ系のスキルを持つてるプレイヤーじゃないかって話よ」

「ふ〜ん」

興味なさそうに返事をしてアイスコーヒーをズズーと啜る。

「なに？ 全然興味なさそうね」

「まあどうせ俺には関係ないしな。そんなやつにやられるやつが悪い」

そう言っただけアイスコーヒーを全部飲み干す。

「さてそろそろ狩りにでも行きますかね」

ひのきのぼうを肩に担いで立ち上がる。

「あんたさー、まだひのきのぼう装備してんの？」

「うるせー、これしか装備できないんだから仕方ないだろ。というか俺の相棒であるひのきのぼうに文句をつけるんじゃないよ」

俺にとつて幾つもの戦場とともに戦ってきた相棒なのだ。

「本当に何も装備できないの？」

「当たり前だ、ほら見てみる」

どうだと言わんばかりにステータス画面を茜に見せ付ける。

「……」

ふふふ、言葉もでない。

「ね、ねえ」

茜がちよつと焦ったように言ってくる。

「あんた格闘のマークが付いてるじゃないの！」

「ん？ それはみんな付いてんじゃないの？」

腕の形をしたマークが光っている。

「格闘は滅多ないレア武器なのよ！」

「レア武器って殴る蹴るはみんなできるだろ」

「それはみななできるけど、格闘があるプレイヤーは素手で武器を装備したとき並みの攻撃力があるのよ」

「えー！ いやいやいやいや俺殴ってもほとんどダメージなかった」

初日のスライムとの決戦を思い出す。

「たしか格闘持ちは師匠と弟子の2パターンあって、師匠は即格闘を発動できるけど弟子は師匠持ちのプレイヤーの弟子にならないと発動できないって聞いたことあるわ」

「弟子ってどうやって？」

「なんか師匠に弟子入りの許可をもらえばいいみたいだけど、どうやるかまでは分からないわね」

「よし、じゃあ師匠持ちのプレイヤーとか知らないのか？」

これで俺もひのきのぼうとおさらばできるぜ！ さっきまで相棒と読んでいたのはもう忘れた。

「……ごめん、私の知ってる人にはいないわね。まず格闘持ちなんてほとんどいないから」

「そ、そうか。ま、まあどっか探せば見つかるだろ」

一気にテンションが下がってしまった。

「うん、私もちょっと探してみるから」

「お、おう、まあぼちぼちでいいからな」

頼むぜー！ 俺あんまり話すの得意じゃないからまじで頼むぜー！  
言ってることは裏腹に心の中で懇願するように叫ぶ。

突進してくるスライムを左側に避け、スライムの背中目掛けてひのきのぼう振り下ろす。

「グアアアア！」

奇声あげながらスライムが消滅していく。

「ふー」

スライムとの戦闘を終え一息つく。

茜と別れたあと1人で狩りに出かけたのだ。

ここは最初のゲームスタート地点のすぐ近くの狩場だ、ここ辺りはスライムがよく沸くので、よくここでスライム狩りをしている。空を見上げるともうまもなく太陽が西に沈もうかという所だ。

「そろそろスライムも飽きたきたな」

スライムもかなりの数狩ってきたので飽きてきた、そろそろ違う狩場に移ろうかと考えながら周囲を見渡してみる。

ゲームを始めた当初は避けたが、ゲームスタート地点から街とは反対方向に森が広がっている。

「あの森にでも行ってみるか」

たしかこの森は魔性の森とか言う名前だった気がする、この森のモンスターはあまり強くないと聞いたのでたぶん大丈夫だろう。

太陽が沈んだのか辺りがゆっくりと暗くなっていく。

特にあてもないのでしばらく森の中を適当に歩きまわる。

ガサ！

後方で草が擦れる音が聞こえる、すぐに後ろを振り向くが特に何もいない。

モンスターでもいたのだろうか、念のため草むらの方へ確認に行く。

「よっ」

突然後ろから声をかけらる、びくつと後ろを振り向く。

そこには右手にギザギザに尖った大剣を握った人型の影が立っていた。

「っ！」

あまりのことに驚いてその場を動けずにいると、影がゆつとくりとこちらに移動しながら喋りかけてくる。

「おまえ、……ここで死ね！」

その言葉で茜との会話を思い出す。

(初心者狩り！)

そう理解すると同時に影とは反対方向に逃げようとするが。

「逃がすかよ」

急激にスピードを上げた影が真上に持ち上げた大剣を俺目掛けて振り下ろす。

ゴシャー！！

大剣が地面に叩きつけられる、間一髪右側に体を投げ出すように避けたのだ。

すぐに体を起こし次の攻撃に備える、あんなものかすっただけで即死だ。

影は地面からゆっくりと大剣を抜くところらに向かってさらに大剣を振るってくる。

「はっはっはっ！ 避ける避ける！」

笑いながら攻撃してくる影の攻撃を5、6撃なんとかかわしきる。  
(くそ！ こいつわざと避けられるように攻撃してやがる！)

おそらく俺が必死に避けるのを見て面白がっているのだろう。

(逃げるのは無理。だったら！)

影が右上に振り上げた大剣を振り下ろす、それをぎりぎりの所で右に避け1歩前に踏み出す。

「おらあー！！！」

ひのきのぼうを影の顔面目掛けて全力突き出す。

「ちっ！」

まさか反撃してくるとは思わなかったのか影の反応が遅れるが、ぎりぎりの所で避けられてしまう。

攻撃で体制が崩れたところに影が体当たりをかけてくる、体当たりを食らって地面に倒れこむ。

(やばい！)

倒れたまま影のぼうを見上げる、影は大剣を真上に持ち上げ今まさに振り下ろそうとしていた。

(死ぬ！)

影の大剣が俺目掛けて高速で落下してくる。

寸前の所で右手に持っていたひのきのぼうで大剣を受け止める。

バキィィ！！

ひのきのぼうが折れる音とともに右肩に鋭い衝撃が襲う。  
すぐにHPが0になり急激に力が抜けてゆく。  
遠のいていく意識の中、表情の見えないはずの影が馬鹿にするように笑ったような気がした……。

いつものようにスズメの涙で休憩がてらにアイスコーヒーを啜る。  
「今日もいい天気だな」

ぼーと空を見上げていると、通りからいつものごとく見覚えのあるやつがこちらに向かって歩いてくるのが見える。

「いたいた。聞いて聞いて格闘のことだけど知ってそうな人見つけてきたわよ」

相変わらず勝手にテーブルの向かいに座る。

「ふ〜ん」

「どうかしたの？ 元気ないみたいだけど」

「いや、別にー」

やる気がなさそうに答える。

「まあいいや、それで格闘の事だけだ。サマルガルドの南東の端に小梅って言うプレイヤーが経営してる昼行灯って店があるのよ」

プレイヤーはお金を払えば自分のホームを買うことができる、まあかなりの金額が必要だが。

「そこ普通の店らしいんだけど、裏で情報屋をやってるらしいのよ」

「情報屋？」

視線を空から茜に移す。

「そう、ほとんど知られてないらしいけどかなり腕の立つ情報屋みたいで、大抵の情報は手に入るらしいわ」

「ならそこで初心者狩りの情報も手に入るか？」

「初心者狩り？ 手に入るとは思うけど。急にどうしたの？ 昨日は全然興味なさそうだったのに」

そう言いながら何かに気づいたような顔をする。

「あんたまさか……」

「いや、ちがうよ！ ちがうって！ ただ俺は楽しんでゲームをしてる人を弱いもの虐めみたいにPKして回るやつが許せないだけだよー！」

「昨日と言ってることが間逆なんだけど」

疑わしそくにじーとこつちを見てくる茜からサツと目をそらして答える。

「昨日の俺はどうかしてたんだよ、うんきつとそうだよ」

「……まあそういうことにしといてあげるわ」

「じゃ早速だけど俺その昼行灯って店に行ってみるわ」

そう言っただけのようにスズメの涙を後にした。

くそー！ 初心者狩りの野郎覚えてるよ、俺に手を出したことを

絶対後悔させてやる！

初心者狩りに復讐を誓いつつ昼行灯目指して歩き出す。

### レベル3 初心者狩り（後書き）

4話目更新できました。書いてたら乗ってきてなんかすごく早く書けました。一樣ここからが本編のつもりです。本編の第一章初心者狩り編といったところでしょうか。く編っていうのちよつと使ってみたかったですよ。次もできるだけ早く更新したいです。感想書いてくれた方、おかげさまでやる気が出て早々更新できました。本当にありがとうございます。

## レベル4 あしたのために その1

チリーン

鈴の音を鳴らしながらドアを開けると広さ7、8m四方の部屋に棚が幾つか並んでいる、その棚によくわからないアイテムがずらつと並んでいる。

天井に小さな照明が1つだけぶら下がっており、薄暗い部屋はちよつとしたお化け屋敷のような雰囲気をかもし出している。

昼行灯と店のドアに小さく書いてあったのでここで間違いはないだろうがなんと怪しい店である。

部屋の先に暗くて見えにくい人がいるのが分かる。

「いらっしやい」

狭い部屋の中でなんとか聞こえるくらいの声で喋りかけてくる。

おそらくこの店の主であり裏で情報屋をやっている、たしか小梅とか言う名前のプレイヤーだろう。

ゲーム内で情報屋などやっている奴など今まで見たことがない、情報屋ということは情報を買って金をもらつということだろうが、ゲームでそんなこととして楽しいのだろうか。

まあどうであれ、まともなプレイヤーが情報屋などできるわけがない。

少し緊張しながらゆっくりと店の奥へ進んでいく。

するとそこには社長が座っていきそうな椅子に堂々とした態度で幼女が座っていた。

年は7・8才くらいだろうか、真っ黒な髪を後ろで左右に縛った小さくてかわいらしい女の子だ。

「……」

無言で180度反転し店のドアへと歩き出す。

「おい！」

後ろから幼女が呼び止めてくる。

「……………」

ちらつと後ろを振り返るが、何事もなかったようにそのまま無言で店のドアへと……………」

「おい！ ちょっとまって！」

再び呼び止めてくる。

「なにか御用でしょうか？」

後ろを振り返りながら聞いてみる。

「それはこっちのセリフだろうが！ 店に入ってきてきいて人の顔見るなり無言で出て行くこうとするんじゃないやねえよ！」

幼女は椅子の上の立って怒鳴りつけてくる。

「いやなんか想像してたのとちょっと違いすぎて……………」

「私だつて好きでこんな姿してんじゃないんだよ！」

このゲーム、姿もランダムなのだがまさかこんな姿があるとは思わなかった。

「まあいい。どうせアイテムを買いに来たんじゃないんだろう？」

幼女もとい小梅はそう言って再び椅子に座る。

「ここで情報屋をやっていると聞いたんだけど……………。でもなんでわかつたんだ？」

「こんな店来るやつはみんなそっちに用があるやつばかりさ」

小梅はそう言いながら机を蹴って椅子をくるくると回し始める。

まさしく子供がお父さん椅子で遊んでいるような感じだ。

「さつそくなんだけど、欲しい情報があるんだ」

かわいい姿にちょっと和んでしまったが本題に入る。

「まあいいんだけどあんた金持ってんの？ 見た感じ超初心者っぽいんだけど」

俺の布の服とひのきのぼうを見ながらちょっと馬鹿にしたように言ってくる。

ちなみにひのきのぼうは初心者狩りの野郎に折られたので新しく買ったものだ。

「俺あんまり持ってないんだけどいくらぐらいなんだ？」

「その情報によるけど、たぶんあんたじゃ払えないね」  
「う……」

予想はしていたがやはり金が足らなかったようだ。

「まあでも」

小梅はくるくると回っていた椅子を止める。

「最初の1回はサービスにしてあげてもいいぞ」

「え、マジで!？」

「ああ、まあやばい情報とかは教えられんがな」

「ありがとー、助かるよ」

見た目に反して言葉遣いと態度がでかいやつだと思ってたが、どうやら結構いいやつのようなのだ。

「で？ なにが聞きたいんだ？」

「実は初心者狩りの情報が聞きたいんだ」

「初心者狩りね。なにあんたあれに襲われたの？」

「ぐっ……」

この小娘は痛いところを突いてきやがる。

「そ、そんなことはどうでもいいだろ！」

「ふ〜んまあいいけど」

再び椅子を回しながら何かを思い出すようにしゃべり出す。

「初心者狩りと言われるやつは大体レベル20前後。武器はグロツグバスター。防具は不明。闇の衣を装備している。サーチ系のスキルを覚えていて通常より広範囲を見ることができる、あとサーチした相手のレベルを見ることができな」

「ちょ！ はやいつて！」

「しょうがないな、ゆっくり言うぞ」

ため息を混ぜつつもう一度ゆっくりと言いなおす。

「20前後？ 高レベルって聞いたんだけど？」

「そう言われているが実際は20ぐらいだ。おそらく攻撃特化型だな防御力はあまり高くないだろう。それと初心者狩りは用心深いやつでレベル9以下でソロプレイヤーしか襲わない、2人以上はレベ

ルが1でも絶対襲わない」

「ということはレベル9以下でレベルが10以上高い奴を一人で倒さないといけないわけか。」

「難しいな……」

「なんだ倒す気か？ いくらオリジナル要素が多いとはいえRPGにおいてレベルは絶対と言っていいほど重要な要素だぞ。10以上高い奴を倒すのは無理とは言わないが、かなりきついだろうな」

「だよな……。しかしよくレベル20とかの情報を持ってるな。初心者狩りの正体とか知らないのか？」

「冗談で聞いてみる。」

「……………」

「あれ？ え？ もしかして？」

「知ってるの？」

「知らないよ、知ってても教えないけどな。まあそれ相応の金を積みれば別だがな」

小梅のがニヤッと悪そうな顔で笑う。

結構いい奴だと思ったのは取り消そうかな……。

「私知ってるのはそれぐらいだよ、他になにか聞きたいことはあるか？」

「あーあと1つ、武器の格闘持ちで親プレイヤーを探してるんだけど誰か知らないか？」

「格闘持ちねー、まあいる事はいるけど」

「本当か！ 誰だ！？」

「私も名前は知らんが、ここ最近精気の滝にいらって聞いたね」

「精気の滝？」

「そんなことも知らんのか、サマルから西にちょっと行ったところにあるよ。東の魔性の森同様で初心者用のダンジョンだモンスターはあまり強くない」

「そうか、それなら俺でもいけるな。でも名前分らないんじゃないか」

「それは大丈夫だ」

「なんで？」

「私とは反対の意味で特徴のある奴だからな、まあ見ればすぐに分かる」

「どういう意味だろうか？ まあ考えてもしようがない。」

「取りあえず行ってみるは、じゃありがとな」

「そう言っただけからでようとドアに手をかけた時、後ろから小梅がボソっとんでもない事を言ってくる。」

「それと今の格闘の情報はつけとくからな」

「さつと後ろを振り返る。」

「ちよつと！ サービスっていったじゃねえか！」

「最初の初心者狩りの情報はな。2つ目は有料に決まってるんだろ」

「なら教える前にそう言えよ」

「どうせ金持ってないんだろ？ だからつけにしてやると言ってるだよ」

「下から余裕顔で見上げてくる。」

「詐欺だ！ 詐欺だー！」

「うるさいさつさと行け」

「しっしつと野良猫でも追い払うように手を振る。」

「結構いいやつと思っただけは焼却炉で完全に燃やすことにした。」

「精気の谷はサマルから平原を西にしばらく行ったところであり、魔性の森同様で初心者用のダンジョンだ。」

「今その精気の滝入り口に着いたところだ。サマルからここまでずっと平原だったがこっから先は山道が続いている。」

「少し前に精気の谷と言う事は知らずにここまで来た事があるが、」

まだレベル的に早いと思いここで引き返したのだ。

「ここか……」

マップを確認しながらつぶやく。

こうして改めてマップを見てみると、ゲームを始めてからサマル周辺しか行ってないことが分かる。すぐ死んでしまふ為あまり遠くに行こうとしていなかった、おかげでマップは9割以上真っ黒く染まっている。しかもNPCや他プレイヤーと会話をして情報収集などといった事がめんどくさくて、全然やっていなかったのどこに何があるのかまったく分からない。

「これはまずいな、この件が終わったら色んなところに行ってみるか」  
そんなことをつぶやきながら滝を目指して山道を進んでいく。

しばらく山道を進んで行くと道が左右に別れている場所に出た。  
「どっちに行くかな……」

左は道が続いているが右は岩で先が見えない、取りあえず道の先を見てみようと右の道を少しだけ進んでみる。

「うお！」

岩で見えなかったがすぐ近くに人の半分ぐらいの身長緑の肌をしたモンスターが立っていた。

「ギシャー！」

モンスターも俺に気づいたのか奇声を上げる。

頭の上にゴブリンと書いてあるモンスターは持っている斧を振り上げて突っ込んでくる。

「くっ！ 雑魚モンスターのくせに俺よりいい武器を持ってやがる！」

八つ当たり気味にひのきのぼうを振りまくりゴブリンを消滅させてやった。

「ふゝ、思ったよりも弱かったな」

なんの根拠もないが取りあえず右に進むことにした。

そのまま進んで行くが行き止まりになりそうな感じはしない、おそらくこっちが正しい道だったのだろう。こうなると左はどうなっ

ていたのか気になってしまっ、俺はゲームではできるだけ間違っただ道を最初に行きたいと常々思っている。最初っから正しい道を行くと他の道はどうなってるのかとか、あっちにはアイテムが落ちていたんじゃないかと気になってしょうがない。

一瞬引き返そうかと思っただが今はやめておくことにした、親プレイヤーがいつまでもこのダンジョンにいるとは限らないできるだけ急いだ方がいいだろう。

それからしばらく進んで行くうちに3、4匹のゴブリンと遭遇しすべて倒すことに成功した。

ゴブリンはそこそこ経験値がいいのかついさっきレベルが1つ上がった。

「レベル7か……」

ゲームを始めて1週間近くたちようやくレベルが7になったのだが、あまり素直には喜べなかつた。

初心者狩りはレベル9までしか狙わないのだ、間違っってレベル10にでもなつてしまつたらもう初心者狩りに会うのは不可能に近いだろう。

ここからはできるだけモンスターを倒さないようにした方がよさそうだ。

このダンジョンに入って1時間ほどさ迷つただろうか、遠くのほうに滝があるのが見えてくる、この距離からでもザーと水の音が響いてきている。

「……」

しかしゴールは目の前なのだがその場を動けずにいる。

「……」

動けずにいる原因を無言で見つめる。

滝へと向っている道の真ん中に大の字で人が倒れている、背中しか見えない為よく分からないがNPCでもモンスターでもないのは確かだ。

(どうするよこれ)

取り合えず心の中で3つの選択肢を導き出す。

- 1、助け起す
- 2、無視して先に進む
- 3、止めを刺す

(止めを……無視しよう)

あまり広い道ではないので倒れている人のすぐ近くを通らなければならぬ。

できるだけ音を出さないように慎重に進んでいく。

近づくにつれ倒れている人が鮮明に見える、1m近くまで来ると後ろ向きに倒れていてもどんなやつか大体分かる。

爺さんだった、倒れているのは髪の毛が真っ白なよぼよぼの爺さんだった。

そのとき小梅の言葉が蘇る。

「私とは反対の意味で特徴のある奴だからな、まあ見ればすぐに分かる」

(こいつだー！ 絶対こいつだよ！ もはやこいつしかありえねえよ！)

心の中で全力で叫ぶ。

この時点で選択肢の2と3は消え、強制的に1を行わなければならなくなってしまった。

すぐく関わりたくはないが起きる気配がないのでゆっくりと近づいて話かけてみる。

「あの、大丈夫ですか？」

声を掛けるといきなりガバ！ と起き上がった。

「うおー！」

突然のことに思わず尻餅をついてしまった。

「ついてこい」

突然立ち上がった爺さんはそう言って180度回転し滝の方へ向かって歩き出す。

「ちょ、え？」

なに？ どういうこと？ てか何で倒れてたの？

よく分からないが爺さんはこっちのことなどお構いなしにどんどん進んでいく、仕方なく爺さんの後を付いていく。

なにもしゃべならいまま滝の根元までたどり着く。

そこで立ち止まった爺さんがこっちへ振り返り聞いてくる。

「わしになにか聞きたいことがあるのじゃろ？」

「あ、ああ。なんであそこでに倒れ……」

「そうじゃ、わしは格闘の親持ちプレイヤーじゃ」

俺の質問を途中で掻き消すように喋りだす。

この爺さんまったく俺の話聞いてねえな。

「ん？ なんで俺が親プレイヤーを探してるのを知ってるんだ？」

「親プレイヤーは格闘持ちプレイヤーを見れば親か弟子かが分かるのじゃよ」

そうだったのか、しかし親プレイヤーはそんなことまで分かるなんて弟子プレイヤーとは随分待遇が違うな。

「じゃ話は早い、俺を弟子にしてくれないか」

「ふむ。」

爺さんは考え込むようによぼよぼの顔を曇らせる。

「まあいいじやろ？」

「おおー！ ありがとう」

意外と簡単にOKがでたな、小梅の様子からちょっと難しそうな気がしていたがどうやら杞憂だったようだ。

「あ、自己紹介がまだだったな」

なんかいろいろ突然過ぎて忘れていた。

「俺は……」

「待て！」

突然爺さんが大声で叫ぶ。

「な、なんすか？」

「名前など我々の間に必要のないものじゃ、師匠と弟子ただそれだけじゃ」

なんかよく分からんが……かつこいいぜ！

「分かりました！ では……老師、老師と呼ばせていただきます！」  
老師の特に意味もないかつこいいセリフにテンション高めで答える。

「うむ」

満足そうに頷く。

「所で老師、ちょっと聞きたいことがあるんですが」

「なんじゃ」

「なんでさっきあんな所に倒れ……」

「よし、早速始めるかのー」

「……」

意地でもさっきの倒れていたことは答えないつもりらしい。

取りあえず親プレイヤーを見つけるといふ第一歩は進めたが、初心者狩りを倒すという目的地まではまだまだ遠い道のみである。

#### レベル4 あしたのために その1（後書き）

かなり遅くなりましたがなんとか更新できました。今回はちょっと自分的にあまりいい出来ではないと思ってます。次はできるだけいい物を書けるようがんばりますのでよろしく願います。それといいサブタイトルが思いつきませんでした。あまり気にしないでやってください。

## レベル5 あしたのために その2

「ではさっそく始めるかのお」

よぼよぼの爺さ…… 老師がそう言っつてステータス画面を開く。

「どうやって師匠と弟子になるんですか？」

「まずはステータス画面を開くんじゃ」

言われるままにステータス画面を開く。

そうすると老師が近づいてきて説明し始める。

「ここを押して、それでここを押す」

老師の指示に従っつて進めていく。

「で、わしが最後に承認すると、これで完了じゃ」

「これで終了ですか？」

やけに簡単である、まあゲームだからこんなものかもしれない。

「よし！ これで俺も格闘が使えるようになったわけですね！」

ひのきのぼうで戦うこと1週間、ついに俺にまともな攻撃手段ができたわけだ。はやくそこあたりの雑魚敵で使っつてみたい！

「老師！ 本当に助かりました！ じゃあ私はこれで失礼します！」

そういつつ全速力で来た道を戻ろうと走り出す。

ドサッ！

「ぐはあ！」

足になにかが引っかかり地面大の字に倒れこむ。見てみると老師が足で俺の足を引っ掛けていた。

「まあ待つつのじゃ」

格闘を試すのこの爺さんでしてやろうかな……。と思いつつ起き上がる。

「な、なんすか」

こっちは格闘試したくつてうずうずしているのだ、いつまでもじじい…… 老師に構っつて暇はない。

「慌てるでない、いいか弟子はな師匠のスキルを受け継ぐことがで

きるのじゃ」

「え、まじっすか!？」

「うむ」

なるほど弟子はまったくいい所がないかと思っていたがこういうことだったのか。つまり自分の使いたいスキルを持っている師匠持ちプレイヤーを師匠にすれば、そのスキルを覚えることができるのだ。

「で、どんなスキルを覚えられるんです？」

「そのまえに格闘について少し説明しておこう。格闘には2種類のタイプが存在する」

「師匠と弟子のことじゃないんですか？」

「そうではない、格闘には打撃タイプと内攻タイプの2種類の攻撃タイプがあるのじゃ」

老師は指でピースをするように2を作る。

「打撃と内攻ですか？」

「まあそんなに難しいことではない。ただ打撃タイプは物理攻撃依存、内攻は魔法攻撃依存だけじゃ。武器を外して自分のステータスを見てみる」

すぐさまひのきのぼうを道具袋の奥底にしまいこみステータス画面で確認する。

「どっちが高い？」

「ばりばり魔法攻撃の方が高いですね」

「ならお前は内攻タイプということになる。打撃と内攻どっちの方がいいという事はないが、自分がどっちのタイプかは覚えておいたほうがいいじゃろ」

RPGにおいて物理攻撃依存と魔法攻撃依存は重要な要素と言えるだろう、魔法防御の高いやつと物理防御の高いやつを相手にする時とでは与えるダメージがかなり違ってくるのだ。

「ちなみに老師はどっちのタイプなんですか？」

「それは教えられんな」

即答で断られた。

「な、なんでですか？」

「それを教えるということとはわしの弱点を教えるのと同じことじゃ  
まあ確かにそうだが、弟子にくらい教えてくれないだろうか」  
「それではスキルを教えてやるう」

「ぜひお願いします！」

気を取り直してテンション高めに答える。

「うむ。“瞬足歩方”と“内気孔”というスキルじゃ。まず“瞬足  
歩方”について教えよう、己の一步の進む距離と速度を上昇させれ  
スキルじゃ」

「一步ですか？」

「そうじゃ、わしがやって見せよう」

そういつて少し距離を取り、俺に向ってゆっくり歩き出す。3 m  
ほど前に来たとき突然一瞬老師の姿が消えたかのようにスピードを  
増す。

「うお！」

気付いたら老師が目の前に立っていた、約2 mぐらいの距離を一  
瞬で移動したのだ。

「これが“瞬足歩方”じゃ」

なるほどそこそこ使えそうなスキルだ、2 mほどしか進まないとい  
うのがちよつと微妙だが。

「次は“内気孔”じゃ。“内気孔”は己の内にある気を瞬間的に増  
幅させる……まあ簡単に言うとな数秒だけ自分の攻撃力を上昇させる  
スキルじゃな」

めんどくさくなつたのか途中で言い直す。

「これは後で自分でモニターにでも使ってみるのじゃな」

それからさっきの師匠と弟子の時同様、ステータス画面をちよこ  
ちよこいじったりするだけなので語る必要はないだろう。

「これですべて終了じゃ」

老師がそう言ってステータス画面を閉じる、俺もそれに習ってステータス画面を閉じる。

「ご教授ありがとうございました」

老師に深々と頭を下げる。

「まあスキルはまだ使えんがな」

「ええ!？」

たしかにあれだけでスキルを覚えるのは簡単すぎるとは思っていたが……。

「心配することはない、ただレベルを上げればいいだけじゃ。強いスキルならレベルをかなり上げないと覚えれないが、今回教えたスキルはレベルを1つ上げれば1つ使えるようになるじゃろう」

ということは2つのスキルを覚えるにはレベル2つ上げなければならぬということだ、つまりレベル9。ぎりぎりだった、もし老師に合うまでにレベル8になっていたらレベル9以内にどちらか1つしかスキルを覚えることができなかつたということになる。

「今回教えたのは2つだが、レベルを上げていけば他のスキルも使えるようになっていくじゃろう」

「わかりました」

少し間を置いてから老師が言うてくる。

「それとお主オリジナルスキルを覚えているじゃろ」

「オリジナルスキル? ありますけど……?」

なんでそんなことを知っているのだらうか?

「そのスキルの使い方がわからんのじゃないか?」

「た、たしかにそうですけど、なんでそんな事知ってるんです?」

「そんなことはどうでもいいのじゃ」

いやいやいやどうでもよくないだらう。老師っていったい何者なんだ?

しかし老師は絶対に教えてくれそうにない雰囲気だ。

「そのスキル、何をどうするのかをよく考えて使ってみることじゃ」

「なにをどうするか……」

「わしが言えるのはそれだけじゃ」

おそらくこれ以上は聞いても教えてはくれないだろう。

しばらく老師を無言見つめていたが諦めた。

「じゃあ、俺はこれで失礼します」

「うむ。あーそうじゃ小梅のやつによろしく言っといてくれ」

「老師あいつと知り合いなんですか？」

「……」

なにも喋る気はないらしい。

諦めて来た道を戻ろうと老師に背を向けようとして止まる。

「あ、老師最後に聞きたい事が」

「なんじゃ？」

「自分より強い相手に勝つにはどうしたらいいでしょうか？」

「ふむ」

老師は少し考えるような顔をする。

「相手の弱点を突くか、相手よりも強い部分で戦うかじゃな」

「なるほど」

相手よりも強い部分か……。

「ありがとうございます、参考になりました」

そう言っただけで歩き出す、しかし滝から10mくらい離れたところで再び足を止める。

そういえばもう1つ聞くことがあったんだった。

少し離れてしまったのでちょっと叫ぶように老師の方を振り向きながら聞いてみる。

「老師何であんな所に倒れて……」

しかしそこにはすでに老師の姿は跡形もなく消え去っていた。

「ブグアアアア!!!」

奇声を上げながらスライムが突進してくる、しかしまったく避けようとしなない。

まっすぐ突っ込んでくるスライムに拳を叩き込む。

「グアアアア!!!」

奇声を上げながらスライムが呆気なく消滅する。

老師と別れたあと格闘を試す為に取りあえずスライム10匹ほど狩ってみたのだが、まったく苦戦することなく倒しきってしまった。強くなるうと今までやってきたわけだが、最初あんなに苦戦したスライムを簡単に倒せるというのが少し寂しい気もする。

スライムを倒しおえ、道具袋から回復剤を取り出す。

別にダメージを食らったから回復しようとしているわけではない、オリジナルスキルである“加速”を試そうとしているのだ。

あのあと老師の言葉を思い出しながら色々考えてみたのだ。

名前からして何かを加速させるスキルということは分かる、では何を加速させるのが問題だ。

俺は最初自分の自身を加速させるスキルだと思っていたがそれでは使用することはできなかった。

回復剤の蓋を空け一気に飲み干す。

回復アイテムは連続で使用することはできない、次使うまでに1分間のクールタイムが必要なのだ。

俺の考えが正しければ……。

10秒ほど立って再び道具袋から取り出す、そして回復剤の蓋を空け一気に飲み干す。

クールタイム10秒ほどで回復アイテムを使うことができた。

「できた……」

クールタイムが1分……60秒かかる所を10秒ほどで使用する  
ことができたのだ。

つまりクールタイムの“加速”。

「ブグアアア！」

新たなスライムの索敵範囲内に入ったのかスライムがこちらを目掛けてまっすぐに突進してくる。

そのまま避けることもせずスライムの突進を腹で受け止める。

一気にHPが3分の1ほど減る。攻撃力は上がったても防御力は相変わらず紙のままだ。

そのあとすぐにスライムに蹴りを入れ消滅させる。

プレイヤーを何もせず立っていると少しずつだがHPとMPが自然回復していく。

今度はその自然回復を“加速”してみる。

3分の2だったHPが通常の自然回復よりもかなりはやく回復した。

間違いないだろう、今までスキルを使用できなかったのは“加速”する対象が違ったのだ。

このスキルは身体的な物に対しては“加速”できないのだろう、

“加速”できるものとできないものを色々試してみる必要がある。

「分かりづらいスキルだな」

だが、もし俺がいま考えていることができたのならとんでもスキルになるだろう。

最初は消そうと思ったほどの弱キャラかと思ったが、もしかしたらとんでもないキャラになるかもしれない。

そう考えると顔が自然とにやけてくる。

「さて一旦街に戻るかな」

夕日がいぶ西に傾いている、もうまもなく夜になる。

今はまだ初心者狩りに遭遇するわけには行かない、準備はまだ整っていないのだから……。

それにしても老師ってほんと何者なんだろ。

## レベル5 あしたのために その2（後書き）

読んでくださった方ありがとうございます。今回は早めに更新することが出来ましたがちょっと短かったかなーと思っています。では次の話もぜひ読んでやってください。

## レベル6 あしたのために その3

ズズー。

しばらく来ていなかったスズメの涙で、久しぶりにアイスコーヒーを楽しんでいる。

この3日ほどはひたすらモンスターと戦っていた。スキルを覚えるためにレベルを9にする必要があったのだ。まあレベルは格闘を覚えただけで1日でレベル9にすることができた。あとは何をやっていったかと言うと技術スキルである投てきスキルのレベルをひたすら上げていたのだ。

技術スキルはそれを使用すればするだけ成長していく、前にも言ったが成長速度は人によって違うらしいが。

これに結構時間がかかった、なんせレベルをこれ以上上げられない状態のため、極力モンスターを倒してはいけないのだ。モンスターに物を投げては逃げる投げては逃げるをひたすら繰り返していた。まあ運良く俺の投てきスキルの成長速度は早かったらしく結構なスピードで上がっていた。

「やつほ〜」

考え事をしていて気付かなかったが茜がすぐそばまで来ていた。

「よう」

「最近来てなかったけど何してたのよ」

「そういつて相変わらず勝手に向かいの席に座る。」

「まあレベル上げだな」

「ふ〜ん」

茜はそういつて少しテーブルに乗り出すように聞いてくる。

「で？ 結局格闘は覚えられたの？」

「ああ、おかげ様で使えるようになったよ」

「よかったじゃないの」

「うれしそうに茜が言う。」

「お前になんかお礼しないとな」

「別にいいわよそんなの。あ、でもやっぱりお礼してもらおうかな」

途中で思い出したのか言い直す。

「えとね……」

「言わなくてもいい、分かってるよ」

茜の言おうとしていた事を途中で止める。

俺は笑顔で、右手の親指だけを持ち上げてグーサインをする。

「このアイスコーヒーはうまいもんな」

「違うから！ 全然違うから！ なにいい顔でアイスコーヒーなんか奢ろうとしてんのよ！ どう考えてもウチのギルドに入るってことでしょうが！」

「おいおい、アイスコーヒーなんかとはなんだ！ このアイスコーヒーうまいから！ めちゃくちゃうまいから！ まじうまいから！ 味しないけどな！」

激しく言い返す。

「ふー、まあいいわよ別に。大体あんたがお礼なんておかしいと思つたのよ」

ため息混じりに言う。

それからズズーとアイスコーヒーを啜ってから聞いてみる。

「なあ、自分よりレベルの高いやつに勝つにはどうしたらいいと思っつ？」

「そうねー」

茜は考えるように空を見上げる。

「装備ね、相手より強い装備でレベル差を補うとかじゃない」

「装備ねー」

「それがどうしたのよ？」

「いやまあ特に意味はないんだけどな」

そう言っただけアイスコーヒーを飲み干し立ち上がる。

「じゃ俺行く所があるから」

茜に別れを告げそのまま歩き出そうとするが、なにかに服を引っ張られる。

後ろを振り返って見ると茜が俺の袖を掴んでいた。

「なんだよ」

「まだコーヒー奢ってもらってないんだけど」

「結局飲むのかよ!」

チリーン

鈴の音を流しながら扉を開ける。

この店……昼行灯は前来た時と同様に小さな照明一つで照らした薄暗い店だった。

「いらつしやい」

聞き覚えのある声が店の奥から聞こえてくる。

俺は無言で店の奥へと進んでいく。

数m進むと喋った相手がよく見えてくる。

「なんだおまえか」

あんまり興味なさそうに小梅が言う。

「なんだとは失礼な」

小梅は相変わらず椅子に偉そうに座っていた。

こいつもしかしてずっとこんな所に引きこもっているのだろうか。

「お陰で目的のプレイヤーと合えたよ」

「あっそ」

まったく興味なさそうに答える。

「……」

「私はね情報屋だよ、情報屋は情報を売るのが仕事なんだ、売ったあとはお前が死のうがどうなるうが私には関係ないね」

相変わらず見た目に反して可愛くないやつである。

文句の1つでも言ってるやん所だが、今日はこいつにお願いがあつてきたのだ、できるだけこいつを怒らせないようにしなければならぬ。

「そうか、でも一応お礼を言っとくよ」

そう言つとまるで変なものでも見るような目で見てくる。

「おまえ変なものでも食べたのか？」

「はっはっはっ、何言ってるんだい僕はいつもこんな感じさ」

「気持ち悪いからいっぺん死んで来い」

この小娘は……。

俺が無言で睨んで見るが、まったく気にした風もなく言ってくる。

「で？ 今日は何の用だ？ まさか礼を言いに来たわけじゃないんだろ」

「実はちよつとお願ひがあるんだけど……」

絶対に断られるだろうから、非常に言いにくい。

「なんなんだよお願いってのは」

「あのさー………金貸してくれない？」

思い切つて言ってみる。

「断る」

予想はしていたが即答で却下された。

「たのむ、そこをなんとか」

「なんで私がお前に金貸さなきゃならんのだ」

「だつてお前しか貸してくれそうないんだもん」

最初は茜に貸りようかと思つたのだが、これ以上あいつに貸しを作ると本当にギルドに入らなければならぬそうなので、小梅から貸りることにしたのだ。

「知るか」

「マジでたのむ」

「帰れ、そして死ね」

「よーし分かつた、俺も男だ」

道具袋からアイテムを取り出す。

「こいつをお前にくれてやる、だから貸してくれ」

俺の取っておきのアイテム……ひのきのぼうを小梅に突きつける。

「いらねえよ！ 誰がそれもらって喜ぶんだよ！」

「いやほら武器装備できないプレイヤーとかきつと欲しがってる」

「そんな特殊なやつそういねえよ！ 大体そんな運営がおふざけで作ったような装備してるやつなんてお前ぐらいだよ！」

「うそ！ まさかこれでも駄目だとは……」

「なんだよその以外だ、見たいな言い方は。全然以外じゃないから」

小梅はハア、とため息をついて聞いてくる。

「なんで金貸してほしいんだ？」

「初心者狩りを倒すのに金がいる」

「ほー」

小梅がちよつと面白そうな顔をして言う。

「初心者狩りはお前よりレベル10以上高い、そんなやつを倒せるのか？」

「ああ、初心者狩りは防御力はあまり高くないうまくすれば倒せる」

「引くといつてもレベル差はでかい、少なくとも5、6撃は攻撃しないと倒せないぞ。しかもお前はやつの攻撃を1撃食らっただけで死ぬんだぞ」

たしかにそうだ、やつの攻撃が掠っただけで死にかねない。

「分かってる、だから必要なものがいくつもあるんだ」

そのあと小梅と俺はしばらく無言で睨み……見つめあっていた。

「いいだろう……。金を貸してやる」

「よっしゃー！」

うれしさのあまり思わずガッツポーズしてしまう。

「そのかわり利子を付けて返してもらってから」

「やっぱり？」

「当たり前だ」

おそらくそうなるんじゃないかとは思っていた。

「で、いくら必要なんだ？」

「え〜と、30万ゴールド」

ちなみにひのきのぼうと布の服は50ゴールド、スズメの涙のアイスコーヒーは1ゴールドだ。

「いいだろう。利子は十一だからな。」

「は！？ 十一っておまえ十日で3万じゃねえか！ 無理に決まってるだろ！」

その後激しい交渉の末なんとか1ヶ月1割にまで下げることになった。

「それと欲しい情報があるんだけど」

「おまえなー。金貸りという情報も潰けで聞こうってのか」

「うんまあ」

ハアー、と再びため息を付く。

「もう分かった、言ってみろ」

「次初心者狩りが出そうな時間と場所が知りたいんだ、それとこの街に調査の得意なやついたら教えて欲しいんだけど」

調査は技術スキルの1つで、いくつかの材料を調査させさまざまアイテムを作り出すスキルだ。

「調査の方はサマルの中央広場から西に少し行った所にある魔法の館って店を尋ねてみる、そこにいるダロメというプレイヤーははなかなか腕もいいし人もいいぞ。初心者狩りの方は…… 確証はないが2日後の日が落ちてすぐに魔性の森に行ってみる」

相変わらずなんでそんなこと知っているんだか、まあ聞いても教えてはくれないだろうが。

「分かった、じゃ俺はこれで」

「おおー、帰れ帰れ」

シツシツと猫でも追い払うように手を振る。

店を出ようと扉に手を掛けるが、ふと止まる。

「あ、そうだ老師…… 爺さんがお前によく言っといってくれって言ってたぞ」

「……そうか」

扉の所まで来たせいで薄暗い部屋の奥にいる小梅の表情は見えない。

どうゆう関係なのか聞くつもりだったが、なにか聞いてはいけな  
いようなそんな感じがしたのでそのまま昼行灯を後にした。

## レベル6 あしたのために その3（後書き）

今回は早々に更新できました。いつもこんな感じで更新できればいいんですがね。一応次の話で第1章初心者狩り編は完結する予定です。それ以降は第2章が始まります（たぶん）。では次も早く更新できるようにがんばります。

## レベル7 決着

もうまもなく日が沈み夜が来る。

夜は好きだ、すべてを黒く染める夜が好きだ。

夜が近づくとつれ俺の腕が徐々に疼いてくる。まるで、殺せ！

殺せ！ と俺に訴えかけてきているかのよう。

初心者狩り、俺はそう呼ばれている。初心者だけを狙って狩る、その行為自体は結構前から行っているが初心者狩りと言われ始め有名になり始めたのはつい最近のことだ。

有名になることは俺にとってあまり喜ばしいことではなかった。

有名になるにつれ低レベルのプレイヤーは警戒し始め、夜に街から出てこなくなったり、ソロで冒険をするプレイヤーが少なくなったりしていった。しかも高レベルプレイヤーが俺を討伐しようとして始めた。

おかげで俺が初心者狩りとして行動できる時間は減っていった。

しかし俺は初心者狩りをやめる気はなかった。まったく相手にならず悔しそうに死んでいくプレイヤーの顔を見たときのあの優越感、恐怖に歪んだプレイヤーをなぶり殺しにしていく時の高揚感、あれはそう簡単にやめられるものではない。

一体きっかけは何だっただろうか？

そうたしかあの時、何か腹の立つことがありイライラしていたのだ、そんな時に偶然闇の衣を手に入れた。最初は1回だけのつもりで低レベルプレイヤーを殺したのだが、その時のなんとも言えない感覚にやめられなくなったのだ。

そして今日まで正体がばれる事もなく初心者狩りを続けてきた。

今まで正体がばれずにこれたのは、もちろん闇の衣のおかげもあるが俺のオリジナルスキルである“サーチ”のおかげだろう。

俺の“サーチ”は通常よりも遠くを見る事ができる、しかも暗闇の中でもそれは変わらない。そして“サーチ”した相手のレベルを

見ることが出来る。このスキルを利用して俺はソロの低レベルプレイヤーだけを狙って殺すことができたのだ。

ふと気づくとすでに初心者狩りの活動時間である夜になっていた。ここは魔性の森という低レベル用のダンジョンだ。

俺はこの森で狩りをすることが多い。この森は広い上に木や草で視界が悪いため俺にとっては最高の狩場なのだ。

さっそく“サーチ”で辺りを見回して見る。

「いた」

少し離れた所にプレイヤーがいるのを発見する。

プレイヤーは特に何をするでもなく無防備にその場に突っ立っている。

今日は運がいい。毎回狩りの対象が見つかるわけではない、誰も来ずに夜の間ひたすらに待つだけの日もある。

プレイヤーのレベルは9。

俺は念のためレベル10以下しか狙わないことにしている、つまりぎりぎり対象の範囲内だ。

プレイヤーは布の服を着ており左手にひのきのぼうを装備していた。

「ん？」

よく見てみると数日前に狩ったプレイヤーだ。たしか前襲った時はレベル5か6だったはずだ、この数日でレベルを上げたのだろう。俺は一度襲ったプレイヤーは襲わないことにしている。

しかし最近はみんな警戒し獲物が見つかりにくくなっている、こいつを見逃したら今日は誰も現れないかもしれない。

しばらく考えたがやはり襲うことにした。

獲物に気付かれないように少しずつ近づいていく。

獲物はこちらにまったく気付く様子はない。

そして獲物の背後の数m離れた草むらまでたどり着く。

(さて、狩りの始まりと行きますか)

このあとの狩りを思い浮かべると自然と笑みを浮かべてしまう。

俺は武器であるグロツグバスターを握る手に力を入れ、一気に草むらから飛び出す。

ガサ!

草の音に反応して獲物がこちらを振り向く。

「よお」

俺を見て驚いた顔をした獲物に対して軽く挨拶をする。

ほんの少しだけ固まっていた獲物はすぐさま俺とは反対方向に走り出す。

「逃がすかよ」

俺も急いでその後を追う。

1回目の時はびびって動けずにいたのだが、2回目はさすがに状況を理解するのが速い。

夜の森の中逃げる獲物を追いかける。

これはこれでなかなか面白い。だがいつまでも追いかけて続けるわけにはいかない、このまま森を抜けられたらめんどくさい事になる。

俺の方が多少早速いのだろう、徐々にだが獲物に近づいていく。

(もう少し、もう少しだ)

そう思った瞬間、獲物が急に180度反転し俺に向かって何かを投げするようなモーションをする。

(ちっ! だがこの距離ならぎりぎり避けられる!)

しかし獲物が投げた何かは俺の予想をはるかに上回るスピード、まるで弾丸のような速さで俺に向かって飛んできた。

(なっ!)

ドォン!!!

「よお」

草の音を聞き後ろを振り向くと、右手にギザギザの大剣を握った真つ黒な人の形をした影が俺にそう挨拶をしてきた。

初心者狩りは数日前に俺を襲った時とまったく同じ姿をしていた。

(きた！)

そう思った瞬間あまりの嬉しさに笑みを浮かべそうになる。

だがここで笑うわけにはいかない。

すぐさま初心者狩りとは反対方向に逃げる、ここで不審がられて追いかけてこなかったら元も子もない。

逃げながら後ろを確認する、問題なく俺の後を追いかけて来ていた。

初心者狩りに遭遇するという一番の難解はクリアすることができた。

(さすがだぜ小梅)

確証はないと言っていたが、一体どうやってこんな情報を手に入れたのだろうか。

しばらく追いかけてこを続けていたが、徐々に初心者狩りに追いつかれ始めて行く。

だが問題ない、これは俺の計画通りなのだ。

今右手に持っているアイテムを初心者狩りにぶつけなければ、まず俺に勝ち目はないだろう。そのためにある程度は距離を縮めなければならぬ。

そしてある程度の距離に来た瞬間、180度反転し手に持っているアイテムを初心者狩り目掛けて投げつける。

いきなりなこと初心者狩りは反応が一瞬遅れるだろう、しかしそれだけではおそらく避けられてしまう。

投げる瞬間にスキルを発動させる。

“加速”

俺のスキルによって“加速”されたアイテムは初心者狩り目掛けでもものすごい速さで飛んでいく。

ドオン！！

投げたアイテムが初心者狩りに直撃し爆発する。

このアイテムは調合によって作られたアイテムで相手にダメージを与えると共に相手の魔法防御力を下げる特殊効果をもっている。

ちなみにこのアイテムは小梅に紹介してもらったダロメというプレイヤーに作ってもらった物だ。小梅の言うとおりダロメはいいやつで、すぐにこのアイテムを作ってくれた。

爆発が起こった瞬間、初心者狩りに向かって全力で走り出す。

初心者狩りはそのことにまだ気付いていない、予想外のスピードで飛んできた上にそれが爆発したのだ動揺しても仕方がないだろう。2メートル近くまで来るとさすがに気付いたのか、あわてて剣を構えようとす。

「おせえ！！」

老師に教わって“瞬足歩方”で2mの距離を一瞬で詰める。

そしてがら空きの腹に“内気功”で強化された拳を全力で叩き込む。

「ぐはあ！！」

初心者狩りがつめき声を上げる。

だがそれだけでは終わらない。

初心者狩りに拳を当てた瞬間、初心者狩りの腹に叩き込んだ右手から魔方陣が高速で展開され爆発が起きる。

ドオン！！

爆発を0距離で食らった初心者狩りは数m吹き飛び地面に倒れこむ。

今のは小梅から貸りた金で買った、補助スキルの“エクステンション”といわれる魔法だ。

“エクステンション”は武器の先から球上の玉を放出しそれを爆発させる魔法だ。

だがこの“エクステンション”、攻撃力はそこそ高いのだが発動させるまでの時間がかかり長い、あまり使用しているプレイヤーはいないだろう。

なぜその発動時間が長い“エクステンション”を高速で使用することができたのかは言うまでもない、“加速”させたのだ。

初心者狩りに拳が当たった瞬間に“エクステンション”を使用し発動時間を“加速”させ、ほぼノータイムで発動させた。

ここまでは計画通り進んでいた。アイテムによるダメージと“内気功”で強化された拳のダメージ、そして“エクステンション”を0距離で受けたダメージ。

おそらくはこれで倒せるだろうと予想していた。

倒れた初心者狩りに起き上がる気配はない。

勝った。そう思い油断した瞬間、初心者狩りが急激に起き上がり俺に向って走り出す。

(しまった！)

走りながら初心者狩りの大剣が白く光りだす。

「トリプルスラッシュ」

たしか“トリプルスラッシュ”は大剣の素早い3連撃スキルだ。右から左へ繰り出される1撃目を後ろに下がって避ける。

そこから1歩踏み出し左から繰り出してくる2撃目をなんとかしやがんで避ける。

そして最後の3撃目が上から振り下ろされる。

(避けきれない！)

2撃目を避けたとき体勢が崩れ3撃目を避けきれない。

ガッ！！

寸前の所で左手に持っていたひのきのぼうで受け止め、すぐに相手の剣の範囲外へと距離を取る。

危なかった、もしひのきのぼうを錬金で強化していなければ最初のころの二の舞だっただろう。

相手の剣を受け止めたひのきのぼうが折れる。強化しても1撃し

か耐えられなかったようだ。

(マジで助かったぜ相棒)

心の中で相棒に感謝し、目の前の初心者狩りを睨みつける。

おそらく相手はほぼ瀕死状態なはず、あと1撃与えれば倒せるだろう。

しかしどうする、もう一度あの3連撃を避けられるとは思えない。

(やはり切り札を使うしかないか)

しかしあれには問題がある、しかも失敗すればもはや俺に勝ち目はなくなるだろう。

だが出し惜しみなどしている余裕はないのだ。

(やるしかねえ！)

初心者狩りに向かって走り出す。

それに気づいた初心者狩りが大剣を構える、そして再び大剣が白く光り出す。

「トリプルスラッシュ」

そう言って初心者狩りが右から1撃目を繰り出してくる。

(ここ！)

“加速”

目の前の初心者狩りがまるでビデオのスローモーションを見ているかのように遅くなって行く。

思考の“加速”

最初できた時は夢を見ているのだろうかと思った、まさかこんな馬鹿げたことがゲームバーチャルリアリティでできるなど思ってもいなかった。

いやゲーム、仮想現実だからこそできるのかもしれない。

素人の俺にそんなことが分かるはずもない。

使えるものは使っただそれだけだ。

遅く見えるだけで俺のスピードが上がったわけではない、だがこれだけ遅く見れば避けるのは容易だ。

ゆっくりと右から左に振られる剣を、剣の届かないぎりぎりの所で俺がゆっくりと止まる。

そのほんの1、2cm前を剣が通り過ぎていく。

俺から見るとまるで遊んでいるかのように見えるが、実際は普通の速さで進んでいるのだ。

1 撃目を避け1歩前に進む。

そして左からゆつくりと右へと進んでいく2撃目をしゃがんで避ける。

2 撃目を避けさらに1歩前へ。

(次を避けて止めを刺す！)

3 撃目が上から振り下ろされる。

それを左へ避けさらに1歩前へ。

その瞬間スローモーションで進んでいた世界が急激に速さを取り戻していく。

(ぐっ！ MP切れ！)

MPが切れたのだ。この“加速”はものすごくMPの消費が激しい、しかもこの思考の“加速”は1秒毎にMPが消費されていく。

急に速さを取り戻した世界について行けず動きが一瞬止まる。

チャンスとばかりにそれを見た初心者狩りが再び剣を振り上げる。

MPが切れたのだこれを避けたところでもう俺に勝ち目はないだろう。

ここで相手よりも早く攻撃する、もはやそれしか勝つ方法はない。

おそらくどちらも1撃で死ぬ状態なはず。

(先に攻撃した方が勝つ！)

真っ暗な森の中、振り上げられた剣と握られた拳がほぼ同時に動く。

(速く！ 速く！ 相手よりも速く！)

新聞社、という名のギルドを作って半年近くが立つ。

最初の頃はゲーム内で新聞なんてとよく馬鹿にされたものだが、今や多くのプレイヤーが読むようになり 新聞を知らないものなどゲームを始めた初心者プレイヤーぐらいしかいないだろう。

ここまで来るのになかなか苦労した。最初は無料でひたすら街で配り続け少しずつ少しずつ読むプレイヤーが増えていった。

「マスター、なんか荷物が届いてますよ」

メガネを掛けた三つ編みの女プレイヤーが箱を持って近づいてくる。

「エリコ君、私のことは編集長と呼べといつも言ってるだろ」

エリコ君は私がギルドを立ち上げたときから一緒にいるプレイヤーの1人だ。

「すみません。編集長、荷物が届いてますよ」

「なんだいったい」

プレイヤーはホームにアイテムなどを送ることができる、つまり

新聞社のホーム宛てに誰かが送ってきたのだ。

「誰からだ？」

「それが名前が書いてないんですよ」

たまにこんな感じで無記名で荷物が送られてくることもある、まあ大抵は悪戯か嫌がらせだが。

荷物を受け取り中を確かめる。

「……」

中には2枚の写真が入っていた。

これはキャンピングカメラというアイテムで取られた写真だ。キャンピングカメラはこの街でも売っている、ただしかなり値が張る代物だ。

「編集長何が入ってたんですか？」

「エリコ君……」  
「な、なんですか？」  
「次の新聞のネタの変更だ」  
「えー！ でももう次の新聞できちゃってますよ」  
「そんなもんは中止だ、急いで作り直すぞ」  
「む、無理ですよ」  
「うるさい！ いそいで人を集める！」  
「わ、わかりましたー！」  
バタバタと走り去っていく。  
久々に面白ネタが手に入ったのだこれを使わない手はない。  
「ふふふ、面白くなってきたぞ」  
部屋の中で1人不気味な笑みを浮かべていた。

ズズーとアイスコーヒーを啜る。

今日も雲ひとつない空がどこまでも続いている。

視線を空から下に戻すと、通りの向こうから茜が走ってこっちに  
向かってくるのが見える。

「はあはあ！」

「どうしたそんなに急いで」

俺が声を掛けると茜は息を整え、俺に突きつけるように手に持っ  
ていた物を見せてくる。

「これあんたの仕業でしょ！」

突きつけられた物…… 新聞を受け取る。

新聞には「ついに明かされる初心者狩りの正体!？」とでかか

と書かれていた。

そしてその下に2枚の写真が載っている。

左の写真は真っ黒な人の形をした影が倒れている写真、右の写真は左の写真と同じ格好で人が倒れている写真だ。その右の写真は倒れている人の顔がぼつちり映っている。

おそらく右の写真が初心者狩りの正体だという意味の写真だろう。

「知らねえよ」

そう言っつて茜に新聞を返す。

「うそ！ 絶対うそ！ このタイミングはあんたしかありえないわよ」

「んなわけないだろ、大体初心者狩りなんて興味ないって言っただろ」

「俺は楽しんでゲームをしてる人を弱いもの虐めみたいにPKして回るやつが許せない！ っつて力説してたじゃないの」

「そういえばそんなことを口走ったかもしれない。」

「そ、そうだったっけ？ 覚えてないな」

「目をそらして言っつても説得力ないわよ」

茜が呆れたように俺を見てくる。

「新聞に書いある、無記名で写真を送ったのっつてあんたなんでしょ？」

「ちがうっつて言っつてんだらうが」

「なんでうそつくのよ」

「うそじゃないから！ なんでそんな決め付けんの！ 俺お前が思っつてるよりダメな奴だから！ ほんとダメな奴だから！」

「分かったわよ、もう聞かないであげるから私のギルドに入りなさい」

「なんでだよ！ どうやっつたらそこで俺がお前のギルド入る事になるんだよ！」

「よーし、じゃあ今からウチのギルドのホームに行くわよ」

俺はサツと立ち上がり走っつてスズメの涙から逃げ去る。

「誰がいくかー！」

「ちよ、逃げるんじゃないわよ！」

後ろから茜が追いかけてくる。

「追いかけて来んじゃねー！」

サマルガルドの街を全力で走り抜けて行く。

ゲームの中は雲ひとつない空がどこまでも続いていた。

## レベル7 決着（後書き）

どもー。

最初で言っておきます、けしてこれで完結ではありません。

今回で第一章、初心者狩り編は終了です。

おかげさまで取り合えずの目標である初心者狩り編をなんとか書ききることができました。

しかし最初のころよりも文章を書くのが下手になってきた気がするのは何ででしょうか？

まあきつと今からうまくなっていくと信じてやっけていきます。

ここ2、3話かなり速く更新することができてましたが、次は少し遅れるかもしれせん。できるだけ速く更新できるようにがんばります。

文章のおかしい所、誤字があったら教えてください。あとできれば感想があればぜひお願いします。

ではこれからもよろしくお願いします。

## レベル8 ご利用は計画的に

「小梅さんからメールが届きました。」

拝啓

虫の音に秋の訪れを感じる今日この頃、お変わりなくお過ごしのことと拝察しております。

先日は、昼行灯をご利用いただき、まことにありがとうございます。

何分にも微力ゆえ、不行き届きの点多々あるかと存じますが、多くのお客様に愛され、

心温まる店になるよう精一杯努めてまいり所存でございます。

どうか、未永いご指導ご愛顧のほど、よろしくお願い申し上げます。

略儀ながら、まずは書中をもちまして御礼申し上げます。

敬具

追伸

おいてめえこら！

あれから1度も店に顔ださねえじゃねえか、まさかてめえに貸した30万忘れたわけじゃねえだろうな？

取り合えず3日以内に今もってる全財産持って来いや！

もし来なかつたら、二度とこのゲームをプレイできなくしてやるから覚悟しとけよ。

オーベルビリア。サマルガルドから北にある山道を抜けた先にある、マラトヤ高原と言われる広大な高原の中心にある町だ。

このマラトヤ高原はかなりの広さを誇っており、クエストも大量に存在する為多くのプレイヤーがここでレベル上げをしている。

さらにこのマラトヤ高原に存在するモンスターは、サマルガルド周辺とは比べ物にならないぐらいの強さなのだ。

サマルガルドからオーベルビリアまでの道のりがこのゲームの最初の試練と言われており、オーベルビリアに自力でたどり着くことで初心者卒業する、という認識になっている。

つまり初心者を卒業したプレイヤーであふれた町なのだ。

数多くのプレイヤー達が目の前を過ぎ去っていく。

オーベルビリアには、北、南、西の3つの出入り口があり、ここはオーベルビリアの西にある出入り口につながる道の途中だ。

西出入り口から町に入ったプレイヤー、もしくはは出て行くことするプレイヤーは必ずここを通らなければならない。

その道の端に立ち、何人のプレイヤーが通りを過ぎ去っていくのを見ていただろうか。

話しかける！ そう意気込んでこの道に立って30分近く経ってしまった。

このオリジナルオンラインというゲームを始めてまだそんなに日が経っていない為、知り合いと呼べるプレイヤーはまだ1人もいな

かった。

と言うよりもまず、今までMMORPGなるゲームをやった事がなかった。いやMMORPGに限らずオンラインゲームといわれている物をやった事がなかった。

その為、他のプレイヤーとどうコミュニケーションを取っているかわからず、ゲームを始めてから今までほとんど誰とも喋ることなくここまで進めてきた。

まあこのままでもいいか、と悠長なことを考えていたのだが、そうもいけなくなってしまうた。

あるクエストをどうしてもクリアしたいのだが、1人では絶対に無理だ。

大体このオーベルビアに辿り着いたのでさえ奇跡の様なものなのに、さらにこのマラトヤ高原を1人でうるつくなど無理に決まっている。

だからこうして人通りが多いここでPTを組んでくれそうな人を探していたのだ。

巨大な斧を持った者、ゴツゴツ鎧を着込んだ者、背中に剣を背負った者、なんとも可愛らしい服を着た者、みんな同じ服を着た3人のPT、他にも様々なプレイヤーが通って行ったが誰にも話かけられなかった。

実際はどうかわからないが、みんな自分よりも遥かに強く見え、誰も私なんて相手にしてくれなそうな気がしてならなかった。

はつきり言っただけ私に弱い、PTを組んだら間違いなくお荷物になるだろうという自信があった。

そう思うとどうしても話かけられない。

いかにも弱そうで初心者っぽい人はいないだろうか、それならば話しかけられそうなの気がする。

そんな事を考えていると、通りの向こうから1人のプレイヤーが現れた。

そのプレイヤーはある意味浮いていた、みんなが剣や斧、鎧など

を装備しているにも関わらず、裸（装備なしの状態）に布でできたぼろぼろの服を着込み、武器とおぼしき棒を持っているだけだった。私の期待通り、いやそれ以上のプレイヤーだ。

弱すぎるというのも問題だが、私がやるうとしてしているクエストは時間制限がある、いつまでもこんな所に突っ立っているわけにはいかない。

なけなしの勇気を振り絞り、そのプレイヤーに向かって歩き出した。

俺はオーベルビアの西出入り口に向かって歩いていった。

オーベルビアには出入り口が3つある。それをなぜ西から出ようとしているのかと言うと、特に理由などない、単なる気まぐれだ。初心者狩りへの復讐を終えた俺は、とりあえずサマル周辺を探索することにした。そこで見つけた山道を抜けマラトヤ高原とかいう無駄に広い高原を進み、このオーベルビアに着いたのは昨日の事だ。

初心者狩りの正体が新聞で暴かれる、ゲーム内は一時期その話題で持ちきりだった、だが最近は初心者狩りの正体を暴いた者は誰なのか？ という話題に切り替わってきていた。

新聞でも「正義の使者！？」初心者狩りを裁いたプレイヤーに迫る！」などという分けのわからん記事が書かれていた。

正義の使者っておまえ……。

個人的な恨みで仕返ししてやっただけだから。

あの写真を新聞社に無記名で送ったのは正解だった、正体がばれるとめんどくさいことこの上ない。

初心者狩りを倒したのが俺だと知っているやつは、俺を抜かすと初心者狩り本人、あと小梅と茜の3人だ。

初心者狩りは正体がばれたあとは誰も見ていないらしい、おそろくキャラを消したのだろう。

そうするとあとは小梅と茜の2人だ。

茜には否定したがたぶん俺がやったとばれているだろう、でもおそらく誰にも言わないだろう……たぶん。

小梅は……言いそうだな。

というかまず情報屋だから金積んだら絶対言うだろう。

次会ったときに誰にも言うなと、いつとかなければ。まあたぶん俺の言うことなんか聞かないだろうけどな。

そうそう小梅と言えば、小梅から脅迫メールが届いたのも昨日の事だ。

最初はメールなんて見なかったことにしようかと思ったのだが、そんなことしたら小梅のやつに何をされるかわからん、本当にゲームができなくなるようなことをあいつならしかねない。

3日以内と書いてあったのであと3日ある、だから今から少しでも金を集めようとモンスター退治に出かける所なのだ。

しばらく歩いて行くと、遠くの方に門が見えてくる。

町の外に広がる高原のモンスターは経験値と金が結構手に入る、しばらく狩れば借金の足しになるだろう。

「あ、あの〜」

借金を返す手段を考えながら歩いていると、横から急に声を掛けられた。

「ん？」

声のする方に振り向くと1人の女性プレイヤーが立っていた。

整った顔立ちで、見た感じ年は17、18ぐらいだろう、身長は俺と同じかそれより少し低いぐらいだろうか、腰近くまで伸びた、軽くカールのかかった赤い髪が印象的なプレイヤーだ、真っ白な口ブを付けている為赤い髪がより際立って見える。

なかなかの美人だが、なぜか木で出来たちやちな杖を両手で構えるように握っている。

その杖で俺を殴ろうとでも言うのだろうか？

「あ、あの……」

俺が何も言わずにいると、あせったように喋りだす。

「わ、私とPTを組んでくれませんか!？」

「PT?」

「はい! エーと、ちょっとやりたいクエストがあるんですけど、1人じゃ無理なんです」

なるほど、1人じゃ難しいからPTを組んでクエストを手伝ってほしいということか。

赤髪のプレイヤーが怯えるような目で俺の返事をまっていた。

正直いつてめんどくさかった、PTを組むと戦闘では有利になるかもしれないが、知らない奴とPTを組むなんて疲れることこの上ない。

「あのさ、他にもいっぱいプレイヤーいたのに、なんで俺なの?」

PTを組む気はないが気になるので聞いてみる。

「あ、あの。そ、それは……弱そう……だったからです」

俺の動きがピタツと止まり、なにこともなかったように町の入り口に向かって歩きだす。

「あ! いや違います! 違います! 話かけやそうだったんです!」

赤髪のプレイヤーがあわてて俺の前に移動して弁解する。

「私、オンラインゲームとかしたことなくて、だからその……話かけやすそうな人を探してたんです」

つまり強そうな奴にはちょっと話かけずらいので、弱そうで話しやすいようなプレイヤーを探していたわけか。

自分の格好を改めて見直して見る。

うん、分かってたけどたしかに弱そうだ。

「悪いけど俺いまからちょっと用があるから……」

「そ、そうですね。すいませんでした」

悲しそうな顔でそう言われると、なんか悪いことしたような気に

なってます。

しかし俺も忙しいのだ、構ってる暇などない。

そのまま赤髪のプレイヤーの横を通りすぎようとする。

「お金あきらめるしかないかな」

そこで再び俺の動きがピタッと止まる。

「今なんて言った？」

赤髪のプレイヤーに向き直る。

「え？ あの、お金あきらめるしかないかなって……」

「そのクエストもしかして報酬で結構金もらえるの？」

「はいそうですけど……」

「そのクエスト手伝いましょう！」

そういうことは速く言ってもらいたい。

「え？ でも用があるって……」

「よく考えたらその用、もう片付いたんだった。というか困ってる人を助ける方が全然優先されるから！」

「そ、そうなんですか？」

俺のいきなりのハイテンションにちょっとびびったように言う。

「うん、マジで俺そういうのほっとけない性質なんだよ」

金！ 金！ 金！

「じゃ、じゃあ、ぜひお願いします。」

俺の邪な思いにまったく気づかないのか、そう言って笑顔で右手を差し出してくる。

「私クレアノーズといます、長いのでクレアと呼んでください」

差し出された右手の意味に一瞬気づかなかった。

なるほど握手か……。

ゲームで握手って普通やらないんだが、オンラインゲームは始めてと言っていたし一応付き合ってたやるか。

赤髪……クレアの手を握る。

「俺は、たしか……ロダ、そうたしかロダだったな」

自分の偽名をちょっと忘れてしまっていた。

「ロダさんですか？」

「まあ一応ね」

「わかりました。ロダさんよろしくお願いします」

さっきの悲しそうな顔とは対照的に、うれしそうな顔でそう言った。

オールドベリアの西出入り口付近で、ものすごく弱そうな2人のPTが結成された。

## レベル8 ご利用は計画的に（後書き）

ちょっと間が空きましたが、なんとか9話目更新できました。

一応ここから第2章の始まりです。まあ借金返済編と言ったところですかね。

第1章は、途中からなんか話が適当になっていった様な気がするのですが、ここからはそうならないよう注意して書いていくつもりです。

ではぜひ次の話も読んでください。

## レベル9 一銭を笑うものは一銭に泣く

俺はオーベルビリア西入り口から、町の外にある無駄に広い高原を見つめていた。

「あの〜」

そうやってきたのはつい先ほどPTを組んだクレアだ。

「先に進まないんですか？」

クレアがそう言った理由は、俺がここで5分ほど動かないせいだろう。

「いや、ちょっと心の準備がまだ出来てないんだ」

このマラトや高原のモンスターは結構強い。

俺がオーベルビリアまで辿りつけたのはもちろん実力だし、このモンスターを倒すのはそんなに難しいことじゃない。

しかし俺は自分の防御力のなさだけには自信がある、このモンスターの攻撃で2、3撃、へたしたら1撃で死にかねない。

はつきり言って隣にいるクレアはあまり強そうには見えない、クレアを守りながらこの高原を進んでいく自信があまりないのだ。

いやまて、クレアもこうしてこの町にたどり着いたプレイヤーだ、見た目はあれだが以外に強いのかも知れない。

まあ俺も見ただ目云々は人にどうこう言える格好じゃないけどな。

とりあえずクレアの実力を確認してみるべきだろう。

「よし」

そうやってクレアの方を向く。

「ついに出発ですね！」

やる気満々で言うてくる。

「いやその前に、そのクエストの内容を聞いておきたいんだけど」

「あ、そういえば言うてなかったですね。えーと、オーベルビリアの西にあるお墓に供えてあるアイテムを取ってくるんです」

「え？ それだけ？」

「それだけです」

やけに簡単なクエストである。

「ちなみにそれ報酬でどれくらい金もらえんの？」

「えーと、50万、40万、30万、20万、10万、1千、1、のどれかみたいですよ」

クレアがステータス画面のクエスト欄をみながら言う。

「50万!? というか、どれかってどういうこと？」

「さー、私にもよくわからないですね」

おいおい大丈夫かよ。

しかしこのレベル帯でのクエストで、50万の報酬はすごすぎる。俺もいくつかクエストを受けているが、せいぜい5千がいいとこだ。報酬50万の割りにいやに簡単な内容だ、なんだかいやな予感がある。

「そ、そのクエさ、どうやって受けたんだ？」

「え? 南門にいる白髪のおばあさんからですよ」

南門の? ……まさかあのばあさんのことか!

南門のばあさんは、めちゃくちゃ悲しそうな顔でいかにもクエストがありますよと言わんばかりに立っているくせに、話しかけてもなにもないという意味で有名なNPCだ。

気になって茜にも聞いてみたのだが、茜もクエストは受けられなかったらしい、というか今までのばあさんからクエストを受けられたプレイヤーを見たことがないとか言っていた。

思わせぶりなだけかと思っていたが、実はクエストがあつたということだ。

しかもクレアの様子からして、知らない間にこのクエストを受けられる条件をクリアしていたのだろう。

なんてやつだ……。

俺の内心の驚きに気づかないのか、何も言わない俺を不思議そうな顔で見つめている。

「ま、まあいいか」

なにはともあれ、報酬50万だ。これを逃す手はない。

「それでクレア、頼みがあるんだが」

「なんですか？」

「その報酬なんだが……半分俺に出来ないか？」

「半分ですか？」

クレアが少し考えるような顔をする。

「いやいや、別に金がほしいわけじゃないんだよ！ ただほら！

なんていうのかなー、こうあれなんだよ！ そうつまりあれなんだよ！」

わけの分からんことを口走ってみる。

「分かりました」

「へ？」

「報酬は半分で分けましょう」

「そ、そう？　なんか悪いね、俺もちよつと金があるもんだからさ

ー

「いえ、一緒にやるんですから当然ですよ」

なんていいやつだ、こんないいやつはそういないよ。

「取り合えず、クレアの実力を知っておきたいんだけど」

そう言つて数十m先にいるモンスターを指差す。

「試しにあのモンスターと戦つてみて」

俺たちはオーベルビアから少し西に進んだ所にいた。

クレアの実力を知りたかったので、最初に見つけたモンスターと戦わせることにしたのだ。

俺の指の先には、クルルという名の鳥、というかダチョウに近いモンスターがいる。

クルルはこのマラトや高原のモンスターの中では弱いほうだ、しかもいくら近づいてもあちらから攻撃してくることはない。

つまりこっちが攻撃しない限り襲ってくることはないのだ、これは俺のような防御力の低いプレイヤーにとってはものすごくありがたい、不意打ちはないし必ず先手を打てるからだ。

まあ1つだけ問題がある、マラトや高原内で1番足が速いモンスターなのだ。

こいつから走って逃げ切るのは限りなく難しいだろう。

「私1人ですか？」

クレアが不安そうな目で俺を見てくる。

「大丈夫、やばそうになつたら俺が助けるから」

「わ、わかりました。やってみます！」

そう言つてクルルに向かつて歩いていく。

まあたぶん大丈夫だろう、クルルは足が速いだけで防御力はあまりない、クレアがどんな魔法を使うかは知らないがクルルなら一撃で倒せるだろう。

魔法は発動までの時間が長いが攻撃力が高いというのが基本だ、クルルからは攻撃してくることはないので魔法の発動する時間は余裕で稼げる。

でも一応一撃で倒せなかった場合を考えて、すぐに動けるようにしておくか。

クレアは俺が予想していたよりもクルルに近づいていく。

（ん？ ち、近いな）

近距離の魔法しかないのだろうか？ クルルは足がはやいのであまり近づいて欲しくないんだが。

しかしクレアはさらにクルルに近づいていく。

（ちょ！ 近いって！ 近いって！）

クレアはクルルに手が届きそうなくらい近づき、右手に持っていた杖で……。

「殴ったー！ー！！」

ポコッ！ といい音が辺りに響き渡る。

（え、なに？ その杖そういう使い方するものだったの!?!）

攻撃されたクルルがクレアに襲い掛かる。

「きゃー！ た、助けてくださーい！」

「ギョオオオオ！！！」

クレアが俺に助けを求めながら走ってくる、その後ろをクルルが奇声を上げながらもスピードで追いかけてきている。

「あ、やべ」

予想外の展開に思わずつつて込んでしまい行動するのが遅れてしまった。

あらかじめ右手に持っていたコインを親指でクルル目掛けて弾く。弾かれたコインは弾丸のようなスピードでクルルに直撃する。

「グヤア！」

“ 銭投げ ” という名のスキルだ。スキル屋に売っているサポートスキルの一つで、自分の金をコインにして相手に投げつけるというスキルだ。

ちなみに小梅から借りた金が少しあまったので買ったものだ。

この“ 銭投げ ”、俺にとってはなかなか使い勝手がいいスキルだった。投てきスキルを上げればそこそのダメージを与えられるし、なによりも俺の“ 加速 ” と相性がいい、指で弾いて“ 加速 ” されるだけでもものすごい速さで飛んでいくのだ。

ただし使うたびに自分の所持金が減っていく。

一回で減る金は少ないので、あまり気にしないで使っていたのだが、使い勝手が良すぎて連打で使用しまくっていた為、俺の財布の中身は大変なことになってきている。

「ギョオオオオ！！！」

いまの攻撃で対象を変更したのか、クルルが俺に向かって襲い掛かってくる。

もう一度“ 銭投げ ” を発動し、右手にコインを出現させる。

それをクルル目掛けて投げつける。

「グヤアアア！！！」

奇声を上げながら死んでいった。

いや今のマジ痛そうだったよ、思いっきり目に当たってたよ、絶対クリティカルだよあれ。

自分で投げたのだが今のはちょっとかわいいそんな気がする。

「ハアハア！ す、すごいです！ 今のなんですか!？」

全力疾走したせいか、ハアハアいいながらクレアが俺に近づいて来る。

「“ 銭投げ ” ってスキルだよ」

「“ 銭投げ ” ですか、すごいですね!」

「いやスキル屋で売ってるから、金さえあれば誰でも買えるスキルだよ」

「そ、そうですか」

クレアはなぜか少し悲しそうな顔でそう言った。

「それよりも、クレアもしかして魔法使えないの？」

「…… 1つだけあるにはあるんですけど、あんまり使い勝手がよくないんですよ……」

「そっか……」

どうやら俺の予想以上に酷かったようだ。

微妙な空気が流れる。

「ま、まあしょうがない、基本的にモンスターは俺が倒すから、先に進むか」

「は、はい、お願いします」

俺の身長のはるかにある熊のモンスターが、やけに長い爪を俺目掛けて振るってくる。

振り下ろされる爪を左に避け、俺のちょうど目の高さにある熊の腹を目掛けて拳を叩き込む。

「グオオ!!!」

熊が殴られたところを押さえて苦しそうに呻く、そこにさらに蹴

りを入れる。

蹴りで後ろに数歩下がった熊に、右手に出現させたコインを親指で弾いてぶつける。

「グオオオオ！」

叫びながら熊が消滅していく。

「ふ〜」

オーベルビリアから結構進んだはずだが、クエストの目的地である墓とやらはまだ見えてこない。

「おつかれさまです」

少し離れたところにいたクレアが近づきながら言う。

「少しここで休んでいくか」

ここまでの戦闘でかなりMPがやばい。

見える範囲にモンスターはいないようなので、ここで休んでも大丈夫だろう。

俺は近くにあった大きめの石に座る。

クレアも少し離れた所に座る。

「あの、すみません」

「なにが？」

「私何もしないで、ロダさんにはかり戦闘させてしまった。さつきから元気がなさそうに見えたのはそのせいかな。」

「まあ最初はみんなそんなもんじゃないの」

「ロダさん、このゲーム始めてどれくらい経ちます？」

「20日ぐらいかな」

「私1ヶ月です……」

うーむ、なんかさつきより元気がなくなってしまった。

しばらく無言で時が流れる。

「私……」

クレアがつぶやくように喋りだす。

「このクエストの報酬で新しい杖を買おうと思ってるんです」  
杖？」

「はい、オーベルビアの北にプレイヤーさんがやっている武器屋があるんですけど、そこで売ってる杖が欲しいんです」

強い武器に変えても殴るんじゃないやあんまり意味ないような気がするが。

「その杖、特殊な錬金されてるみたいで、振るだけで炎の攻撃魔法が出るんです。それがあつたら私もほかの人達みたいに戦えるんじゃないかな、って思ったんです」

なるほどそういうことか、まあでもそんな杖買わなくてもスキル屋でサポートスキル買えばいいような……。

「でもその杖、20万ゴールドもするんですよ」

「20万か……」

それでこのクエストをやるうとした訳か。

「じゃあまあ、このクエさっさと終わらしてその杖買いにいけばいいさ」

そう言って立ち上がる。

「俺あのデカイ岩の上から、なにかないか見てくるわ」

数十m離れた所にある、巨大な岩に向かって歩き出す。

岩の上に立つと結構遠くまで見えた、しかし目を凝らして見ても特に何も見えない。

「こんな時のためにこれを買って置いたのさ」

道具袋から30cmほどの筒状の物……望遠鏡を取り出す。

通常よりも遠くが見ることができるアイテムだ。ちなみに結構値が張る代物である。

しばらく望遠鏡を見ていると、西の方に微かになにかあるのが見える。

「あれか？」

しかしここからじゃ何なのかまでは分からない。

「取り合えずあそこに行ってみるか」

MPも完全に回復したことだしそろそろ出発するか。

そう思って岩を降りようと後ろを見ると、クレアの前に一人のプ

レイヤーが立っており、クレアに何かを話しかけていた。

「ん？ なんだあいつ」

ここからじゃよくわからない、手に持っている望遠鏡で見ていることにした。

その男プレイヤーは、輝く金髪を肩まで伸ばし、きらびやかな鎧を着込み、腰に宝石が散りばめられた高そうな剣を装備していた。

かなりに整った顔立ちをしている。

「うわ！ なんだあの成金趣味丸出しのナルシスト野郎は」

あの手のタイプは苦手というより嫌いだ、取り合えず蹴りを入れよう。

まあ人を見かけで判断してはいけないと言うが、クレアが迷惑そうな顔をしているので蹴り飛ばしても問題ないだろう……たぶん。

こっそりと岩の上を降りる。

都合のいい事に金髪成金野郎はこっちに背を向けている、気づかれない様に背後からゆっくりと近づいていく。

## レベル9 一銭を笑うものは一銭に泣く(後書き)

なんか今回は中途半端な所で終わった気がします。

第2章借金返済編の2話目なんとか更新できました。

取り合えず目標にしていた10話まで書ききることができました。  
次は20話を目標に書いていこうかと思えます。

余談ですが、毎回サブタイトルに悩んでいます。

ちなみに今回のタイトルはことわざからもって来ました。

## レベル10 金は天下の回りもの

ドンッ！

気づかれないように背後からゆっくりと近づいた俺は、金髪野郎を予告なしで蹴り倒す。

倒れた金髪野郎は何が起きたのかわからないのか、周囲をキョロキョロと見回している。

そして俺の存在に気づき、自分が何をされたのか分かったのだろう、立ち上がり俺に向かって叫び声を上げる。

「き、貴様！ いきなり何をする！」

金髪野郎が俺に向かって怒鳴ってくる。

しかし金髪野郎の装備をこうして近くで見ると、よりきらきら光っていて悪趣味なことこの上ない。

「おまえそんな成金趣味丸出しの格好して恥ずかしくないのか？」

そう言われた金髪野郎が視線を下に向け自分の格好を確認する、その後俺の方を向き俺の装備を見て言い放つ。

「ほとんど裸（装備なし）同然の奴に言われたくないわ！」

そう言われ、自分の格好を確認してみる。

「え、なに？ 俺の格好に文句でもあんの？」

この格好のどこに問題が？ みたいな感じで言い返す。

「あるね！ なんだいそのぼろぼろの貧乏くさい服は！ 見てるだけでイライラする！」

「ちょ、おまえ！ この装備なめんなよ！ これの服あれだぞ、なんか伝説的な感じの装備の内の1つだから！」

「そんなぼろぼろの服が伝説の装備なわけないだろ！ 大体このゲームに伝説の装備があるなんて聞いたことないぞ！ とうかういったいどんな伝説だ！？」

「え……それはおまえ、あれだよ。伝説の鍛冶屋的なやつがオリハルコン的なやつで作った4つの装備の内の1つなんだよ」

「うそをつくな！ オリハルコンがどうやったらそんな布みたいに  
ぴらぴらになるんだ！」

「い、いやマジだって！ それだけ伝説の鍛冶屋的な奴が凄いな  
って！」

「違う意味で凄いわ！」

「ちなみにこの一見ただの棒に見えるこれも実は伝説の装備の1つ  
だから」

「あーもう！ そんな馬鹿話はどうでもいい！」

いい加減頭にきたのか、俺の話が無理矢理終わらせると腰にある  
剣を引き抜く。

「いきなり蹴り飛ばし、人の格好に文句をつけるはとは！ 覚悟は  
できてるんだろうな！」

「なに、やんの？ 伝説の装備を2つ装備してる俺とやんの？」

そう言いながら俺もひのきの棒を構える。

金髪野郎が引き抜いたのは、60cmほどのゴージャスなショー  
トソードだった。

ショートソードは攻撃力がそこそこ高い上に、軽くて片手で扱え  
る為かなり使い勝手がいい武器だ。

俺としては攻撃力が高くて攻撃速度の遅い、大剣やハンマーとい  
った両手で扱う武器の方が戦いやすい。

はつきり言っただけ片手剣でも一撃で死にかなないのだ、それだっ  
たら攻撃速度の遅い武器の方が戦うのはいいに決まっている。

あちらから攻撃されると不利だ、ならこちらから攻めるべきだろ  
う。

俺は金髪野郎目掛けてまっすぐに走る、そして一定の距離まで来  
た瞬間“瞬足歩方”でいつきに距離を詰め、右手に持っているひの  
きの棒を金髪野郎目掛けて振り下ろす。

ガッ！

それを金髪野郎にショートソードで受け止められてしまう。

しかし問題ない、これは困なのだ。

受け止められるとすぐに左足を踏み込んで金髪野朗に左アッパーを放つ。

(もらった！)

まさか武器は匣で殴ってくるとは思ってもいないはずだ。

しかし、金髪野朗は左アッパーを紙一重で左へ避け、ショートソードを左から右へ水平に振るう。

それをなんとか後ろに下がって避ける。

まさか今のアッパーをかわされるとは思わなかった。

「思ったよりやるじゃねえか」

元の位置辺りまで距離を取り、ひのきの棒を構え金髪野朗を睨みつけながら言う。

「貴様もな」

金髪野朗もショートソードを構える。

両者とも構え、お互いを睨み合っただま数秒の時間が流れる。

「あ、あの〜」

さっきのできめるつもりだったが思ったよりもやりやがる。

もう手加減はしない、次は“加速”を使ってきめる。たぶん相手も次できめと思ってるはず……

「あ、あの〜」

「うるさい！ 今忙しいから後にしろ！」

クレアの空気を読まない発言に俺が怒鳴る。

「で、でも……」

「後にしてください！」

それでも言おうとするクレアに今度は金髪野朗が怒鳴る。

俺と金髪野朗の2人に言われ、さすがに諦めたのかクレアが黙る。再び無言のにらみ合いが始まり、静寂が訪れる。

何秒睨み合いが続いただろうか、金髪野朗と俺がほぼ同時に動き出す。

相手に向かって全力で……。

「モンスターが着てますよ！」

「へ？」

「グオオ！！」

叫び声のする右方向を見てみると、巨大な熊が猛烈な勢いで突進して来ていた。

「あぶな！」

後ろに転がるようにして、紙一重で熊の突進を避けた。

どうやら金髪野朗もなんとか避けることに成功したらしく、俺とは反対方向にで転がっていた。

「クレア！ モンスター着てるならもつと速く言え！ あと1秒遅かったら確実に死んでたぞ！」

「す、すいません」

突進を避けられた熊は俺……ではなく金髪野朗に再び突進をかます。

「なんでぼく！？」

どうやら俺より金髪野朗の方が、熊に近かったらしい。

金髪野朗は熊の突進を避け、反撃をする為に体勢を整えようとするが、熊が手の爪を振るいまくりなかなか反撃することができない。

金髪野朗と熊の死闘をしばらく無言で眺める。

「……………よし！ クレア休憩は終わりだ、先に進むぞ」

「え？」

「ちよ！ 待て！」

金髪野朗の叫びを無視し、クレアの手を引っ張ってさっき望遠鏡で見た方向に歩き出す。

「おい！ 待て！ 待てって言うてるだろ！」

なにか後ろで叫んでいるような気もするがそのまま無視して進んでいく。

しばらく進むと金髪野朗の叫び声も聞こえなくなっていました。

「あの人助けなくてよかったんでしょっか？」

クレアが後ろを振り返りながら言うてる。

「大丈夫だろ……たぶん」

俺も後ろを見てみるが、もう金髪野朗と熊の姿は見えなかった。

「ロダさん、なんで突然あの人を蹴ったんですか？」

「え？ クレアさっきの奴になんか嫌な事言われてたんじゃないの？」

「いえ、ただ話してただけですよ」

「あ、そうなんだ……」

岩の上から見たときクレアが嫌そうな顔をしていたのは、どうやら俺の勘違いらしい。

ということは、ただ話していただだけの善良なプレイヤーを後ろからいきなり蹴り倒したわけだ。

「まあ、あいつ……悪い奴なんだよ、なんかもう色々悪い奴なんだよ」

だらだらと嫌な汗が流れ落ちる。

「そうだったんですか。悪い人だったんですね」

「……お、おう。極悪非道なやつなんだよ」  
信じちゃったよ、こいつ今の信じちゃったよ。

自分で言っておきながらなんか金髪野朗がかわいそうになってきた。

「ま、まあ、あいつのことはもう忘れよう。うん、忘れよう」

自分に言い聞かせるように言う。

「さっき岩の上から見たときあっちに何か見えたんだ、とりあえずそこに行ってみよう」

そう言っさっき見た方角を指差す。

金髪野朗が追いかけてきても面倒なのですぐに歩き出す。

そのまま無言でしばらく歩いて行くと、クレアが何かを思い出したように言う。

「そういえばロダさん」

「ん？」

後ろにいるクレアの方を振り向く。

「ロダさんってすごい人だったんですね！」

「なんで？」

クレアがなぜかテンション高めに言ってくる。

「伝説の装備の4つのうちの2つも持つてるなんてすごいですよ！」

「……………」

「な、なんでかわいそうな物を見るような目で私を見るんですか？」

「いや、別に……………」

俺は元の方に向き直り、早足で歩き出す。

「ど、どうしたんですかロダさん、待ってくださいよ」

こいつ大丈夫だろうか……………。

幅が10mぐらいの道がまっすぐに伸び、その左右を誰の物かもわからない墓が3つずつ一定間隔で並んでいる。

「ここですかね？」

俺の横に立つクレアが目の前に広がる墓地を見渡しながら聞いてくる。

金髪野朗と別れ望遠鏡で見た方角にしばらく進んでいくと、この墓地にたどり着いた。

「間違いなくここだろうな」

左右に3つずつ並んだ墓が20列近くあるだろうか。

たしか西にある墓という話だったが、こんだだけ大規模な墓地だ。ここで間違いないだろう。

まっすぐに伸びた道の先に階段があり、その上った先に他の墓よりも一際でかい墓が1つだけ建っている。

「あれだろ、間違いなくあれだろ」

俺が階段の上にあるでかい墓を指差しながら言う。

「あれだけ大きいすもんね」

わかりやすいのはいい事だが、こんだだけわかりやすいというのは

どうなんだろうか。

階段に続くまっすぐな道を進んでいく。歩きながら周りを見渡して見るが、どうやら他のプレイヤーはいないようだ。

墓に供えてあるアイテムを取ってくるだけという簡単な内容のクエストで、何十万という報酬がもらえるとは到底思えない。

おそらくは何か起こるはずだ、供え物を取ろうとしたら守護者とか亡霊とかいうモンスターが現れて倒さないとアイテムを取れないとか、まあそんなところだろうとは思うが。

階段までたどり着き、そのまま2、30段ある階段を上る。

階段を上り終えると、黒い石で出来た高さ2m、幅が1mぐらいの四角い墓が見えてくる。

「ヘンリーって誰だ？」

墓の前まで行くと、四角い墓の真ん中に縦に「ヘンリー」と書かれていた。

「たしかクエストを受ける時、おばあさんの旦那さんの名前がヘンリーだって言っていました」

ということはあるのばあさんの旦那の墓なわけだ。

俺は後ろを振り返り、下にある幾つもの墓を見渡す。

こんな場所に一人だけでかい墓があるなんて、ばあさんの旦那は一体何者なんだろうか。報酬で何十万もくれると言う話だし、おそらくものすごい金持ちとかなんだろう。

まあNPCが金持ちだろうがどうでもいい話だが。

「で？ お供え物ってのは何なんだ？」

墓には特に供え物らしきアイテムは見当たらない。

「お供え物としか書いてないんですよね」

クレアがステータス画面を見ながら言う。

俺は墓を1週してみたが、ごみ1つ落ちていなかった。

「何もないな。この墓じゃないんじゃないのか？」

ペチペチと墓を叩きながらクレア聞く。

「このお墓で間違いないと思うんですが……」

そう言ってクレアが近づき、墓に触った瞬間。

ズズズズズズズ！！

ものすごい音を立てながら墓が後ろに移動していく。

そのまま1mほど後ろに移動して止まる。

「なるほど」

墓の下に階段が隠してあったのだ。

「どうやらクエストを受けたプレイヤーがこの墓に触ると動き出す仕掛けらしいな」

下に続く階段を覗いて見るが一番下までは見えない、結構長い階段らしい。

「取り合えず降りてみるか」

そう言ってクレアの方を見ると、5mぐらい離れた所で涙目でこっちを見ていた。

「何してんの？」

「いきなりでちょっとびっくりしちゃって……」

まあ俺もちよっとビビったけど、何もそこまで驚かなくても。

「取り合えず降りてみるか」

さっきと同じことをもう一度言う。

「は、はい」

隠し階段は幅が1mほどしかないので並んで降りる事は無理そうだが、降りた先にモンスターがいる可能性があるので俺が先頭で降りることにした。

ゆっくりと1段ずつ下りていく。左右に小さなたいまつがあるので真っ暗というわけではないが、足もとが見にくい為油断すると階段を踏み外してしまいそうだ。

「きゃー！」

そう思った瞬間に後ろでクレアの小さな悲鳴が聞こえてくる。

たぶん足を踏み外したのだろう、俺は後ろを振り返ることなくそのまま階段を下りていく。

それにしても長い階段だ、階段を下り始めてもう5分ほど経つがまだ終りが見えてこない。

すぐに終わるかと思っていたのだが、階段をこんなに無駄に長くする理由でもあるのだろうか。

そこからさらに2分ほど下りると階段の終りが見えてくる。

階段が終わると高さや幅が3mぐらい、長さ5mぐらいの小さな部屋になっていた。

「えらく長い階段だったな」

帰りはこの長い階段を上らないといけないかと思うとつんざりする。

部屋の奥に十字架があった、近づいてみるとぼろぼろの十字架にヘンリーと書かれていた。

その十字架に豪華なネックレスが掛けられており、ネックレスの先には紫色に光る小さな玉が付いている。

「お供え物つてこれですかね？」

クレアがそう言いながらネックレスに手を伸ばす。

「まて！」

俺が叫ぶと、クレアがビクツとして手を止め俺を見る。

「何が起きるかわからんから慎重に取った方がいい」

「わ、わかりました」

あらためてクレアがゆっくりとネックレスに手を伸ばす。

俺はいつでも戦闘できる態勢を取りながらクレアがネックレスを取るのを見守る。

「っ！」

クレアがネックレスに手を掛けた瞬間、ものすごい悪寒が俺の全身を駆け巡る。

しかし特になにも起きなかった。

「なにも起きませんね」

「あ、ああ」

嫌な汗を拭いながら言う。

すぐに治まったが今の悪寒はなんだっただろうか。

「まあとりあえずクエスト欄を見てみる、クエストを進めると新しい情報が追加される場合があるから」

クレアがステータス画面を開き確認する。

「あ、追加されてますよ！ え〜と、このネツクレスをおばあさんに渡せばいいみたいです。あとこのアイテムを持つてるプレイヤーが死んだ場合、アイテムはなくなっちゃうみたいです」

「それだけか？」

死んだらだめ、というのは俺達のような防御力の低いプレイヤーからすれば確かに厄介ではあるが、それだけであの報酬というのはどうも納得できない。

「もう1つありました、このアイテムを取ってからおばあさんに渡すまでの時間で報酬が変わるみたいです」

つまり早ければ早いほどもらえる報酬が高くなるわけだ。

「なら急いだ方がいいな」

報酬を半分で分ける約束だ、クレアが欲しがっていた杖は20万という話だし、最低でも40万はもらわなければならない。

「そうですね」

俺達は先ほど下りてきた無駄に長い階段を今度は上り始める。

この階段が無駄に長いのは時間稼ぎの為なのだろうか。

しばらく上ると入口が見えてくる、暗い中にいたので太陽の光が眩しく目をつぶってしまう。

階段を上り切り、ゆっくりと目を開ける。

「ぎゃー！ー！ー！」

目を開けるとそこには、墓地のまっすぐな道を入口から半分ぐらいがモンスターで埋め尽くされていた。

「ど、どうしたんですか！？」

俺の叫びを聞いてクレアが階段を駆け上がってくる。

「きゃー！」

俺と同じものを見てしまったのだろう、クレアも悲鳴を上げる。

「ななななな、なに！　ねえなんなのこれ！　どっから湧いたのこれ！」

「わ、わかりませんよ！」

凄まじい数だ、100いや200はいるだろうか。

入口辺りに目をやると、墓地の外からモンスターが次々に集まってきていた。

それを見ながら俺の中でこのクエストへの疑問が次々に解決していった。

「わ、わかったぞ！　湧いたんじゃない、集まってきたんだ！」  
後ろにいるクレアの方を向く。

「さっきのアイテムにはモンスターを引き寄せる効果があるんだ！」  
あのばあさんに話かけてからがクエストの始まりではなく、さっきのネックレスを取ってからがクエストの本当の始まりだったのだ。  
ネックレスを取った時の悪寒はこれだったのだ。そしてあの無駄に長い階段は俺の予想通りまさに時間稼ぎ、モンスターが集まるまでの時間稼ぎだったのだ。

階段を上がるのに約6、7分ぐらいだろう、たったそれ誰だけの時間でこれほどのモンスターが集まったのだ、仮に死なずに倒し続けてもモンスターが減るよりも増えるスピードの方が速い。

「無理だろ！　これ絶対無理だろ！」

これのクエストをクリアするとなるといったい何人のプレイヤーが必要だろうか。

攻撃、防御、そして機動力のあるPTが4つ、いやそれ以上必要かもしれない、それをたった2人でやるなど不可能だ。

「……なんとかなるかもしれません」

「は？」

クレアが何て言ったのかわからず聞きなおす。

「クリアできるかどうかはわかりませんが、今この状況はなんとか切り抜けられます。そのあとはひたすら逃げ続けられればどうにかなるかもしれません」

この状況を切り抜ける？ 入口は大量のモンスターで埋まってお  
り、さらにどんどん増え続けているのだ、切り抜けるなど不可  
能だろう。

しかし……。

「どうやって？」

あの弱っちいクレアができると言ったのだ、なにか策があるのか  
もしれない。

「さっき1つだけ使える魔法があるって言ったじゃないですか、あ  
れを使えばなんとかなると思います」

そう言っただけでクレアがモンスターのいる方へ走り出す。

「ちよ！ どうすんだよ！」

あわてて後を追う。

階段を下り切った所でクレアが止まる。

「すいません！ 発動までに時間が掛かります、その間護衛をお願  
いします！」

「お、おう！」

いつもと違いテキパキと行動するクレアにちよっと押されつつも  
護衛しようとモンスターの方を向く。

「いやいやいや！ 無理じゃね！？ 護衛するとか無理じゃね！？」

高い所から見てもすごかったが、同じ高さ立って見ると半端じ  
やないくらい怖い。

道を埋め尽くす大量のモンスターがゆっくりとこっちに近寄って  
くるのだ、もはやホラーである。

「ねえ、まだ！ まだなの！？」

何秒と経っていないが待ち切れずに後ろにいるクレアの方を向く。  
クレアは木で出来た杖を横に水平に構え何かをぶつぶつと唱えて  
いた、その足元に半径1mほどの白い魔方陣が展開されている。

クレアが何事かぶつぶつ言う度に足元の魔方陣が少しずつ大きく  
なっていく。

ぶつぶつ言ってるのはおそらく詠唱だろう、詠唱が必要な魔法が

あるとは知らなかった。

集中しているらしくクレアは俺の問いに答えてはくれなかった。仕方なく元の方へ振り返るとモンスターが少しこちらに近づいていた。

攻撃してみよか……… やめとこう、攻撃した瞬間に一斉に押し寄せてくる気がする。

そうなる俺がやることはなにもないような……。

俺はぎりぎりまでは手を出さずにクレアを見守ることにした。

クレアの魔方阵はすでに3mほどの大きさになっていた、いったいどこまで大きくなるのだろうか。

(やばいよ！ やばいよー！)

すでにモンスター達は5、6mほどの位置まできている。

限界だ、そう思い手に持っていたコインをモンスターに向かって投げようと構える。

「ロダさん！ 準備できました離れたください！」

言われるままに俺は横に急いで移動する。

クレアは水平に構えていた杖を大量のモンスター達の方へ向ける。

「超広範囲殲滅魔法」

……なんかものすごい物騒な言葉が聞こえたような。

クレアが物騒なことを言った途端、杖の先から新たな魔方阵が横に展開される。

その状態のまま数秒動きが止まる。

モンスターが展開された魔方阵に、手が届きそうな距離まで来た瞬間クレアが叫ぶ。

「アマテラス！」

魔方阵の中心からものすごい光があふれたかと思うと、その光が筒状の形……巨大なレーザーとなって放たれる。

放たれたレーザーは大量のモンスターを巻き込みながら、墓地の入り口付近で凄まじい爆発を引き起こす。

爆発起きた瞬間、目の前の世界が真っ白に染まる。

「おおおおおおおおお！！！」

爆発の余波と凄まじい光、そして威力に思わず意味不明な叫び声を上げてしまう。

光が収まると道を埋め尽くしていたモンスターのほとんどが消滅していた。

ありえない、そう言ってしまいそうなほど馬鹿げた威力だ、まさかこんな魔法が存在するとは。

「す、すげえ。すごいぞクレア！」

あまりの凄まじい威力にハイテンションでクレアの方を向く。しかしクレアはうつ伏せに倒れていた。

「……お、おい。大丈夫か」

近づいて聞いてみるとクレアが首だけを微かに動かしながら言う。「す、すいません。あの魔法使うとしばらく動けなくなるんです」なるほどあの威力だ、それぐらいの反動があっても不思議じゃない。

「だからあのアイテムをロダさんに渡すので、街まで持って行ってくれないませんか？」

「バカ野郎！ お前を置いて行けるわけないだろ！」

ただ単にクエストを受けたプレイヤーが持つて行かないとクリアしたことにならないからなのだが、ちょっと試してみたかっただけである。

「ロ、ロダさん」

しかしクレアは俺の発言になにを勘違いしたのか、感動したような顔で俺を見ていた。

「で、でもどうするんですか？ あの魔法は次打てるようになるまでにすごく時間が掛かるんです、早くしないとまたモンスターが集まってきますよ」

「そんなの決まってるだろ」

俺はクレアを抱き起こすと、無理矢理自分の背中に乗せる。

「え？」

「おまえを背負って走る！」

そう言っつて勢いよく立ちあがる。

「ほ、本気ですか!？」

「当たり前だ、大丈夫俺に任せろ」

自信満々にそう言ったものの、俺は無駄に広いマラトヤ高原に目を向ける。

オーベルビルリアまで遠いな……………。

## レベル10 金は天下の回りもの（後書き）

なんとか11話目更新しました。

今回は今までで一番長く書きました。

あぶなく更新しないで1ヶ月経ってしまうところでした。

10話いったしちょっと休もう、とか思ったのがいけなかつたですね。

いつも言ってますが次はできるだけ早く更新しようと思います。

ちなみに次回は走ります、ひたすら走ります。

## レベル11 時は金なり！

人というのは結構重いものだ、こうやって背負ってみると本当にそう思う。

別にクレアが特別重いかかそういうわけではない、むしろ身体的にも装備的にも軽い方だろう。

実際起き上がらせるのも、背負うのも簡単にできた。

だがしかし、背負ったままひたすら走り続けるとなると話は別である。

それはもちろん軽いにこしたことはないのだが、一人一人を背負ったままいったいどこまで走り続けられるだろうか。

俺に任せるとか自信満々に言った手前、今さら後には引けないわけ、一か八か走れる所まで走るしかないわけだ。

時間が惜しい、こんな所でいつまでも止まっているわけにはいかない、こうしてる間にもモンスター達がこちらに集まってきているのだ。

俺はクレアを背負ったまま、墓地の道を走りだす。

さつきまで大量のモンスターで埋まっていた道は、クレアの魔法によりきれいに掃除され非常に走りやすくなっている。

道の半分ぐらいまで来た時、運よくクレアの魔法に当たらなかつたのか、もしくは外から新たに入ってきたのかはわからないが、墓地の入り口に1匹のモンスターが立っているのが見える。

ヒンバとか言う名前、身長2mぐらいの筋肉質な人型モンスターで、両手にぼろぼろの斧を2つ装備している。上半身は裸で着ている物はビキニパンツのみ、そして顔だけなぜか馬というトラウマ物の変態モンスターである。

はつきり言ってあんな変態モンスターの相手をしている暇などない、クレアを背負っているので両手は使えないし、時間が掛かれれば他のモンスターが集まってくるだろう。

俺は道の真ん中にいるヒンバに向かってまっすぐに走る。

そしてヒンバから2m付近の所でスキルを発動させる。

“加速”

その瞬間、ヒンバの動きが急激に遅くなる。

思考を“加速”させたのだ。

ヒンバはゆっくりとした動きで右手の斧を持ち上げ、俺に向かって振り下ろす。

それを俺もゆっくりとした速さで、ヒンバが斧を持ち上げた腕の方、つまり俺から見て左に避ける。

俺が元いた地面にヒンバの斧が突き刺さる。

俺は左に避けたあとすぐに“瞬足歩方”でヒンバを一気に抜き去り、後ろを振り返ることなくそのまま走り出す。

ヒンバは攻撃力が高いが足は遅い、追いつかれることはまずないだろう。

ちなみに思考の“加速”はものすごいMPを消費するのでヒンバを抜くと同時に解除した。この先何が起きるかわからない、こんな所でMPを使い切るわけにはいかなかった。

ヒンバを抜き去り、止まることなくそのまま墓地を出た俺は、オーベルビアに向かって全力で走り続ける。

体力を温存してなどいられなかった、左右そして後ろからすごい数の足音とわけのわからない奇声が響いてきている。

後ろを振り返る必要もない、大量のモンスターが俺を追いかけてきているのだ。

俺が予想していたよりもモンスターの集まり方が速い、おそらくは1度攻撃することでモンスターが活発になる仕掛けなのだろう。

今はまだ足音は遠くから聞こえているのですぐに追いつかれることはないだろうが、余裕をかましている暇などなかった。

無駄な体力を使わず最短距離を走り続ける、生き残る方法はこれしかない。

そう思った時、遠くに何かが見えた。

一瞬モンスターかと思ったが、よく見たら違う、あれは……。  
「金髪!？」

成金趣味丸出しのピカピカ光る装備をしている金髪野朗だった。  
さっきのモンスターを倒して追いかけて来たのだろう。  
めんどくさい非常にめんどくさい、あんなやつに構っていたらモ  
ンスターの餌食になってしまう。

金髪野朗も俺の存在に気づいたのか、腰にある剣を抜き叫んでく  
る。

「貴様! さっきはよくも……」

威勢よくしゃべっていた金髪野朗の声がだんだんと小さくなつて  
いった。

おそらくは俺の後ろに広がる光景を見てしまったのだろう、剣を  
構えたまま固まってしまった。

その隙に俺は金髪野朗の横を走り抜ける。

しかし金髪野朗も今自分がどうすべきかを悟っただろう、俺の横  
で俺と同じ方向に走り始めたのだ。

「おいしい!! あれはなんだ!? なんなんだ!？」

俺の左側を走りながら金髪野朗が聞いてくる。

「は!? なにが? なんの話!？」

「この状況でとぼけるな! 後ろから追いかけてきてるデンジャラ  
スなやつらの話だよ! とうかなんなんだ!? どうやったらあ  
んなに集められるんだ!？」

「おまえほんとに何言ってるの!? なにも起きてないから! 今  
世界は平和で満ち溢れてるから!」

「いやむしろモンスターという名の絶望で満ち溢れてるわ!」

俺と金髪野朗は叫びながら全力で走り続ける。

「もういい、わかった。どうしてこうなったのかは取りあえず置い  
とこう。まずはどうやってこの状況を切り抜けるかを考えるべきだ」  
いい加減聞いても答えないとわかったのか、金髪野朗がまともな  
ことを提案してくる。

「たまにはいいこと言うじやねえか金髪、ちょうど俺もそう思ってたところだ」

遠くの方に巨大な岩が見えてくる、あそこはたしか金髪野朗と戦った場所だ。

あそこからオーベルベリアまでまだかなりの距離がある、このままでは逃げ切りないかもしれない。

「金髪、俺に提案がある！」

「本当か！？ 言ってみろ！」

「俺はこのまま町まで走り続けるから、お前はここで後ろのやつらを足止めするんだ！」

「死ぬよね！？ それ確実に僕死ぬよね！？」

「大丈夫！ おまえならできる！」

「できるか！ あの数を足止めできるわけないだろ！」

「いやできるって！ お前ならできるって！ 自分を信じて！」

「信じられるか！ むしろお前が足止めをするべきだろうが！ 伝説の装備はどうした伝説の装備は！？」

「いや伝説の装備はあれだから！ なんか封印さえてるから！ 伝説の賢者様にここぞという時以外開放するなと嚴重に言われてるから！」

「今この状況がここぞという時だろうが！ この状況で使わないでいつ使うんだよ！？」

「あ、あれだよおまえ！ よくあるだろ、千匹の魔王に囲るとか、そんな時だよ！」

「あるか！ そんな状況あるわけないだろ！ むしろそんな状況になっってみたいわ！」

俺も金髪野朗も全速力で走りながら叫び続けていたせいか、ハアハアと息が荒くなってきた。

ものすごく体力を無駄に消費している気がする。

金髪野朗もそれに気づいたのか、しばらく無言の全力疾走が続く。

「口、口ダさん！」

今まで黙っていたクリアが突然話しかけてくる。

「どうした？」

俺は後ろを振り返らず前を向いたままクリアに聞き返す。

「後ろからモンスターが近づいてきてますよ！」

「なにー!!」

モンスター達とはまだ距離が離れていたはずだ、金髪野朗とわけのわからないことを言い合ってる内に追いつかれたのだろうか。

俺はすぐに後ろを振り返り確認する。

1匹のクルルが5m後ろ辺りまで追いついてきていた。

いや1匹ではなかった、最初に見えたクルルを先頭に、まるで1列に並ぶかのように数十匹のクルル達が追いついてきていた。

「来てるって！ 来てるって！ とうにかしる金髪！」

足だけは異様に速いクルルのことを完全に忘れていた。

「無理だ！ 1、2匹ならともかく、走りながらあの数を相手にできるわけないだろ！」

やばい、このままではすぐに追いつかれてします。

そう思っていると数m先に1mぐらいの大きさの岩があるのが見える。

あんな所に岩なんてあったらだろうか？

来る時はなかったような気がするのだが……まあ今はそんなことはどうでもいい。

その岩の、俺は右側を金髪野朗が左側を走りけようとした瞬間、岩が突然動き出した。

「え？」

よく見てみるとそれは岩ではなかった、茶色のごつごつとした鎧を着込んだプレイヤーの背中だったのだ。

普通なら間違うことはないかもしれないが、はっきり言ってそれどころではなかったので全然気づかなかった。

岩の鎧を着込んだプレイヤーは俺たちが抜くのとほぼ同時に後ろを振り返り、そして……俺たちを追いかけていたクルルと衝突

した。

「ぼふお！」

クルルと衝突したプレイヤーはあまりのことにわけのわからない叫び声をあげる。

さらにその後ろから追いかけていたクルル達が次々にタックルをかましていく。

そしてそのプレイヤーは大量のクルルに埋まって見えなくなってしまう。

「……………」

痛いほどの沈黙が流れる。

「い、いや。悪くないよ、俺全然悪くないよ」

「あ、ああ。悪くない、誰も悪くない。今のは事故だ、悲しい事故だ」

嫌な汗がたらたらと流れ落ちていく。

「だよな！ 事故だよな！ けしてMPKなどではないよな！」

MPKとは、MONSTER PLAYER KILLER（モンスタープレイヤーキル）の略で、まあようするにモンスターを他プレイヤーに擦り付けてそのプレイヤーを殺すという、あまりよろしくない行為のことである。

「MPK？ 違う違う違う！ 絶対違う！ 100人に聞いても100人は違うって言うね」

金髪野朗も変な汗をかいてるように見える。

「100人中100人が言うなら大丈夫だな！ 全然問題ないな！」

「問題ない問題ない！ というよりさっきの本当にプレイヤーだった？ ぼ、僕にはただの岩に見えたけど」

「いやあれはプレイ……岩だったかも……いやあれは完全にただの岩だったな！ 岩だったよマジで！」

「そうだろ！ じゃまったく問題ない！」

運よくプレイヤー……ではなくただの岩のおかげで取り合えずクルルの脅威は去ったが、おそらくまた別のクルルが追いついてくる

だろう。

そしてクルルだけじゃなく他のモンスターも追いついてくるかもしれない、果たしてオーベルビアまでたどり着けるのだろうか。前方に広がる高原を見つめてみる。

しかしオーベルビアはまだ見えてこなかった。

今日は気分がいい。

雲ひとつない晴天、こんな日は気分がいいに決まっている。

だが本当の理由は天気がいいからではない、前々から狙っていた装備を遂に手に入れたのだ。

ロックアーマーという鎧で、普通の店では売っておらず、ゴーレムとかいうモンスターが極稀に落とすレア装備だ。

まあこの鎧ビジュアル的にはちょっとあれなのだが防御力がかなり高い、ここ辺りのモンスターの攻撃など痛くもかゆくもないだろう。

この鎧がオーベルビアの、プレイヤーがやっている店で売られているのを見つけ時は驚いた、こんなレア装備が売られていることはそうそうない。

なんとかお金をかき集めてさつき遂に手に入れたのだ。

そしてさつきこの鎧の性能を試そうとマラトヤ高原にやって来たわけだ。

しかし、オーベルビアからかなりの距離歩いて来たはずなのだが、ここまでモンスターと1度も遭遇しなかった。

おかしい、マラトヤ高原にはかなりのモンスターがいるはずだ、ここまで1度も遭遇しないなんてありえない。

バグだろうか？

しばらく考えてみたものの、全然わからなかった。  
まあいいそのうち遭遇するだろう、そう思いその場に座り込む。  
この鎧は思った以上に重かった、それを装備し結構な距離を歩いてきたので疲れてしまった。ちょうどモンスターもいないことだしここで休憩することにした。

座って空を見上げると、雲ひとつない青空が広がっている。

今日は本当にいい天気だ。

.....。

「来てるって！ 来てるって！ どうかしる金髪！」

「無理だ！ 1、2匹ならともかく、走りながらあの数を相手にできるわけないだろ！」

はっ！

後ろから聞こえてきた切羽詰ったような声で目が覚めた、あまりの天気よさに寝てしまいそうだった。

後ろからは声だけじゃなく、足音と奇声らしき音が響いてきている。

何事だろうかと思い、後ろを振り向く。

「え？」

振り向いた瞬間に左右をすごい速さで何かが通り過ぎる。

しかしそれを確認する暇はなかった。

鳥型のモンスターが猛烈な勢いで突っ込んできたのだ。

「ぼおお！」

しかしそれだけでは終わらなかった、新たなモンスターが次々に突っ込んできたのだ。

もはや叫び声すら上げることができない。

何十回体当たりをされたらどうか、しばらくすると鳥達による集団体当たりも終わった。

上に被さっている鳥達を押しつけなんとか外に這い上がる。

あれだけ体当たりをされて生きていられたのはこの鎧のおかげだろう、この鎧を着ていなかったら間違いなく死んでいた。

それにしても一体何事だ、そんな事を思っていると後ろからすごい数の足音が聞こえてくる。

あわてて後ろを確認すると、そこには数え切れないほどの大量のモンスターがこちらに向かって走ってきていた。

「な、なんだこれは！」

ありえない！ どうなってるんだ？ このモンスター達は一体どこに向かっていているんだ？

そんな考えが頭の中でぐるぐると回る。

モンスター達が向かう先にはなにがある？ ……オーベルベリアだ。

つまりモンスターの大量群がオーベルベリアに向かって進行している？

しかしそこまでしか考えることはできなかった。

この鎧がいくら防御力が高いとはいえ、これほどの数のモンスター相手では耐える切る事はできなかった。

## レベル11 時は金なり！（後書き）

墓地から町までを1話で書くつもりでしたが、長くなったので2話にしました。

もしかしたら3話になるかも……。

## レベル12 時は金なり!2

「大変です編集長!」

バタバタと足音を立てながら一人のプレイヤーがホームに入ってくる。

「どうしたのかねエリコ君、そんなにあわてて」

かなり急いで来たのかエリコ君は息を切らしながら私の机の前までやってきた。

「大変です編集長! 今オーベルビアにモンスターの大量が攻めて来てるらしいんです!」

「モンスターの大量? どういうことかね?」

モンスターの大量というのは意味はわかるのだが、なぜそれが攻めて来ているのかわからない、モンスターが町に攻めてくるなどありえないことだ。

「私も詳細はわからないんですけど、知り合いからオーベルビアにモンスターの大量が攻めて来てるってメールがきたんですよ」

「ガセ情報じゃないのかね?」

新聞社などやっていると、結構わけのわからないガセ情報が流れてくるものだ。

「ガセじゃないみたいです、数人のプレイヤーがモンスターの大量を見たらしいんですよ。それに噂を聞きつけたプレイヤー達がオーベルビアに集まってきたらしいんです」

モンスターが町に攻めてくるなんてありえることではないが、もしそれが本当なら……これほど面白いネタはない。

それにガセ情報だったとしても、噂でプレイヤーが集まって来たというだけでそれなりのニュースになる。

「よし、エリコ君! すぐにオーベルビアに向かうぞ!」

「はい!」

椅子から立ち上がり急いで出口に向かう。

「次の新聞のネタは変更だな」

ちようど初心者狩りのネタも落ち目になってきた所で、新しいネタはないかと思っていたところだったのだ。

「えー！ またですか！ もう出来上がってるんですよ！」

「帰ってからすぐに作り直せば間に合うだろ」

後ろからエリコ君がまだ何か言っているようだったがそれどころではない、急いでオーベルピリアに向かわなくてはならないのだから。

「金髪！ 後ろきてるぞ！」

後ろから走ってきたクルルを金髪が左に避け、それと同時にクルルの腹辺りを剣で切りつける。

「ギャア！」

奇声を上げているクルルに俺が留めのとび蹴りをかます。

蹴りを入れられたクルルはそのまま地面に倒れこみ消滅する。

そして俺と金髪は再び走り出す。

こんな風に金髪と協力して、追いついてきたクルルを倒したのは何匹になるだろうか。

運よく1匹ずつ追いついてくるのでなんとか倒すことは出来ているが、攻撃するたびに止まったりスピードダウンしてしまう為、少しずつ後ろの大群に追いつかれて来ている。

しかも俺も金髪もだいぶ息が荒くなってきている、かなりの距離を走ってきたのでオーベルピリアまではそんなに遠くはないはずだが、そのまえに体力の限界がきてしまいかもしれない。

「わんわん！」

金髪野朗と並んで全力疾走する中、後ろから場違いな子犬の鳴き声が聞こえてくる。

なんで子犬が？ 俺は首だけを動かして後ろを確認する。

「ぎゃー！！！」

可愛らしい目が2つ付いており、黒い鼻、小さな口、そして全身を真っ白な毛でおおっている。まあ犬だ、どこからどう見ても普通の犬だ、大きさ以外は……。

「な、なんかやばいの来ってるってー！」

その犬は四つん這いになってるにもかかわらず、大きさが3m近くあった。

わんわんと可愛らしい声で泣きながら、周囲のモンスターを蹴散らしてこちらに向かって来ている。

「あ、あれはまさか！」

俺と同じく後ろを確認した金髪が驚いたように言う。

「知ってるのか金髪？」

「あれはたぶん、マラトヤ高原に極稀に出現すると言われてる超レアモンスターのポチだ！」

「ちよまてえええ！！ 確かに泣き声はポチだけど！ ポチだけどおおー！！！」

俺はもう一度後ろを確認してみる。

さつきまで遠くにいたポチが近くまで迫って来ていた。

「ポチ速いって！ ポチ速いってええ！！！」

クルル並み、いやクルル以上の足の速さだ。

「どうすんだよ金髪！」

左を走る金髪に八つ当たり気味に怒鳴る。

「まて！ たしかポチは口から唾を吐き出すと聞いた事がある。その唾に当たるとマヒ状態になってしばらく動けなくなる……」

その瞬間、後ろから飛んできた何かが俺と金髪の間を通りすぎて行く。

「……」

今のは間違いなくポチの口から吐き出された唾液だろう。

「うおおおおー！！！」

あれに当たつたら動けなくなつて間違ひなく死ぬ。

後ろから次々に飛んでくる危険な物体を、左右にジグザグに走ることでなんとか避け続ける。

しかしポチの足が速く、徐々に近づいて来るため少しづつ避けづらくなつていく。

「やばいつて！ やばいつてー！ ていうか誰！ ポチの飼い主誰！ ちゃんと繋いどけポケー！！」

明らかにポチは俺に向かつて走つて来ていた。

数mまで近づいたポチが新たな唾を吐きだす、それをなんとか避けることに成功する。

しかし、無理に避けた為に体勢が少し崩れてします。

そこに新たな唾が飛んでくる。

(避け切れない！)

そう思つた時、唾と俺の間に何か割り込んでくる。

「金髪！？」

間に割り込んだのは金髪だった、避け切れない俺をかばつたのだ。

「おまえ……！！」

ポチの唾を受けた金髪はマヒ状態になつたのかその場に立ち止まるつてしまふ。

「勘違いするな、別に貴様をかばつたわけじゃない。ただ疲れたから休憩しようと思つただけだ」

俺に背を向けて間に入った為、俺からは金髪の顔は見えなかつた。「なにしてる、さつさと行け！ レディを死なすわけにはいかんだろっが」

くさいセリフを吐く金髪の背中を数秒ほど見ていた俺は、元の方向を向き直す。

「くそ！ すまん金髪！」

そしてオーベルビアに向かつて再び全力で走りだす。

「ふっ、安心しろ、ポチは僕がここで食い止めてやる！」

後ろから金髪の声が聞こえてくる。

「金髪！ お前の死は絶対に無駄にしねえぞ！」  
オーベルビアはもうすぐそこまで近づいていた。

オーベルビアの西出入口付近のフィールドには大勢のプレイヤー達が集まっていた。

ざっと見ただけで300人はいるだろうか。

噂を聞きつけて集まってきたのだ。いや噂などではない、何人もプレイヤーがモンスターの大群がこちらに向かって来るのを確認している。

明らかにただ見に来ただけの野次馬や、PTを組んでモンスター討伐をしようとしているプレイヤー、色々なプレイヤーがいるが、おそらくこの中の誰も今回のモンスターの大群の詳細を知ってる者はいないのではないだろうか。

よくわからないけどなんか起きてるから取りあえず来た、というプレイヤーがほとんどだろう。

そんな奴等が勝手に集まった集団が統率が取れるはずもなく、みんな好きな所に自分勝手に陣取っている。

オーベルビアの西出入口前にほとんどのプレイヤーが集まっており、その左右に他のプレイヤー達が展開している状態だ。

要するに、西出入口前が一番いいポジションなのでそこに大量に集まったのだ、密集しすぎてろくに動けない状態である、そしてそこに入れなかったプレイヤー達が仕方なく左右に陣取っているのだ。集まりすぎたプレイヤー達により、現在オーベルビアの西出入口は誰も出入りできない状態となってしまうていた。

「はあはあ！」

体力の限界が近い、今にも足が止まってしまいそうだ。

まだか！ オーベルビリアはまだか！ もうそんな考えしか浮かばなかった。

やはり無理だったのだ、一人を背負って走る続けるなど無理だったのだ。

しかし止まらなかった、もうほとんど体力なんて残っていないのに足が止まらない、なにかがひたすらに俺の足を動かし続ける。

「すみませんロダさん……」

後ろのクレアが申し訳なさそうに俺に言ってくる。

「……なにが？」

「私ロダさんの足を引っ張ってばかりで、全然役に立てなくて……」  
後ろから聞こえてくるクレアの声は段々小さくなっていった。

「お前は……あほか！」

「え！？」

突然俺が怒鳴ったせい、クレアが驚いたような声を上げる。

「いいか！ あの墓地でお前がいなかったら確実に死んでたんだよ！ つまりお前は自分の役目を完璧にこなしたんだ！ だったらそこから先は俺の役目だろうが！ お互いやるべき事をやる、それがPTTでもんだろうがよ！」

疲れているせい、何も考えずに思ったことを怒鳴り散らす。

「だからお前は堂々と俺に背負われてればいいんだよ！ わかったか！？」

「は、はい！」

後ろから聞こえてくる声が、少し嬉しそうな感じに聞こえたのは俺が疲れているからだだろうか。

しかしそんなことを確認する元気は俺にはなかった。  
そしてまたしばらく無言の全力疾走が続く。

「ロ、ロダさん！ オーベルビリアが！」

クレアの声を聞いて、急いで俺も前を確認する。  
見えた！ ついにオーベルビルアが見えたのだ。

「よっしゃ！」

嬉しさのあまり思わず叫んでしまう。

「ロダさん、私をここで降ろしてください」

突然クレアがそんなことを言い出した。

「は？ お前ここまで来てまだそんなこと言ってるの？」

「あ、いえ違うんです！ もう動けるようになったんですよ」

なるほど、要するにさっきの魔法の反動が直ったということか。

「なんだそうということか」

俺は立ち止まってクレアを地面に下ろす。

ということはここからはクレアが一人で走っていけるわけだ、なら俺はここでギプアップさせてもらおう、はっきり言ってもう限界である。

「ロダさん！ あれ見てください！」

クレアがオーベルビルアを指差しながら言ってくる。

いや、オーベルビルアを指差していたのではなかった、オーベルビルアの入口に集まっているプレイヤー達を指差していた。

「な、なんじゃありゃ！」

なんである所に大量のプレイヤーが集まっているんだ、とにかくイベントでもあるのだろうか？

ここから見ると一人一人は小さくてほとんど見えないが、大量に集まっているのが分かる。

急いで望遠鏡を取り出して見てみる。

「やばいな、入り口に集まりすぎて通れる状態じゃないぞ」

なぜか分からないが大量に集まったプレイヤーで入口が塞がってしまっていた。

「ど、どうしましょう」

「ちよつとまで、今考えるから」

時間がないので思考を“加速”させて考えることにした。

……。  
しばらく無言で考える。

そして一つの方法を思いつく、あまりよろしくない方法を……。

「……なあクレア、さっきの魔法もう1回撃てるか？」

「え？ 撃てますけど……」

「ふふふ、そうかそうか」

俺の不敵な笑いにクレアが少し引いているような気がするのほきつと気のせいだろう。

後になって考えてみると、北か南にある別の入口を目指せばよかったのだが、この時は疲れていたのもあまりまともな考えが浮かばなかったのだ。

「じゃさっそく準備してくれ」

「え？ でも今から準備しても間に合わないと思いますけど……」

クレアが後ろから来ているモンスターの大量を見ながら言う。

「それはたぶん大丈夫、俺に考えがあるから」

「そ、そうなんですか？ わかりましたやります!!」

そう言っただけクレアはモンスターの大量に向って詠唱を開始しようとする。

「おいおいおい、なにしてんの？」

「え？ 魔法の準備ですけど……」

「いやいや、そうじゃなくて」

俺はクレアに近づいて、無理やり180度回転させる。

「方向が違う、こっちに向かって撃つんだよ」

つまりモンスターの大量ではなく、オーベルビアの入口を塞いでいるプレイヤー達に向かってだ。

「ええー!!!」

考えてもいなかったのかクレアが大声を上げる。

「でもそんなことしたら！」

「大丈夫大丈夫、あいつら強いから、めっちゃくちゃ強いから、クレアの魔法ぐらいじゃ死なないからまじで」

もちろん嘘である、いくら高レベルのプレイヤーでもクレアの魔法が直撃したら間違いないで死ぬだろう。

ここで死んだら今までずっと走って来たのが無駄になってしまうのだ、それなのに入口を封鎖するとはなんて奴等だろうか、そんな奴等にはお仕置きが必要だと思う。

疲れているせいか、なんか思考が変な方向に行ってる気がする。

「ほ、本当ですか？」

「ほんとほんと！ 大丈夫だから！ だから速く！ 速く！」

「わ、わかりました！」

クレアが急いで詠唱を開始する。

さてここからが問題だ、出来るかわからないが出来なければここで終わりである。

オーベルビアに向かって詠唱するクレアの肩に後ろから手を置く。

そしてスキルを発動させる。

“加速”

スキルが発動すると同時にクレアの詠唱が“加速”され、魔方陣がさつきよりも速く展開されていく。

成功だ、自分だけでなく他のプレイヤーを“加速”させることも出来たのだ。

しかし、俺が予想したよりも“加速”されなかった。

どうやら自分を“加速”する割合よりも、他のプレイヤーを“加速”する割合の方が小さいようである。

（やばいやばいやばいやばい！）

後ろから来ているモンスター達の足音がすぐ近くから聞こえてくる。

（速く！ 速く！ 速く！）

心の中でそう叫んだ時、クレアの魔法が完成する。

「できました！」

そしてクレアは水平に構えていた杖をオーベルビアに向ける。

「超広範囲殲滅魔法」

さつきも聞いたが、ほんと物騒な魔法である。

「アマテラス！」

魔方陣の中心からものすごい光があふれ、巨大なレーザーが放たれる。

さつきはあまりの威力に見とれてしまったが、今回はそんなそんなことをしている暇はない。

魔法が放たれると同時に動き出す。

そして魔法を撃つばかりのクレアを抱き上げ、そのままオーベルビアに向かって全力で走り出す。

その瞬間クレアの魔法が爆発し、目の前の世界を真っ白に染め上げる。

「うおおおおー！」

前方からくる爆発の余波で目を開けていられなくなるが、足だけは止めないで走り続ける。

爆発がおさまり目を開けた時、オーベルビア入口のすぐそばまで近づいていた。

入口に集まっていたプレイヤーは吹き飛んだのかほとんどいなかった、数人がそこあたりに転がっていたような気もするが、この際あまり深く考えないことにした。

全力で走る中、すぐ後ろから大量の足音が聞こえてくる。間に合わない。

俺のどこか冷静な部分がそう判断する。

だったらどうする？ これしかないだろう。

「クレア！」

「は、はい！」

右肩に担いでいるクレアが声を上げる。

「歯食いしばれ！」

「え？」

クレアの襟を掴み、入口に向かって思いっきり投げる。

「飛んでけー!!」

投げると同時に“加速”させる。

プレイヤーを投げて“加速”するかは分からないが、まあ念のためである。

はつきり言っこの距離から投げても入口まで届くかは分からなかった。

届けー!!

そう念じたが、モンスターの波に押しつぶされ最後まで確認することはできなかつた。

俺が最後に見たのは入口に向かって飛んで行くクレアの姿だった。

## レベル12 時は金なり!2 (後書き)

どもー。

今回はなんとかいつもより少し早く更新することができました。

次で一応第2章は終わる予定です。

では次も早めに更新できるようがんばりますので、また読んでやってください。

### レベル13 金の切れ目が縁の切れ目？

俺はオーベルビアの南出入口に向かってゆっくりと歩いていた。オーベルビアの町は大変な騒ぎになっていた。

モンスターの大群に備えてかなりの数のプレイヤーが西出入口に集まった。しかし謎の爆発によりその半分以上が死んでしまい、残ったプレイヤーでモンスターの大群と衝突することとなった。

数が半分に減った上に、突然の謎の爆発に動揺したプレイヤー達はモンスターの大量に次々とその数を減らしていき、そしてほぼ壊滅状態にまで追い込まれてしまう。

しかしそこからプレイヤー達の反撃が始まった。

謎の爆発によって死んだプレイヤーの復活、噂を聞いて遅れて到着したプレイヤー、フレンドやギルドメンバーからのヘルプで駆けつけたプレイヤーが一気に戦闘に加わったのだ。

数を増やしたプレイヤー達はモンスターを押し返し、モンスターとプレイヤーによる戦いはプレイヤーの勝利という形で幕を閉じたのだった。

というのが10分ほど前の出来事らしい。

らしいと言ったのは、実際に俺がそれを見たわけではないからだ。歩きながら聞こえてくるプレイヤー達の会話をまとめるとそんな事が起きたらしいということだ。

モンスターに勝ったプレイヤー達は勝利を喜び合った、そしてそこに噂を聞きつけてやって来たプレイヤー達も合わさって、オーベルビアはお祭り騒ぎになっていた。

まあモンスターの大量が町に攻めてくるなんてそうあることではないので当然といえば当然だろう。

そんな騒ぎの中、南門まで来た俺はキョロキョロと周りを見渡し目的の人物を探す。

待ち合わせをしているわけではないが、おそらくここにいるはず

だ。

そいつはすぐに見つかった、相手も俺を探しているのか周りをキョロキョロと見渡している。

モンスターとの戦闘が起きたのは西出入口だったのだが、南出入口にも結構なプレイヤーがいた。そのプレイヤー達を避けながらそいつに近づいていく。

すれ違うプレイヤー達から聞こえてくる話は、モンスターの大群との戦闘の話からなぜあんなことが起きたのか？ という話題に変わってきていた。

まあいくら考えてもその答えはでないだろう、理由を知っているのはたぶん俺を含めて2人だけだからだ。

その理由を知っている……というよりも元凶であるプレイヤーに話しかける。

「おゝい、クレア」

「あ！ ロダさ〜ん」

呼ばれてこちらに気づいたクレアは、手を振りながら小走りでこちらに向かってくる。

オーベルビアの西出入口でクレアを思いつきりぶん投げた俺は、その後すぐにモンスターに殺されサマルガルドで復活した。そしてオーベルビアに戻りクエストの報告場所であるここに向かったのだ。

投げた後すぐに死んでしまった為、クレアが町までたどり着けたのか分からなかったが、クレアがここにいるということはたぶん大丈夫だったのだろう。

ということはあと問題はクエストの報酬がいくら貰えたか、ということだ。

「クエストは無事完了できたのか？」

近くまで来たクレアにさっそく聞いてみる。

「はい、ロダさんのおかげで無事終わりましたよ」

よし、ここまでは大丈夫、問題はここからだ。少し緊張しながら

クレアに聞く。

「で、いくら貰えたんだ……？」

「えーと20万ゴールドですね」

20万と聞いて一瞬喜びかけたが、たしかクレアが欲しがっていた杖が20万だったな。そして報酬を俺と半分にするんだから40万はないといけないんだった。

このクエストは終わらせるのが速ければ速いほど高い報酬もらえるはずだ、ずっと全力疾走してきてかなり速くでクエストを完了できたと思っていたのだが……。

いや今考えてみるとクレアを町に投げ入れたのはいいが、魔法の反動でクレアはしばらく動けないんだった、それでクエストを終わらせるのが遅れたわけだ。

「あ！ でもちゃんと報酬は半分にしますよ！」

20万と聞いて俺が黙っていたのでクレアがあわてて言うてくる。

「でもお前の欲しがった杖たしか20万だったよな？」

「そうですね、でもいいんです。私一人じゃクエストを終わらせることは出来ませんでしたから」

そう言うってクレアが報酬の半分である10万ゴールドを俺に渡し  
てくる。

「ほんとにいいのか？」

「はい、ロダさんが半分もらうのは当然ですよ」

そうだ最初からそういう約束だったのだ、それに金を持っていか  
なければ小梅に何を言われるか分かったものじゃない。

「分かった、これはありがたいがたくもらおう。その杖を買わなくても1  
0万あれば補助スキルを買えるだろう、そっちを買ったらいいんじ  
ゃないか？」

「最初は私もそう思ってたんですけど、あの魔法覚えてる限り補助  
スキルは一切覚えられないって説明欄に書いてました……」

マジかよ！ ということはこの先他のオリジナルスキルを覚えな  
かった場合、あの魔法のみで戦って行かなければならないのだ。そ

れは確かに炎がでるとかいう杖が欲しくなるわけだ。

「そ、そうか……」

なんか空気が一気に重くなってしまった。

「じ、じゃあ俺用があるからこれで行くわ」

しばらく沈黙が流れるが、いつまでもこうしてるわけには行かない。

「え！ あ、はい……」

別れを告げそそくさと歩き出す。

小梅から借りたのは30万で今回のクエストで手に入れたのが10万だから、借金の3分の1を返すことが出来るわけだ。

これだけもっていけば小梅も文句あるまい。

とりあえずサマルガルドに行くためにワープポイントのある中央広場へと向かう。

しばらく歩いていたが、ふとついさつき別れたクレアのことを思い出す。

ほんと馬鹿なやつである。

クエストの報酬がいくらあったかなんてクエストを受けた本人しか分からない、俺には報酬は1ゴールドしかなかったとか嘘をついて20万丸々もらとけばよかったのだ。そうすれば欲しがっていた杖が買えたのに。

それだけじゃない、すぐに人を信じすぎだ。出会ってから数時間しか経っていないが、何回俺の適当な話に騙されただろうか。

ほんと馬鹿なやつである………。

チリーン

鈴の音を鳴らしながら昼行灯の扉を開ける。

「いらっしやい」

小梅の声を聞きながら薄暗い店の中を奥へ進んでいく。

「よお」

椅子に偉そうに座っている小梅に右手を軽く上げて挨拶をする。

「……………どちらさまで？」

「ちょ！ 数日見ないだけで忘れたの！？ てか昨日おまえ俺にメルしただろうが！」

椅子に座っている小梅に顔を近づけて叫ぶ。

「あー！ うっさい！ 冗談に決まってるだろうが」  
嫌そうな顔で小梅が言い放つ。

「こ、こいつは相変わらず……………」

「で？ ここにきたって事は少しは金が用意出来たってことだな？」

「お、おうよ。俺にかかれれば金なんてすぐよ」

「じゃよこせ、今すぐ全部よこせ」

小梅が目の前のカウンターを右手でドンドンと叩く、そこに置け  
ということだろう。

「ビビんなよ、俺の全財産見てビビんなよ」

「いいから早く出せ」

小梅が再び右手でカウンターを叩く。

「よ、よーし。出してやるよ」

俺は意を決して全財産をカウンターに叩きつけるように置いた。

どれくらいの間そうしていたらだろうか。

賑やかだったオーベルビアもだいぶ落ち着き、いつもの状態へと戻りつつあった。

ロダさんと別れた後、特に行く当てもなくふらふらとオーベルリアの町を歩き回っていた。

クエスト報酬である20万を半分にしたことは全然気にしてはいなかった、むしろロダさんに全部あげてもよかったぐらいだ。

ロダさんと一緒にPTを組んでとても楽しかった、途中からお金とか杖のことなんてどうでもよくなっていた。それにロダさんは私が役に立ったと言ってくれたのだ。

このクエストが終わったら、フレンド登録をしてまた一緒にPTを組んでくださいと言うつもりだった。

でも結局言うことはできなかった、オンラインゲームの出会いなんてそんなものなのかもしれないけど私が思っただけ以上にあっけなくPTは解散してしまった。

高いクエスト報酬があったからこそロダさんは私とPTを組んでくれたのだ、何も無いのに足手まといになる私ともうPTは組んでくれないんじゃないか、そう思ってしまったのだ。

だから何も言えず離れていくロダさんの背中をただ見つめることしか出来なかった。

後悔、そしてもうゲームなんて止めてしまおう、そんな事を考えながらふらふらとさ迷っていた。

「おーい！」

後ろからいきなり誰かに呼ばれてあわてて振り向く。

20歳後半ぐらいの大柄な男性プレイヤーで、鎧の上にエプロンという格好でこちらに向かって走ってきていた。

見覚えのある人だ、たしか私が前から欲しがっていた杖を売っている店の店主だ。

当てもなく歩いていたせいで気づかなかったが、よく見てみるとここはオーベルリアの北地区の店の前だった。

「ふー、やっと追いついた。あのクレアノーズさんですよね？」

男性プレイヤーは私の前まで来きてそう聞いてきた。

「は、はい。そうですけど……」

「あー、よかったよかった。なかなか来ないから心配したよ」

「あの……私に何か？」

そう聞くと男性プレイヤーは右手に持っていた物を私にわたして  
くる。

「はいこれ」

それは木で出来た杖だった、杖の先端に丸い赤色の宝石が付いて  
いる。

「こ、これ!」

私がつつと欲しかったそして今回のクエストの報酬で買うつもり  
だった杖……業火の杖だ。

「あ、あの! これは!？」

「少し前に黒髪の男プレイヤーが来てね、この杖が欲しいと言って  
10万ゴールドわたして来たんだ、あとの半分は後でクレアノーズ  
という赤髪の女プレイヤーが持つてくるからと、杖もそいつにわた  
してくれということだったんだけど……」

なんで? どうして?

「じゃ残りの10万ゴールドもらえるかな」

そう言つて男性プレイヤーが手を出してくる。

「は、はい!」

あわててさつき手に入れた10万ゴールドをわたす。

「まいどありー」

そう言つて男性プレイヤーはもと来た道を歩いていく。

黒髪のプレイヤーというのは間違いないくロダさんのことだろう。

でもなんで? 自分もお金が必要だと言つてたのに……。

「あ、そうそう」

数mはなれた所で男性プレイヤーが止まる。

「そういえば伝言があるんだつた、え〜とたしか……俺は基本的に  
サマルの雀の涙つて店にいるから、また一人で無理そうなくクエスト  
があつたら来い、気が向いたら手伝つてやる。だつたかな」

走つていた、その伝言が終わると同時に走り出していた。

今手に入れたばかりの杖を持って走る、向かう所はもちろん。

俺はカウンターに置いた全財産……500ゴールドを指さしながら言う。

「どーよ！ これだけあれば文句あるまい」

カウンターに置かれた金を見て小梅が頭を押さえ込む。

「どうした、頭でも痛いのか？ あんまり無理はするなよ」

「おまえのせいだよ！ おまえ以外の原因がまったく思いつかないわ！ てかよくこんだけの金しか持ってないのにここにこれたな！？」

「いや、ちがうんだって！ ついさつきまで10万持ってたんだって！」

「じゃ出せ」

小梅がカウンターをさつきよりも強く叩く。

「そ、それがさ……。ここに来る途中、病気で苦しんでる母を助ける為にどうしても10万ゴールド必要という少女がいたんだよ」

「死ね」

俺の渾身の言い訳を一言でバツサリと切り捨てやがった。

「明日まで待ってやる、だから明日までにせめて万単位で持って来い、さもなければ死ね」

「はい！ 必ずや明日までに……」

小梅がすぐ近くにあった棒状のものを右手で掴み、俺に向かって投げつける。

「しゃべる暇があったらさっさと行け！」

「すみませんしたー！」

あわてて店を飛び出して外に出る。

「ふう、やっぱりこうなったか」

まあ自業自得だし、500ゴールドしかない時点で予想は出来ていたが。

「しょうがない、取りあえずモンスターでも倒して金を稼ぐか」

そう言って町の出入口に向かって歩き出す。

しかし途中で足が止まる。

「やっぱりアイスコーヒー飲まないとやる気でないな」

方向転換して雀の涙へと向かって歩き出す。

それにしても俺の借金生活はいつまで続くのだろうか……。

### レベル13 金の切れ目が縁の切れ目？（後書き）

第2章終わったー！ー！ー！

なんとか第2章を書ききることが出来ました。

しかし油断すると更新してから2週間とかすぐ経ってしまうので危ないですね。

ちょっとだけ第2章を振り返ってみると、あの金髪野郎は結局なんだったのだろうかということしか思いつきません。名前も決めていませんが気が向いたらまた登場させようかと思えます。

次からは第三章突入！ という予定でしたが、その前に番外編的なものを1話読みきりで間に挟もうかなと考えております。

まあ考えるだけで本当に入れるかはわかりませんが、なんにしろできるだけ早く更新できるようがんばりたいと思います。

ではまた次回に。

俺はRPGでミニゲームやらカジノがあつたら本編そっちのけでのめりこんで  
これは番外編的な話です。

読まなくてもあまり本編には関係ありません。

俺はRPGでミニゲームやらカジノがあったら本編そっちのけでのめりこんで

俺は今自分の運命をかけて戦っていた。

もしこれで負ければ……いや負けた時の事を考えてはだめだ。もう後には戻れない、だったら己を信じて勝つことのみを考えるべきだろう。

俺ができることは全てやった、あとはただ目の前の運命を引き抜くことしかできない。

大丈夫、できる、俺ならできる、己を信じろ！

心の中で念じながらゆっくりと手を伸ばしていく。

そして全身全霊を込め、運命を一気に引き抜く。

「くそー！」

叫びながら今引いた運命……トランプのダイヤの5と元々持っていた4枚のトランプをテーブルに叩き付ける。

「くそ！ なんなんだよ！ なんでこんなについてないんだよ！」

悪態を付きながらしがしと頭をかきむしる。

俺がテーブルに投げ散らかしたトランプを白黒の服を着たNPCの兄ちゃんが片付けていく。

「もう1度やりますか？」

「やるわけねえだろ！」

さわやかな笑顔で聞いてきたNPCの兄ちゃんに八つ当たりをかし、早足でその場を後にする。

ちなみに俺が今何をやってたかというと、トランプゲームの1つであるポーカーだ。

はるか北の果てにコロアネ島という名の小島がある。

そのコロアネ島にはモンスターが出るわけでも街があるわけでもない、ただ豪華な建物が1つ建っているだけだ。その建物では毎夜ギャンブラー達による熱い戦いが繰り広げられていた、まあ要するにカジノである。

コロアネ島に行く方法は一つしかない、各町からのワープだ。各町に設置されているワープから夜の間のみ行くことができる。夜の間という事以外は特に制限はなく、基本的には誰でも行くことができる。

カジノの中は豪華でかなりの広さになっている、全部見たわけじゃないが俺が見た範囲でどんなゲームがあるのかを説明しよう。

まずは1階だ、1階ではトランプゲームであるバカラ、ブラックジャック、レッドドック、ポーカー。ダイスゲームであるクラップス、丁半、チンチロリン、あとは花札、マージャンなんかもあった気がする。

2階ではルーレット、スロットマシン、ツアアップ、ビンゴなどがある。

あとは地下だ、地下には闘技場がありモンスターもしくはプレイヤー同士が戦い、どちらが勝つのかを当てるといいうゲームが行われている。

とまあ俺が見たところではこんな感じだろう、賭け金についてはゲームによってさまざまなので説明はしないでおこう。

カジノの1階の端には休憩所が設置されており、その横にはバーや飲食店などもある。

ポーカーをやめた俺は、休憩所で1人椅子に座りカジノの豪華な床を見つめていた。

「ま、まずい、これはまずいぞ、非常にまずい」

特に暑いわけでもないのだが全身からダラダラと汗が流れ落ちていく、たぶん今鏡を見れば青ざめた自分の顔を見ることができただろう。

「なぜだ、なぜこうなった？」

自分自身に問いかけ、なぜこうなったのかを思い返してみる。

小梅への借金を返そうと、鬼のようにモンスターを狩りつづけクエストを幾つもこなした、そしてついに4万ゴールドほど貯めたのだ。これだけあればとりあえず小梅も納得してくれるだろうと思いつい昼行灯に向かっていた、しかしふとこのカジノの事を思い出したのだ。カジノは前に一度来たことがあったのだがその時は金がなかったのになにもせず帰った、ちょうど夜だったこともあり少しだけのつもりで来てみたのだ。

最初は少ない賭け金で勝負していたのだが、ブラックジャック、ルーレット、丁半などなにをやってもすべて負け続けた。負けるたびに熱くなって行き、負けた分を取り返そうと自然と賭け金が上がっていったわけだ。

そして先ほどのポーカーで負けたことにより4万あった所持金が……まあそれは言わなくても分るだろう。

「ど、ど、どうするよ、俺どうするよ」

今からまた狩りに出かけて金を稼ぐか？ いや無理だ、もうあまり時間がない、今から行ってもたいして稼げないだろう。

こうなったら小梅が納得できる言い訳を考えるしかない、金を借りてからまだ1度も返していない、さすがにそれはまず過ぎる。

このままでは小梅に何をされるかわからない、もしかしたら本当にゲームができなくなるかも……。

「しけた面してるじゃねえか」

小梅への言い訳を考えていると、後ろから誰かに声をかけられる。声のする方を向くとサングラスを掛けた男プレイヤーが立っていた。

身長は180cmぐらいだろうか、黒のスーツに黒の皮靴を履き黒い髪をオールバックにしていた、街で見たらすごい格好だがカジノで見るとなかなか様になっている。

「なんか用か？ 俺はいま激しく忙しいんだが」  
「めんどくさそうに言って視線を男から床に戻す。」

俺は言い訳を考えないといけないのだ、誰かの相手をしている暇はない。

「そう言うなって、あんたにとって悪くない話があるんだが」  
「そう言う男は俺の横の椅子に勝手に座る。」

「ギャンブルで負けたんだろ？ ちなみに何で分るかと言うと、ここで暗い顔してるやつはたいていみんなそうだからだ」

「ああ、そうだよ。だから今誰とも話す気分じゃないんだよ」  
「そう言うって睨みつけるように男を見る。」

「まあ聞けって、ちょうどあんたみたいなのを探してたんだ」  
「そう言う男は俺に見せつけるように右手をパーにする、そしてその右手をグーにしてすぐにまたパーに戻す。」

すると最初は何もなかった男の手のひらに黒と白で出来たサイコロが乗っていた。

「……それは？」

「俺のオリジナルスキル“ギャンブルダイス”だ」  
「つまりこいつのオリジナルスキルによって作られたサイコロということか。」

「このスキルの説明の前に1つ聞いておきたいんだが、あんたステータスに運つていうのがあるのを知っているか？」

「運？ ステータスに運なんて項目はないだろ」  
「ゲームによっては運もしくはラックなどといったステータスが存

在したりするが、このオリジナルオンラインにはメニューのステータス画面を開いても運なんて項目は存在しない。

「ああ、ステータス画面には乗っていない、つまり運ってのは隠しステータスなんだ」

隠しステータスというのは、ステータス画面などには乗っておらず自分で確認することはできないが、実際は存在するステータスのことだ。

「運はプレイヤーごとに上限と下限が決まっていて、1日ごととその間の数値内でランダムで決まっている。ちなみに運はレベルが上がっても数値は上昇しない、つまりキャラクターを作った時点でそのプレイヤーの運はほぼ決まっていると言ってもいい」

要するに俺の運の下限が1、上限が100だとしたら毎日1〜100の間でランダムで数値が決まるということだ、たとえば昨日が30、今日が50、明日が80みたいな感じだろう。

「運ね、でもなんで隠す必要があるんだよ」

「それは俺にも分からん、だが運というステータスがあるのは間違いない」

最初は話なんてあまり聞くんもりはなかったのだが、思った以上に興味深い話だ。こうなると俺に取って悪くない話というのが気になってくる。

「ここまでいいいな？ で、今度はオリジナルスキルの“ギャンブルダイス”についてだ。まずこの白いサイコロ、これは振ったプレイヤーの運の数値を決める能力がある、出た目が1ならそのプレイヤーの運の最下限になる、2なら2割、3なら4割、4なら6割、5なら8割、6なら最上限になるんだ」

運が1〜100の間だとしたら、1が出れば運の数値は1、2なら20、3なら40……6なら100ということだ。

「次はこの黒いサイコロ、これは振ったプレイヤーの運を増やすもしくは減らす能力がある。出た目が1ならその日の運の20%、2なら50%、3なら80%、4なら120%、5なら150%、6

なら200%になるわけだ」

そろそろ説明がめんどくさくなってきたな……。

えーと、その日の運の数値が100だとしたら、1なら20、2なら50、3なら80、4なら120、5なら150、6なら200になるということだ。

ここまで説明すると大体分かってくる、要するにこのサイコロを俺に使わせたいわけだ。

「まあ大体分かった、でもそれならそのスキル自分で使えばいいんじゃないのか？」

「できれば俺もそうしたいんだがこのスキルは自分では使用できないんだ、しかも1日の使用制限が3回、そして同じプレイヤーは1日に1回しか使えない」

そういうことか……。

俺にこのサイコロを振らせていい目が出れば俺にギャンブルで稼がせる、悪い目が出ればそこでさよならするわけだ。

「なるほどなるほど、それは確かに俺にとって悪くない話だ」  
自然と顔がにやけてくる。

俺にとつてもいい目が出ればもうけもの、仮に悪い目が出たとしてもすでにギャンブルで負けているのでこれ以上やることはない。

「で？ 報酬の分け方は？」

俺が男にそう聞くと、男も悪そうな顔でにやっと笑う。

「理解が早くて助かるな、5:5でどうだ？」

「よし、その話乗った！」

俺は立ち上がり男に右手を差し出して握手を求める。

「俺は口ダだ」

男も立ち上がり俺の手を強く握りしめる。

「俺はジエスターだ、よろしく」

男2人が不適な笑みを浮かべながら握手しているという状況は、はたから見るとどうなんだろうか。

「まああんとと組むかどうかはこのサイコロを振ってからだかな」

そう言ってジェスターが白黒のサイコロを俺に渡しに来る。

「分かってるさ」

サイコロを受け取とり、目を閉じて心の中で、来い！ と強く念じる。

そして握り締めたサイコロを軽く空中に放り投げる。

投げられたサイコロはすぐに落下し、床で2、3度跳ねて止まる。ちよつと力が入りすぎたせいか、サイコロは5mほど離れた所まで転がってしまった。

出た目を確認しようと急いで近くに駆け寄る、出た目は……。

「ろ、6のゾロ目！」

目を確認したジェスターが驚いたような声を上げる。

出た目は6と6、6のゾロ目である、つまりこのスキルにおいて最も良い目が出たということになる。

「おつしゃー！！」

きたきたきたきたー！ ふっふっふっ、今までの負けはこれの為の伏線だったのだ。

「まさか6のゾロ目が出るとはな……。なかなか出るもんじゃないぞ」

ジェスターが床に投げられたサイコロを回収する。

「もう運の数值は変わったのか？」

「ああ、サイコロが止まった時点でスキルの効果は発動される」

ということは俺の運の数值はかなり上昇しているはずだ、これで今日の負けを……。いやそれだけじゃない、小梅への借金を全部返してお釣りが出るほど勝つことができる。

「そうか、ならさっそく行きますか」

「ああ」

俺とジェスターは再び戦場へと向かって歩き出した。

「赤の12」

そう宣言して赤色の12と書かれたマスの上にチップを置く。  
ゲーム参加している他のプレイヤーも思い思いの数字または色に  
チップを賭けていく。

そしてディーラー（NPC）がホイールを回転させ、そこにホイ  
ールと反対方向に回るようにボールを投げ入れる。

ここでベットの追加もしくは変更を行うことができるのだが、俺  
は特になにもしない。

投げ入れられたボールが徐々に勢いを無くしていく、そしてゆっ  
くりと転がるボールの入った先は。

「赤の12です」

ボールがポケットに落ちた場所をディーラーが宣言する。

その宣言を聞いて参加していたプレイヤー達がざわつきだす。

ディーラーが外れたチップを回収し、的中したベットに対して配  
当を行っていく。

「くっくっくっ……、あーはっはっはっはっはっはっ！」

俺の前には大量のチップが置かれていた。

このルーレットを始めてすでに3連勝していた。

ルーレットのホイール（回転盤）のポケットには赤か黒の色がつ  
いており、0〜36までの37区分されている。そのホイールにポ  
ールを入れ、数字または色を当てるといふゲームだ。数字を当てる  
のはかなり難しい、37区分されているので確率は37分の1とい  
うことになる、色当てはほぼ2分の1と言っていいだろう。もちろ  
ん数字を当てるのは難しい分配当はかなり大きい。

その数字当てを俺は3連続で当てたのだ、これはもう笑が止まら  
ない。

「おいおい、笑いすぎだろ」

後ろから見ていたジェスターが俺の肩を揺さぶりながら言うてく

る。

「そういうおまえも顔がにやけてるじゃねえか」

振り向いた先のジエスターの顔はこれ以上ないほどにやけていた。

「だっておまえ、これが笑わずにいられるか？」

「いられるわけないだら！」

そう言っつて二人で肩を組んで笑い合う。

最初は“ギャンブルダイス”の効力をあまり信じられず、確率が2分の1であるダイスゲームの丁半をやることにした。そこでまさかの全勝、調子に乗った俺達はチンチロリン、ブラックジャック、カバラ、ビンゴと勝ち続けた。ちまちまと増えていくのがめんどくさくなり、配当が大きいが高確率が低いルーレットにやって来たというわけだ。

「さて、バーで一杯やらないか？」

「いいね〜」

ひとしきり笑った後、ジエスターの提案でバーに行くことにした。バーに入ると特に他の客はおらず、俺とジエスターの貸し切り状態となった。

「ドンペリだ、ドンペリ持ってこい！」

カウンターに座りさっそく注文する。

注文を受けたマスター（NPC）が俺とジエスターの前に酒が入ったグラスを置く。

「まずは乾杯といきますか」

ジエスターがグラスを持って俺に向けてくる。

「おう」

俺もグラスを持ちジエスターのグラスに軽く当てる。

「乾杯」

乾杯後に注がれた酒を一気に飲み干す。

「ぷっは〜！ うまい！」

空になったグラスをマスターに渡しておかわりをもらっつ。

「いや〜それにしても、勝ちましたな〜」

「ああ、もうこれだけ勝てば十分だな」

ジエスターの思わぬ発言に俺が言い返す。

「何言ってるんだよ、まだこれからだろ」

「いやここらが潮時だろ、いくら運の数値が増えたとはいえ100%勝てるわけじゃないんだぞ」

「分ってるって、最後にあと1回するだけさ」

「1回？ 何をやる気だ？」

「100万ポーカーだよ」

飲んでいた酒をジエスターが思わず吹き出す。

「ひゃ、100万ポーカーだと！」

ポーカーには2種類ある、プレイヤー同士が勝負するポーカーと、ランプでポーカーの役を作るというゲームだ。俺が最初にやっていたのは後者の方だ。

100万ポーカーというのは、プレイヤー同士が勝負する方のポーカーで特に変わったルールがあるわけではない。ただ賭け金が100万なのだ、つまり勝った方が負けた方の100万を貰うことができる。ちなみに普通のポーカーの最高賭け金は10万だ。

「もし負けたらどうするんだ！ というよりも俺とお前の所持金を合わせても100万にならないだろ！」

「それは大丈夫だ、100万まではあとちょっと足りないだけだろ、俺とお前の所持品と装備を担保にして金を借りればたぶん足りる」

カジノに入っただけの受付で所持品と装備を担保にして金を借りることができるのだ。

「だが負けたらすっからかんになるんだぞ！」

「はは、今の俺が負けると思うか？ これに勝てば分け前が一人100万になるんだぞ」

分け前は半分という約束だ、これに勝てば勝ち分がほぼ200万になる、つまり分け前が一人100万ということになる。

「100万か……か、勝てるか？」

「勝てるに決まってるだろうが」

「じゃあ……やるか！」

「おっしゃ！ さっそくエントリーしに行こうぜ」

グラスに残っていた酒を一気に飲み干しバーを出る。

まずはカジノの入口にある受付で装備と所持品を渡して金を借りる。

「なんとか100万に足りたな」

裸（装備なし）のジェスターにそう言うと、ジェスターは軽く泣きそうな顔になっていた。

「俺の一張羅が」

「あとで取り返すから大丈夫だって」

金が用意出来たので100万ポーカーの会場へと向かう。

裸の二人組というのはなかなか目立つようで、他プレイヤーの視線をちらちらと感ずる。

100万ポーカーはあまりやるプレイヤーがいない為、あらかじめエントリーしておいて他のプレイヤーがエントリーしたら呼び出され、勝負するというシステムになっている。ちなみにカジノを出ると自動的にエントリーが取り消される。

「エントリーしたいんだけど」

100万ポーカーの受付（NPC）にエントリーを申し込む。

「かしこまりました、すでにエントリーしているプレイヤーがいるので少しお待ち下さい」

そう言っって何事かし始める、おそらくエントリーしたプレイヤーを呼び出しているのだろう。

「すでに他のプレイヤーがエントリーしてたのはラッキーだったな」

「ああ、なんていったって今日の俺はめっちゃくちゃ付いてるからなしばらくすると受付のNPCに呼ばれる。

「お待たせしました、こちらへ」

ついで行くと、横が2m、縦が1.5mほどの大きさのテーブルに案内される。そのテーブルには向かい合うように椅子が2つ置かれていた。

その片方の椅子に座り、しばらくすると1人の大柄な男性プレイヤーが現れた。

ガチャガチャと音をたてながら現れたそのプレイヤーは、全身を覆うものすごく重そうな鎧を着込み、背中に俺の身長ほどはありそうな巨大な剣を背負っていた。

裸の俺が言うのもなんだが、カジノにはあまり似合わない格好だ。まあそこ数分しか関わることのないプレイヤーなのであまり興味なんてないが。

「よろしく頼む」

そう言って相手プレイヤーは俺の向かいの椅子に座る。

「よろしく」

俺も一応挨拶をしておく。

2人とも席に着いたのを確認し、受付のNPCがどこからかトランプを取り出す。

どうやらこのNPCの進行でゲームをやるらしい。

「それではただいまより、100万ポーカーを開始いたします」

そう言ってNPCが慣れた手つきでトランプを切り始める。

そしてトランプを相手プレイヤー、俺という順で1枚ずつ配り始める。

リゴーン リゴーン リゴーン リゴーン

お互いに4枚ずつカードが配られた時、突然鐘が鳴るような音が周囲に響き渡る。

何事かと周囲を見渡してみると、壁に掛けられた時計に目が止まる。どうやら今は午前12時を知らせる音だったようだ、まあ要するに日付が変わったということだ。

「お、おい」

隣に立っているジエスターに呼ばれ、さらに激しく肩を揺さぶらる。

「なんだよ、そんなに肩を揺さぶる……」

横を向くとジェスターの顔が青ざめ、尋常ではない汗が顔から流れ落ちていた。

「ど、どうしたんだよ」

「す、すまん。あまりに勝ちすぎるもんだから時間を見てなかった」「どういう意味だよ？」

「だ、だから、つまりだな……“ギャンブルダイス”の効果は午前12時、日付が変わると同時にリセットされるんだ」

「は！？ おまえそれマジか！？」

ジェスターの胸ぐら掴んで立ち上がる。

「あ、ああ」

あきらめたように力なく頷くジェスターの顔を見る限りどうやら本当のことらしい。

「どうかしたのか？」

急に立ち上がった俺に相手プレイヤーが聞いてくる。

「い、いや別に。な、なんでもないから全然なんでもないから」椅子に座り直し、ジェスターに顔を近づけてひそひそと話す。

「どどどどどど、どうすんだよ！ おまえこれどうすんだよ！」

「すまん！ 本当にすまん！」

「すまんじゃねえ！ これに負けたら完全な文無しになるんだぞ！」

「ま、まて！ とりあえず手札を確認してみよう」

そう言われて初めて手札を見ていないことに気づく。

あわてて配られた5枚のカードを確認する。

「っ！」

手札を確認すると思わず息を飲んでしまう。

手札は、スピードの10、スピードのJ、スピードのQ、スピードのK、ハートの2、ロイヤルストレートフラッシュのなりかけだったのだ。

（おしいiiiiiiii！！）

（最後の1枚は12時がなってから配られたんだ）

(じゃあもし12時になっていなかったら、ロイヤルストレートフラッシュが来てたつてののか!?)

(おそろく……)

(うおおおおお!!)

目の前のテーブルにガンガンと自分の頭を叩きつける。

あと数秒配るのが早ければほぼ確実に勝利していたのだ。

「お、おい、速くしてくれないか?」

俺のテーブルに頭を打ち付けるといっわけの分からない行動に、ちよつと引きながら相手プレイヤーが言ってくる。

「あ、あの。す、すいませんけど用事思い出したので中止してもらえませんか?」

俺にできる最高の笑顔で言ってみるが、NPCが冷静に言い返す。「手札を確認した時点で中止することはできません」

しまったー!! 何も考えずに手札を見てしまったー!!

(終わりだ、もう終わりだ)

(まて、まだ手はある)

そう言っつてジエスターが持っていたものを俺に渡す。

(こ、これは!?)

それは白と黒で出来たサイコロ、そう“ギャンブルダイス”だ。

(午前12時に“ギャンブルダイス”の効果は切れると同時に、おまえはもう1回このサイコロを振ることができる)

“ギャンブルダイス”は1日に1人に対して1回しか使用できない、だが日付が変わると同時にもう1回振ることができる。

(そうか! それで高い目が出れば勝てる!)

(そういうことだ!)

俺は座ったままの状態、相手にばれないよう手に持ってたサイコロを床に落とす。

床に落ちたサイコロが2度ほど跳ねて動きを止める、出た目は…

「」……………「」

出た目を見て、俺もジェスターも思わず目を反らす。

(なあ、これ逆に良いみたいなのはない……のか?)

(ないな……)

出た目はピンゾロ、つまり1と1、このスキルにおける最悪の目だ。

「お客様、カードの変更を行いますか?」

NPCが俺と相手プレイヤーに質問する。

ポーカーは1度だけ手札からいらぬカードを捨て、捨てた枚数だけ新たに引くことができる。

(まだだ、まだわからんぞ、俺の手札が悪くても相手も役なしなら負けはない。1回目をドロウで終わらして、2回目を始める前に中止してもらえばいいんだ)

(なるほどその手があったか!)

いくらかこっちの運の数値が下がろうが相手の運が上昇しているわけではないのだ、だったら相手に役がこない事も十分にありえる。

「俺はこのままでいい、カードの変更はなしだ」

思いもよらない相手プレイヤーの発言に、思わず自分の耳を疑う。

「は? なんか今カードの交換はしないって聞こえたような気がしたんだけど? いやいやそれはない、それはないな」

「いやだからそう言ったんだが……」

ポーカーでカードを交換しないということは、最初に配られた手札でストレート以上の役ができているということになる。

(負けだ、完全に負けだ。だからここらが潮時だって言ったのに) ジェスターが弱々しく呟く。

(何言ってるんだ! 元はと言えばおまえが時間のことを忘れてたのが悪いんだろうが!)

(なに! おまえこそな、6のゾロ目のあとにピンゾロって極端すぎるんだよ!)

(うるせえよ! 俺だって出したくて出したわけじゃねえよ!)

「時間を掛け過ぎると危険とみなしますよ」

NPCが俺に向かって言い放つ。

「くっ！ 1枚交換だ！」

手札のハートの2を場に捨てる。

NPCが捨てた枚数分、1枚を新たに俺のテーブルの上に裏にして配る。

裏にして置かれたトランプにゆっくりと手を伸ばす。トランプを掴み表にしようとするが、右手がうまく動かない。

自分では気づかなかつたが右手が震えていた。

怖いのだ、このカードをめくるのが怖い、このゲームに負けるのが怖い、もしこのゲームで負ければ俺は……。

その時、急に俺の右肩に誰かがやさしく手を乗せる。

「ジエスター」

ジエスターは俺の肩に手を置いたままやさしく微笑む。

「落ち着けよ、大丈夫だって」

「だが、今の俺は運が……」

「運がなんだって言うんだ、俺とお前なら運があるうがなかるうが勝てるさ、そうだろ？」

そこにはさつきまでの今にも死ぬんではなかるうかというほどの青い顔ではなく、自信に満ち溢れた顔があつた。

「ああ、そうだな……。俺達が負けるわけないな」

俺とジエスターは微笑み合う。

もう怖くはなかつた、俺が、いや俺達が負けるはずないのだから！

震えの治まった右手で、裏になっているトランプを掴み一気に表にする。

俺とジエスターの運命のカード、それは。

大量に置かれた写真の束を1枚1枚めくっていく。

ここは 新聞社のギルドのホームの中だ。

今はメンバーが撮ってきた記事用の写真を1枚1枚チャックして  
いるところだった。

特に問題もなくスムーズに進んでいたのだが、1枚の写真で手が  
止まる。

「エリコ君、この写真は何かね？」

自分の机で何かをやっていたエリコ君が立ち上がってこちらに歩  
いてくる。

「どれですか編集長？」

私の机の前にまで来たエリコ君に見えるように写真をかざす。

「ああ、それはですね、私が昨日カジノ行った時に撮ったやつです  
よ、なにかの記事になるかと思って」

その写真には2人のプレイヤーが写っていた。

2人用のソファーに2人で座り、1人はまるで魂が抜けたかのよ  
うな顔で天井を見つめている。もう1人は焦点の合っていない目で  
真正面を見つめ写真にもかかわらず震えているのがはつきりと分か  
る、これから何かとんでもないことが待ち受けているのだろうか。  
そして2人ともなぜか裸である。

「この2人、カジノで所持金から装備まで全部負けちゃったみたい  
でなんですよ」

「エリコ君、君はたしか昨日の夜は取材に行くと言ってたかったか  
？ なんでカジノにいたんだ？」

そう言うとエリコ君の動きが止まる。

「え！？ そ、そうでしたっけ？ あ！ そういえば私これから取  
材に行くんですした！」

そう言ってエリコ君はものすごいスピードでホームを出て行った。  
「ふゝ、まったくしょうがないな」

さっきの写真を横に置き、再び写真のチェックを開始する。

「特に使えそうなのはないか」

メンバーには初心者狩りの正体を暴いたプレイヤーが、大量のモンスターがオーベルビアを襲った原因の2つを探して来いと言っておいたのだが、どうやらそれらしいものはなかったようだ。

まあ元々そう簡単に真相が分るとは思っていない。

ふと、さつき横に置いた写真を手に取る。

「……………だめだなこの写真」

立ち上がり、見ていた写真を丸めてゴミ箱へ投げ入れる。

「さて私も取材に行くか」

今日こそは、せめて2つの内のどちらかを突き止めてみせる、そう意気込んで外へと飛び出した。

俺はRPGでミニゲームやらカジノがあったら本編そっちのけでのめりこんで  
ども〜

まあ出来はともあれ、短編を書いてみました。おそらく次からは第  
3章が始まります。

これから進むにつれて章と章の間に短編を挟んでいこうかなーと考  
えております。

ではまた次回。

## レベル14 始動

「ただいまー」

特に誰に向かってというわけじゃない、ただいつもの癖でそう言っ  
つて、ギルドホームの扉を開く。

私が所属しているギルド“生徒会”は、このゲーム、オリジナル  
オンラインでは結構有名なギルドの一つだ。

ギルドの所属人数は私を入れてたったの4人、4人全員が高レベ  
ルプレイヤーの少数精鋭ギルドなのだ。

少数精鋭なんて言うてはいるけど別に狙ってそうしたわけじゃな  
い、元々“生徒会”は会長であるギルドマスターが1人で立ち上げ  
たギルドで、他の3人は会長に誘われて集まったメンバー達だ。そ  
の後は会長がメンバーを集めることはなく、私を含めた3人も特に  
メンバーが欲しいわけでもなかったので4人のままだけなのだ。

まあ、私は今とあるプレイヤーを“生徒会”に入れたいと思って  
いるのだが、なかなかいい返事がもらえない状態だ。

「やあ、おかえり」

縦と横が7、8mほどの四角い部屋の真ん中に、4、5人は座れ  
そうな大きめなテーブルが置かれている。

ギルドホームは街によって様々な形や大きさがある、もちろん大  
きくて広い物件などはそれ相応の値段がする。

“生徒会”のホームは1階に3部屋、2階に2部屋ある。小さく  
はないだろうけど、けて大きくもないといった感じだ、でも私は  
このホームを結構気に入っている。

真ん中に置かれたテーブルに座って、私を出迎えてくれたのは“  
生徒会”のメンバーの一人アリス。

腰まで伸びた白髪の美しい髪、白い肌にほっそりとした体つき、  
惹きこまれてしまいそうなほど美しい目、見るたびに思う、なんて

華奢で美しいのだろうと。

ただ一つ残念なことがある、それは……。

「アリス君、会長達は？」

そう、彼は男キヤラなのだ。

美しい見た目に“生徒会”の正装である黒いズボンに白のシャツ、学生服が悲しいほどに似合っていない。女物の服を着ていれば男だと分かる人はいないのではないだろうか。

最初に男だと分かったときはショックを受けたものだ。

「会長達なら、また新しい情報が手に入ったとかで調査に行ったよ。アリス君がテーブルに置かれた数枚の紙の内の一枚を手にとって私に渡してくる。」

「はい、これ茜ちゃんの分ね」

「え！？ また私の分もあるの!？」

渡される紙を嫌そうに受け取る。

「どうせまたガセ情報なんじゃないの？」

「たぶんそうだろうね。でも分ってるでしょ？ たいした情報が手に入らないんだから、しらみつぶしに探すしかないんだよ」

「まあそれはそうなんだけどさ。こう外ればかりだと嫌になっちゃうわよ」

まあでもやらないと言うわけにも行かないので、渡された紙の内容を確認する。

「この場所ってたしか……」

「そこがどうかしたの？」

「ここってたしかオーベルビアからそう遠くない所だったわよね？」

「うん、まあそうだけど……」

どうせガセ情報だろうし、この場所ならあいつを連れて行くってのもなかなか面白いかもしれない。

「どうかしたの？ なんか顔がにやけてるけど」

「ううん、なんでもない。ただちよっとやる気が出てきただけ」

そう言っつてホームの出口に向かって歩きはじめる。

「じゃ私ちよつと行つてくるわね」

「う、うん。行つてらっしゃい」

ホームの扉を開け、外へと出る。

さてと、まず最初に向かう所はあいつが居るであろうそこだ…

…。

「オーベルビアの乱 戦火の記録！」

そう書かれた 新聞を広げ、ゆつくりと読みはじめる。

内容は数日前にオーベルビアで起きたモンスターとプレイヤーの戦いに、何人参加しただの、何匹のモンスターがいただの、何人死んだだのといった、なんでそんなことわかるんだよと言いたくなるような事だ。

ちなみにオーベルビアの乱と言うのは、3日ほど前に 新聞社がああ戦いに名前を付けようと言い出し、プレイヤー達にアンケートを取つて決まつた名前だ。候補としてはオーベルビアの戦い、オーベルビア戦線、オーベルビアの乱、マラトヤの悲劇、聖戦、あと第一次世界大戦なんてのもあつた。

オーベルビアの乱から5、6日経っているが、原因はまだ判明していない。

今プレイヤーの間では、運営による隠しイベント派とバグ派で激しい口論が行われている。

俺は一応バグ派だ。いやまあ本当の原因を知つてはいるのだが、色々めんどくさいのでバグ派ということにしている。

ちなみにその原因はというと、今俺の向いでアイスコーヒーをすすっている……。

「どうかしたんですか？」

俺が新聞の横から見ていると、クレアが不思議そうな顔で聞いてくる。

「いや別に……」

アイスコーヒーをすするクレアの手には、先端に赤色の宝石が付いた杖がしっかりと握られている。

ここ数日なぜか、クレアに付きまとわれ……クレアとPTを組んで狩りを行っていた。

ま、まあ別にいいけどさ……。

「ロダさん」

読んでいた新聞を畳み、俺もアイスコーヒーに手を伸ばす。

「なんだよ」

「この店に来るたびに思ってたんですけど、だれか待ってるんですか？」

1度アイスコースをすすり聞き返す。

「は？ 何言ってるの？」

「だってロダさん、ここに来るたびに誰かが来るのを待ってるみたいに周りをキョロキョロ見渡すじゃないですか」

俺が周りを見渡す？ そんなことをした覚えはないのだが、自分では気付かなかったのだろうか？

ここに来るやつなんて一人しかいない、まさか俺があいつが来るのを待っているとも言えるのだろうか。い、いや、そんなことあるはずがない。

「な、なに言っちゃってるの？ 誰も待ってるわけじゃないの」

「そうですか」

素気なくそう言うと、再びアイスコーヒーをすすり始める。

な、なんだこいつは、最初会った時よりも態度がでかくなってきている気がする。ここはガツンと一発言っちゃろう、うん、そうし

よう。

「おいクレ……」

「やつほ〜!!」

俺のガツンとした一発が、突然横から飛んできた言葉にかき消される。

「……………」

「あんた相変わらず暇そうね〜」

いつのまにか俺の横に茜が立っていた。

ないない、俺がこんなやつを待ってたなんてありえない。

茜が俺から自分がいつも座っている椅子の方へ視線を向ける。

「ところで……こちらの人は？」

茜がそう言うのとクレアが立ち上がる。

「わ、私クレアノーズといます。少し前からロダさんとPTを組んでもらってます!」

「あ、そうなんだ。私は茜、ギルドは“生徒会”よ。よろしくねクレアちゃん」

挨拶を終わらすと、茜は横のテーブルから椅子を持って来てこちらのテーブルに勝手に座る。

このテーブルは2人用だから3人はちよつと狭いんだが……。

「ふ〜ん、へ〜、あんたが誰かとPT組むとはね〜」

「ちよやめて! なにその目、ほんとやめて」

持っていた新聞を俺と茜間に入れ、茜の視線を遮る。

「あの、ロダさんと茜さんはどういう……………」

「そうね〜、こいつがまだこのゲームを始めたばかりの頃、ここで会ったのが初めてだったわね。それからこいつが私のギルドにどうしても入りたいと言ってきてね、断ったんだけど諦めが悪くてそれからずーと付きまとわれてるのよ」

茜がやれやれと言わんばかりに首を左右に振る。

「そうだったんですか」

「おいこら! なに嘘教えてんの!?! こいつすぐ信じちゃうから、

なんでもかんでも信じちゃうから！」

「まあいいじゃないの、それより今日はお願いがあってきたのよ」  
全然まあ良くないんだがな……。

「なんだよ、先に言っとくがギルドには入らないぞ」

「まあそれはおいおいでいいんだけど、ちよつと一緒に行ってほしい所があるのよ、オーベルビアからそんなに遠くないところなんだけど」

「よし、わかった。断る！」

「まったく迷うことなく断るわね……。いいじゃないどうせあんた暇でしょ」

「暇じゃないよ！ 全然暇じゃないよ！ 俺は今からアイスコーヒを2時間かけて飲むという大事な使命があるんだよ！」

「そう暇なのね、じゃOKということで。クレアちゃんも一緒に行きましょう」

「いやいやいや、聞いてた？ 俺の話聞いてた!？」

「分ったわよ、じゃあ今日このアイスコーヒは私が奢ってあげるから」

「ま、まじで!？ ……つてよく考えたら2つで2ゴールドじゃねえか！」

日頃から金がないせいか、奢るとい言葉に思わず食いついてしまった。

「大丈夫ですよ茜さん、なんだかんだ言ってもやってくれるのが口ダさんですから」

「ちよつとなに言ってるの!？ クレアいきなりなに言っちゃてるの!？」

「ふふ、分ってるわよ」

なぜか二人して笑っている。

「分かってねー！ おまえら全然分かってねえよ!！」

この後、結局行くことになってしまったのは俺の意思が弱いからであろうか……。



## レベル14 始動（後書き）

ども〜

今回は短いということもあり、早々と更新できました。  
いつもこのペースで行きたいものですな……。

一応ここからが第3章ということになります。

では次もできるだけ早く更新できるようがんばります。

## レベル15 不穩

オーベルビリアの中央広場には、今日も多くのプレイヤーがいた。まあさすがにあのオーベルビリアの乱の時ほどではないが。

「ねえねえ、西出入口から出ない？」

サマルガルドからワープした俺達は、オーベルビリアの中央広場にいた。

「なんでだよ、北に行くんだろ？ だったら北出入口の方が近いじゃないか」

オーベルビリアには出入口が北、南、西の3つある。北に向かうなら北出入口から出るのが一番近いのは当たり前のことだろう。

「まあそうなんだけど、あのオーベルビリアの乱って言うの西出入口あつたんでしょ？ 1度見に行きたかつたんだけど、忙しくてまだ行っていないのよ。かなりのプレイヤーが集まったって話じゃない」  
「どうやら茜は、あのオーベルビリアの乱には参加していなかったらしい。」

茜のやつに真実を知られると色々とやっかいだ、できることなら西出入口は避けたいのだが……。

「たしかにあの時はたくさん人がいましたね」  
「思わぬクレアの発言に俺の動きが止まる。」

「え？ なにクレアちゃん、オーベルビリアの乱に参加して……」

「よしや！ 出発だ！」

突然叫び声を上げて茜の言葉をさえぎる。

「え、あ！ ロダさん!？」

そして、無理矢理クレアの腕を引っ張って北出入口に向かって歩き出す。

「クレア君、クレア君」

茜に聞こえないよう小さな声で話す。

「は、はい」

「僕は思っただよ、ああいうことは人にペラペラと話すべきじゃないと。言ってる意味わかるね？」

ふと、横から何かを感じ振り向くと、すぐ近くに茜が立っていた。「ねえ、何の話してるの？」

「い、いや何も」

「ねえ、なにか私に隠してるよね？」

真っ直ぐに見つめてくる茜から思わず目を逸らしてしまう。

「か、隠す？ はっはっはっ、僕が君に隠し事なんてするはずがないじゃないか」

「あっそう。クレアちゃん」

俺から聞き出すのを諦めたのか、茜がクレアの腕を掴んで俺の前を歩き始めた。

「ねえクレアちゃん、オーベルビアの乱の時その場所にいたの？」

今度はクレアから聞き出すつもりだろが無駄だ。さきほど余計なことは喋るなど念を押ししておいたからまず大丈夫だろう。

「え、えーと。その……」

「ねえ教えてよ。じゃあすごい情報を教えてあげるから、クレアちゃんも教えて」

「す、すごい情報ですか!？」

「そうよ。もうすごすぎてびっくりする情報よ」

「そ、それはぜひ聞きたいです!」

「でしよ、だから教えて」

「わ、わかりました……」

大丈夫じゃなかった! 全然大丈夫じゃなかったよ!

クレアは茜の耳に手をあてて、内緒話をし始めた。

しばらくするとクレアが茜の耳から離れ、今度は茜がクレアの耳元で話し始める。茜がなにかを言うたびに、クレアがびっくりしたような声を上げる。

なに? なんなの? すごい情報ってなんなの? 俺もすげえ聞きたいんだけど!

話が終わるとクレアが俺の方を振り向いてトコトコと近寄ってくる。

「ロダさん！ 初心者狩りを倒したのってロダさんだったんですね！」

「それがー！ー！」

初心者狩りのことすっかり忘れてた……。

「まさかオーベルビアの乱の原因があんた達だったとはね〜」

近づいてきた茜が俺に向かって面白そうに言う。

「なんで言うの！？ なんで君らそんなこと言っちゃうの！？」

「まあいいじゃないの、隠し事はよくないわよ。ねえ、クレアちゃん」

ん

「そうですね」

もういい、もう諦めた。

「ロ、ロダさん、まっってくださいよ！」

諦めた俺は、北出入口に向かって早足で歩き出した。

オーベルビアを出てマラトヤ高原を北に、いや北というよりは東北に向かって進むと村が見えてくる。

村と言っても木で出来た家が数件建っているだけの小さな村で、特に名前も決まっていならしい。

そんな村に用などないのだが、先に進むにはこの村に入って反対側から出なければならぬらしい。

「だから俺はいやだって言ったんだよ」

マラトヤ高原を抜けた俺達は村の入口にいた。

「まだそんなこと言ってるの？ やっちゃったものはしょうがないじゃないの」

「すいませんロダさん」

俺に背負われたクレアが申し訳なさそうに言う。

クレアがなぜ俺に背負われているのかは言うまでもないだろうが、例の一撃の必殺魔法を使ったからだ。

オーベルビアの乱の話を聞いた茜が、クレアの魔法をどうしても見てみたいと言い出したのだ。こうなることが分かっていた俺は反対したのだがあえなく却下され、クレアが魔法をぶっ放したわけだ。

「それにしてもクレアちゃんの魔法凄かったわね、あんな凄いの見たことないわ」

それは俺も同感だ。高レベルの茜が言うのだから、クレアの魔法が凄いというのがより証明されたことになる。

まあそのたびに背負われる俺としてはあまり使用して欲しくない代物だが。

「それにしてもこの村、小さいくせにプレイヤーが結構いるな」

ざっと見た限り20人ぐらいはいるだろうか。必ず通らなければならぬとはいえ、こんな何も無い村にプレイヤーが集まるとも思えない。

「この村はね、このゲーム内ではかなり有名な所なのよ」

茜が村の反対側の出口に向かって歩き出したので、俺もそれに続いて歩き出す。

「こんな村が？」

「この村と言うよりも、この村の先にあるものが有名なのよ」

かなり小さい村な為、すぐに反対側の出口にたどり着いた。

村を出ると、道がすぐに急な上り坂へと変わる。人一人を背負ってこの坂を上るのはなかなかの重労働だ。

「有名って、なにがあるんだよこの先に」

「橋よ」

「はしつて、海とか川とか渡るあの橋か？」

「そうよ、それ以外ないでしょ」

しばらく急な上り坂を進んでいくと、坂の終わりが見えてくる。

やっとこの坂も終わりか、と心の中で喜びながら坂を上りきる。

「わ〜！」

上りきった後の光景を見て背中の子が声を上げる。

幅が4、50m近くある木で出来た巨大な橋が真つ直ぐに伸びていた。一体どれぐらいの長さがあるのか、目を凝らして見ても橋の終わりが見えないほどだ。

ここから見えるだけでも、橋の上にかなりの数のプレイヤーがいるのが分かる。

「すごいですね！」

たしかにそうだ、まさかこんな巨大な橋があったとは……。

「はつきりとは分からないけど、全長は4〜5kmあると言われているわ」

4〜5kmつて歩いたら1時間以上かかるじゃねえか。

俺は橋の左右に付いている手すりの隙間から橋の下をおそるおそる覗きみる。

「うっ！」

橋の下は崖になっていて一番下が見えなかった。高いところが苦手なわけではないが、さすがにこの高さはかなり怖い。

しかし、幅が50mで長さが5kmほどもある木で出来た巨大な橋を、この高さに作るのは構造上不可能な気がするのだが。まあゲームなんて構造上不可能なものなんていくらでもあるか、たとえば空に浮かぶ城とか……。

橋の端にいるのは怖いので、真ん中辺りにいる茜の元に小走りに戻る。

「この橋はなんて言う名前なんだ？」

「特に名前は決まっていらないのよ、ただプレイヤーの間では決闘の橋って呼ばれたりするわね」

「決闘の橋？」

「そう、この橋ではPVPがよく行われるわ、だからそんな名前が付いたのよ」

PVPとはPlayer vs Playerの略だ。まあようするにプレイヤーの操作するキャラクター同士が戦うことだ。

PKとPVPの違いは「両者の事前合意の有無」と言ったところだろうか。PVPは相手への了承を取ってからルールを決めて戦ういわゆる決闘みたいなもので、PKは相手の了承を得ずにプレイヤーの操作するキャラクターを攻撃して殺してしまうことだ。PKは一般的なユーザからは嫌われ、あるいは恐れられている場合が多い。なるほど、ここならモンスターもいないし、広さ的にも申し分ない。それに夕日をバックに橋の上で戦うというのが実にいい、たしかにPVPをするには持つて来いの場所かもしれない。

「だからこんなにプレイヤーがいるのか」

「ええ、まあみんながみんなPVPをやりに来てるわけじゃないけどね。ただ鑑賞しに来てるプレイヤーもいれば、私達みたいに通り道だから来ただけのプレイヤーもいるわね」

「え？ 目的地ここじゃないの？」

「違うわよ、目的地はこの橋を超えた向こうよ」

「まじかよ、俺ここで他のプレイヤーの戦い見たいんだけど……」。

「なにしてるの、先に進むわよ」

「そう言っつて茜が一人でどんどん先に進んでいく。」

「ロダさん、もう大丈夫なので降りしてもらっていいですか」

「おう、そうか」

その言葉はできる事なら坂を上る前に聞きたかったな……。背負っていたクレアを降ろして、二人で茜の後を追いかける。

橋の上には所々プレイヤー達が円を描くようにして集まっている。おそらく円の中心ではプレイヤー同士が戦っているのだろう。

プレイヤーの塊を避けながら橋の上を進んでいく。

「なあ、ちょっと見ていこうぜ」

前を進む茜はあまり興味がないうで、人垣には目もくれず歩いている。茜も一応高プレイヤーなのでPVPなど見飽きているのかもしれない。

「この橋長いからさっさと進みたいのよね」

「いいじゃねえか、ちよつとぐらい。クレアも見たいよな？」

「はい！ みたいです！」

そう言つと茜が足を止める。

「は、分かったわよ、少しだけだからね」

なるほどなるほど、クレアはこういう風にも使えるのか覚えておこう。

「よし、いくぞクレア」

「は、はい！」

とりあえず、一番近くにある人垣の中へ突入する。

人垣を進んでいくと、円の中心に一人のプレイヤーが見えてくる。その女プレイヤーは赤い髪を後ろで適当に一つに束ね、腰と胸の部分だけの水着のような銀色の鎧を着いた。そして注目すべきものは肩に担いでるあれだろう、自分の身長より遥かに大きい斧を肩に担いでいるのだ。その斧は刃が左右についており、まあ俗にバトルアックスとか言われている代物だ、

「私は“剛腕”のヒツギ、誰か私と勝負してくれ！」

そう言つてヒツギとかいう女プレイヤーは、担いでいた斧を軽々と左右に2回ほど振る。

2mはある斧をあの細い腕で振り回すとはなんと恐ろしい、まあゲームの見た目なんてものは当てにならない物だが。

「あらあの人、高レベルプレイヤーみたいね」

いつの間にかに俺の横に陣取っていた茜が呟く。

「なんでそんなこと分かるんだ？ てか“剛腕”ってなに？」

「なにあなた、称号を知らないわけ？」

「いや全然、クレア知ってるか？」

茜の反対側に陣取つたクレアに聞いてみる。

「いえ、知りませんね」

「だそうだ、説明しなさい」

「はあく分かったわよ。称号って言うのは、ある一定のレベルを超えたら格プレイヤーに与えられる肩書きというかもう一つの呼び名みたいなもんね。一応称号はそのプレイヤーの特徴とかから決められてるみたいだけど、厳密にはどうやって決まっているかは分からないわ。一般的にこの称号を持っているプレイヤーが高レベルプレイヤーだって認識が高いのよ」

「はくなるほど、だからあのプレイヤーが高レベルだと分かったわけか」

「そう。こういつ対戦時はお互い称号を言い合っつてのが暗黙のルールみたいになってるわね」

「じゃあおまえもあんの、称号？」

「もちろんあるわよ、でもまあ教えないけどね」

「なんでか聞こうと思ったのだが、周りから急に歓声がり聞けなかった。」

「どうやら対戦相手が決まったようで、一人のプレイヤーが円の中心へと進んでいた。」

「そのプレイヤーは長身の男プレイヤーで、右手には細身で先端の鋭く尖った刺突用の片手剣、いわゆるレイピアが握られている。」

「俺はピエールだ、称号はまだない」

「そう言っつて男はレイピアを構える。」

「称号がないと言っつことは、あのプレイヤーは高レベルではないということなのだろう。見た目からすれば明らかにスピード重視のプレイヤーだ、おそらくは相手が力重視のプレイヤーとみて、速さを活かして倒せると踏んだのだろう。」

「速さを活かすというのは正解だろう、俺もあのヒツギとかいうプレイヤーと戦うなら間違いないくそうしている。」

「よし、そのあんちゃん合図してくれ」

「ヒツギが観客の中から適当に選んだ男プレイヤーに向かって言う。」

それを受けたプレイヤーが合図をする。

「じゃいくぞ……3、2、1、ゴー!!」

合図とともにピエールが前に出て、相手てとの距離を一気にを詰める。

おそらく相手の懐にもぐりこむ気だ、あの斧は脅威だが懐に入こめば直撃を食らうことはそうないだろう。

しかしピエールが斧の届く範囲に来ても、ヒツギはまったく動かない。

そのままピエールは相手の首元を目掛けてレイピアを突き出す。

そのレイピアが接触する寸前にヒツギ動いた、斧の柄で地面を軽く叩いたのだ。

「っ!!」

たったそれだけの行為でピエールが後方に吹き飛ばされる。

おそらくはああすることで周囲に衝撃波を放ち相手を吹き飛ばすスキルなのだろう。

吹き飛ばされ地面に転がったピエールはあわてて立ち上がるうとするが、ヒツギが巨大な斧を担いでるとは思えないスピードで距離を詰め、上段に構えた斧をピエール目掛けて叩きつける。

斧が地面に叩きつけられる音とともにこの勝負の勝者が決まった。ほんの5、6秒で終わってしまった、あまりの速さにしばらくの間沈黙が流れる、そして周囲から大きな歓声上がる。

「っ、つええ！ あれが高レベルプレイヤーか……」

思わず俺の隣にいる高レベルプレイヤーを見てしまう。こいつもこれ並に強いのだろうか……。

「もっと骨のあるやつはおらんのかー!!」

斧を担ぎなおしたヒツギが周囲に向かって叫ぶが、どうやら今の戦いを見て勝てると思ったやつはいないのか誰も前に出ようとはしなかった。

「さて、そろそろ先に進むわよ」

そう言って茜が人垣から外へと出ていく、俺とクレアもその後

続いて外へと出る。

「いやー、すごかったなクリア！」

「はい！ あの女の人すごく強くてかつこよかったですね！」  
人垣を抜け、とりあえず一旦立ち止まる。

「私もいつかあの人みたいに強くなれますかね？」

「お、おう……、なれるさ、いつかきつとたぶんな……」

「すまんクリア、たぶんおまえは無理だと思っぞ……」

「おい、あれ“生徒会”じゃないか？」

「あ、ほんとだ」

ふとそんな会話が聞こえてくる。

周囲を見渡してみると、少し離れた所から二人のプレイヤーがこちらを見ていた。

こちらというよりは茜だろうか、“生徒会”は結構有名なギルドだという話しはどうやら本当のことらしい。

「さあいい加減先に進みましょうか」

有名にもなるとこんなことはよくあるのだろう、聞こえているであろう茜は特に気にした様子もなく歩き始める。

「そういえばさっき“新撰組”も通って行ったよな」

「ああ、それなら俺も見たぞ」

この会話を聞いた瞬間、茜の足が突然止まる。

「あぶな！ おい、どうしたよ」

いきなり止まるものだから、危なく茜に後ろから体当たりをかましてしまうところだった。

「ご、ごめん、ちょっとここで待っていてくれない」

「お、おい！」

そう言っただけ茜は今の会話をしていた二人のプレイヤーの方へ走っていった。

「どうしたんですかね茜さん？」

「“新撰組”……」

茜は“新撰組”という言葉に反応したような気がする。

「“新撰組”ってなんなんですか？」

「俺も前に少し聞いただけんだけど、“新撰組”も結構有名なギルドの一つらしい」

以前“生徒会”について調べた時に、“新撰組”という名前も何度が聞いた気がする。

しかし茜がなぜ“新撰組”に反応したのかは検討もつかない。

「ん〜、ここはちょっと誰かに聞いてみたほうがいいのかもしれんな」  
俺はさっきの人垣に戻ってみることにした。

そこではまだ次の対戦相手が見つからないのか、ヒツギが斧を担いで対戦相手を待っていた。

俺は横にいた男プレイヤーに話しかけてみる。

「あの〜、私このゲーム始めたばかりで分からないことがあるんですけど、教えてもらえませんか？」

「ん？ ああ、いいよ」

「“生徒会”と“新撰組”ってギルドがありますよね？ そのギルドってなんかあるんですか？」

「ああー、あのギルドね。結構有名な話んだけど、“生徒会”と“新撰組”はあんまり仲が良くないんだよ」

「へ〜、なんでなんですか？」

「そこまでは俺にも分からないけど、噂では何かを取り合ったとかまあ物までは分からないけど」

「そうですね、ありがとうございます」

俺は人垣を離れクレアがいたところまで戻る。

「“生徒会”と“新撰組”は、なんか知らんがあまり仲が良くないらしい」

「そうなんですか……」

仲が悪い、それだけにしては茜の反応が変わったような気がする。なにか“新撰組”がいたらまずい理由があるのだろうか？ ギルド同士で何かを取り合っていたというのも気になる。

まあここから先は茜に聞くしかないだろう。

変な事にならなければいいがな、そんな事を考えながらクレアと茜の帰りを待った。

## レベル16 確信

数分すると、茜は早足で俺達のいる場所へと戻ってきた。

「悪いけど遊んでいる時間がなくなっただわ、急いで先に進みましょう」

茜は帰ってくるなりそう言って橋の向こう側へと早足で歩き始める。ついさっきまでとは明らかに違い、焦っているのがはっきりと分かる。

ここで色々聞くつもりだったが、どうやらあまり時間がないらしい。仕方がないので歩きながら聞くことにした。

かなり早いペースで歩いて行く茜に遅れないよう、俺とクリアも早足で歩き始める。

「なにをそんなに急いでるんだ？」

茜に追いついて横に並んだ俺は、とりあえずそんな事を聞いてみる。

「……私達が来る数分前に“新撰組”の連中がここを通って行ったみたいなのよ」

やはり“新撰組”か。しかしなぜ“新撰組”がここを通ったらまずいのか分からない。

「“新撰組”がいたらなんかまずいのか……？」

茜は俺の質問に答えず、無言のまま歩き続ける。

仕方がないので俺も無言のまま茜の横を歩き続けた。

この橋の全長が5kmぐらいだとすると、大体橋の半分ぐらいまで来た時だろうか、茜がついに口を開く。

「私達が今向かっているのはあるアイテムを手に入れる為よ、“新撰組”の連中もそれを狙っているわ」

アイテムか……。 “生徒会”も“新撰組”もどちらもこのゲームではかなりのギルドになるはずだ、その両方のギルドが狙うアイテムということは相当なレアアイテムなのだろう。

「そのアイテムはちょっと特殊でね、いつどこに出現するのかまったくわからないの。色々情報を集めてるんだけどそのほとんどがガセ情報。今回もそうだと思ってたんだけど……。もし新撰組”の連中がたまたまここを通ったのならいいんだけど、もし私達と同じ目的で通ったのなら……。当たりの確立が一気に高くなるわ」

たしかに同じアイテムを狙っている“新撰組”が動いたのなら、今俺達が向かっている所にそのアイテムがある確立が高くなるわけだ。

しかしいつどこに出現するか分からないアイテムというのが気になる、しかも話からするとかなりのレアアイテムのはずだ。

「なあ、そのアイテムって……」

アイテムの事を聞こうと横を向くが、ついさっきまで横にいた茜がいない。

立ち止まって後ろを振り返ってみると、茜は俺の2mほど後ろで立ち止まっていた。

「おいどうした……」

「動かないで！」

茜のいるところまで移動しようとしたのだが、思わぬ茜の声で動きが止まる。

「そのまま前を向いて、橋の向こう側を見て」

茜に言われるまま元の方を向いて橋の先をしてみるが、相変わらずプレイヤー達が所々人垣を作っていたりしているだけで特に変わったことはないように見える。

「だいぶ離れてるけど青色の服を着た二人組みが歩いてるでしょ」

茜が俺の背中に隠れながら200mほど前にいる二人組みを指差す。

青というよりは水色に近いだろうか、この距離からでは読めないが背中に漢字のような物が一文字書かれている服を着た二人組みが俺達と同じ方向に歩いていた。

「……あれが“新撰組”か」

なんで分かったのかは簡単だ、時代劇なんかで見る新撰組の羽織とほとんど同じだったからだ。おそらく背中の中の文字は誠という漢字だろう。

「で、どうするんだ？」

「とりあえずこの距離を保ったまま進みましょう。悪いけど二人とも並んで私の前を歩いてくれる？ 私はあいつらに見られたら一発ではれるから」

たしかに“新撰組”が俺達と同じ目的だったら場合、ここで見つかるのはあまり得策ではない。

とりあえずは茜の言う通りにすることにした。

クレアと手が当たりそうなほどの距離で横に並び、相手に近づきすぎないように気をつけながら歩いていく。

歩きながら前を歩く二人を観察してみると、この距離から見てもなかなか目立つ格好だ。格好のせいなのか、“新撰組”が有名だからなのかは分からないが、近くを通る度にプレイヤー達が二人をちらちらと見ている。今俺の背中に隠れているやつもそうだが、なんでそう目立つ格好をしているんだか……。

そんなことを考えながら歩いていると、突然“新撰組”の一人がこちらを振り返る。

思わず止まりそうになる足をなんとか動かして歩き続ける。

「クレア歩くペースを変えるなよ」

顔を動かさずに、早口で横のクレアに言う。

「は、はい」

緊張したような声でクレアが返事をする。

そいつは2、3秒ほど後ろを見ると、すぐにまた元の方へと向き直った。

「ふ〜、どうやら気づかれてはいないみたいね」

茜が後ろから安心したような声を上げる。

「ああ、そうみたいだな。しかしどうするんだ、もうそろそろ橋も終わりだろ？」

今は数多くのプレイヤーがいるから気づかれていないが、橋が終わればプレイヤーが一気に減る、そうなればおそらくばれてしまうだろう。

「橋が終われば来た時と同じような急な下り坂があつてその先に小さな村があるわ。その村は出入口が南と東の2つあるんだけど、私達の目的の場所はその村から南に真つ直ぐ行った所にあるの。あいつ等が東から出れば私達とは違う目的で来たつてことになるから、私達はそのまま南に行けばいいわ。でももし南から出たら私達と目的は同じと考えていいわね、その場合はちょっと遠回りになるけど私達は東から出ましよう、急げばあいつ等よりも先に着けるはずよ」  
相手の動きに合わせて動くというわけか。

「よし分かった、それで行こう」

その後“新撰組”の二人はこちらを振り返ることも、特におかしな行動をすることもなく歩き続けた。

俺達はほぼ一定の距離を保ちながら後を付け、橋の終わりまでたどり着く。

橋が終わると50mほど平面が続いた後、道が下り坂へと変わつていた。

俺はその坂を降りる前に1時間ほど歩いた巨大な橋を振り返える。これが終わつたらもう一度一人で見にこよう……そう心に誓い決闘の橋を後にした。

「……よかつたわ」

坂を下りながら茜が呟くようにそう言った。

「なにが？」

「“新撰組”の中でも一番厄介で相手にしたくない奴がいるんだけど、どうやらそいつはいないみたいね」

前を歩く二人とはだいぶ離れているが、どうやら茜はこの距離からでもその厄介な奴とやらいないのが分かつたらしい。

「厄介な奴つて？」

高レベルの茜が厄介というのだ、おそらくかなりめんどくさい奴

なのだろう。

「“新撰組”の沖田……間違いなく最強プレイヤーの一人よ」

「沖田……」

“新撰組”で沖田とはかなり出来すぎだな……。まあ名前はランダムで決まるので沖田という奴がいても不思議はないか。あとはそいつが自分で“新撰組”というギルドを作るか、“新撰組”というギルドに入れば“新撰組”の沖田になるわけだ。

坂を下りると橋の反対側と同じような小さな村があった。

“新撰組”の二人はその村の中心へと真っ直ぐに向かっていく。

「このまま中央を真っ直ぐ進めば東出入口、右に曲がれば南出入口よ……」

二人は村の中央で一度立ち止まり何事か話した後右へと曲がる、つまり南出入口へと向かったのだ。

「やっぱり私達と目的は同じみたいね……」

とりあえず俺達も中央まで移動して二人が行った南出入口の方を確認する。

二人は家の影に隠れてすでに見えなくなっていた。

「こうなったら仕方がないわね、東から出てあいつらより先に目的地にたどり着くわよ」

「はあ、なんかめんどくさい事になってきたな……」

「仕方ないでしょ。ほら時間ないんだからこっからは走るわよ。クレアちゃんも大丈夫？」

「は、はい大丈夫です」

そして俺達は東出入口に向かって走り出した。

村から出た俺達は真っ直ぐに伸びた道をひたすらに走り続けた。

村の外には広々とした緑色の平原が広がっており、緩やかに起伏する平原の向こうには青々とした山並みが見える。

こんな天気の良い日はこの雄大な光景を眺めながらのんびりと歩きたいものだ……。

そんな事を考えながら走っていると、道がTの文字になっている

分かれ道が見えてくる。

「あれを右に行けば連中が通っている道と繋がるわ」

そう言っただけで右へと曲がる茜に俺とクレアも続く。

「あそこを左に曲がったらどこに行くんだ？」

「だいたい距離があるけど街があるわよ」

街か……そこにもあとで行ってみるかな。

そのまましばらく走っていくと右のほうに道が見えてくる、その道が数十m先で俺達が通っている道と繋がって一つになっていた。

「どうやら連中はまだ来てないみたいね」

二つの道が繋がった場所で一度止まり、茜が息を切らしながら前後を確認してそう言った。

俺も息を整えながら確認してみるが、たしかに“新撰組”の姿は見えない。遠回りしたとはいえかなりの速さで走ってきたのだ、“新撰組”がすでにここを通りすぎて行ったとは考えにくい。

「その目的の場所ってのまだ遠いのか？」

ここまで走ってくるのに結構体力を使った、ここからまだ先が長いのなら走り続けるのはかなりきつい。それに俺と茜はまだいいが、魔法使いのクレアはそう長くは走り続けられないだろう。

「あれ見えるでしょ」

そう言っただけで茜が指差す方には広範囲に木が密集している森が見えた。木の葉が一面に並んでいるその奥に、一本だけ他の木より数倍の大きさの木が空に向かって突き出ていた。

「守護の森、そしてあの大きな木が私達の目的の場所……世界樹よ」

俺達は幅が3mほどの道を歩いていった。

左右にはほとんど隙間がないほどに木が生えており、空は左右から伸びた枝と葉で半分以上が埋め尽くされている。その葉の隙間から太陽の光が縫うように、俺達が進む道を照らしている。

茜いわく守護の森とは、中心にある世界樹をまるで守るかのよう  
に森が形成されていることから付けられた名前らしい。

ふと、前を歩く茜が足を止める。

分かれ道だ。道が左右に分かれ、Yのような形になっている。

茜は2、3秒ほど考えた後、左に向かって歩き出した。

この森に入ってから4回ほど左右に分かれた道を通ってきた、茜  
が世界樹への道を覚えていたらしく特に迷うことなく進んでいた。

「妙ね……」

周囲を見渡しながら茜がそう言った。

「ああ、俺もそう思ってた……」

俺もさつきから変だとは思っていた。だが俺はここに来たことはないし、もしかしたらそういう場所なのかもしれないと考えていたのだが、茜も変だと思うところを見るとどうやら間違いではないらしい。

「なにが妙なんですか？」

横を歩くクリアが不思議そうな顔で聞いてくる。

どうやらクリアは気づいていないらしい、まあクリアはRPGになれていないから気づかなくても仕方がないだろう。

「村からここまで、一度もやってないことがあるだろ」

「え、えーと………休憩………ですか？」

「………先を急ぎましょう」

「そうだな」

そう言っ  
て俺と茜は早足で歩き出した。

「あ！ 待つてく  
ださいよ！ す、す  
いません………  
全然分かりませ  
ん」

慌てて追いついたクリアが俺の横の位置に戻る。

「戦闘だよ、戦闘」

「戦闘ですか？」

「ここまで言っても分からないらしく、クレアは不思議そうな顔で俺を見つめている。」

「いいか、村からここまで一度もモンスターと遭遇していないんだ。あの広いフィールドならまあ分かるが、この森に入ってから結構な距離を進んでるのに一度もモンスターと合わないのはおかしい」

「そう言われればそうですね」

「おそらく原因は……」

「そこまで言っただけが口を閉ざす。」

「分かるのか？」

「たぶんだけども、まあこの先に行けばはつきりすると思うわ」

原因があるとすれば一番考えられるのは、誰かが俺達の少し前をモンスターを倒しながら進んでいる、といったところだろうか。

たまたまモンスターと遭遇しなかった、というのもまあありえないことではないがさすがにそれはないだろう。

その後2回ほど分れ道を通りすぎ、少し開けた場所へとたどり着いた。

そこからさらに先に進むと、幅が2m、延長が30mほどの吊橋が見えてくる。

「あの橋を渡れば世界樹はもうすぐそこよ」

近くまで行き、橋の下を覗いてみると10mほど下を川が流れていた。

さっきの決闘の橋ほどの高さはない。さすがにあの高さは怖すぎた、まあこの吊橋はなかなか揺れそうではあるが……。

「やっと目的の場所に着くのか」

なんか尾行したり走ったりして疲れた、さっさと終わらせて雀の涙でアイスコーヒーでも飲みたいものだ。

そんなことを考えながら一番最初に吊橋へと足を掛ける。

「避けて！」

突然後から茜の叫び声上がり、それとほぼ同時に背後で小さな

爆発音が上がる。

俺は急いで後ろを振り返りながら、半分無意識の内に思考を“加速”させていた。

“加速”を発動させると、一気に自分の動きがビデオのスローモーションのように遅くなる。

今の爆発音はおそらく銃声。つまり背後から誰かにいきなり攻撃されたのだ、この状況で攻撃してくるのは奴等しかありえない。

背後を振り返ると、数m先に俺の顔面を目掛けて小さな何かが向かって来ていた。

間に合う！ そう確信して首だけを右にずらす。

その瞬間、顔の数cm左を青色の銃弾が走り抜ける。

あまりにもぎりぎりすぎて全身の毛が逆立つのを感じた。もし茜が叫ばなければ命中していた、そしてあれに当たれば間違いなく死んでいただろう。

「今のタイミングであれを避けるとはなかなかいい反応ですね」

そうやって木の陰から一人のプレイヤーが出てくる。

時代劇で見えるような新撰組の青い羽織に黒のズボン、黒い色の髪にメガネを掛けた男プレイヤーだった。右手には15cmほどの黒い拳銃が握られていた。

「予告なしでいきなり撃ってくるとはどういうことだ？」

俺がそういうと男は俺達の15mほどで手前で立ち止まる。

「いや、すみません。手がすべってしまったんですよ」

「ほー、なるほど。手がすべって人の顔面に的確に飛んできたわけか」

「ええ、まあそうなりますね」

男は屈託のない笑顔でそう答えた。

これはなかなか食えない男である、俺はどうするということ意味を込めて茜を見る。

茜は俺の視線に気づき、男を警戒しながら俺に近づいてくる。

「こいつは私がかんとかするから、私が合図したらクレアちゃんと

先に進んで」

「大丈夫なのか？」

「私を誰だと思ってるのよ、“生徒会”のメンバーよ」

「……分かった」

クレアにも聞こえたらしく、クレアも無言で頷いた。

「行つて！」

茜の合図があがった瞬間、俺とクレアは世界樹に向かって走り出した。

## レベル16 確信（後書き）

ども〜。

前話を更新して約2ヶ月が経ち、そろそろ更新しないとやばいな、  
と思い始めようやく更新することができました。

こんな感じで更新は遅いと思いますが、今後ともよろしく願います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1669/>

---

RPGで一番大切なもの

2010年12月6日11時10分発行